

地の果てにまで 主と共に

—ミャンマー宣教の証し—

(増補改訂版)

伊藤 仁&ソジョン

地の果てにまで 主と共に

—ミャンマー宣教の証し—

目次

- 1、なぜ、ミャンマーへ？
- 2、生活の適応
- 3、何も思いわずらわないで（ソジョン・記）
- 4、カーセヤが買った車（ソジョン・記）
- 5、ミャンマー語と「証しトラクト」
- 6、国籍が賜物
- 7、「出て行って」福音を
- 8、若者たちの「宗教」
- 9、宣教報告旅行の祝福
- 10、私の家は天国に
- 11、「GO」と「STOP」
- 12、受洗者第1号
- 13、やっと生まれました（ソジョン・記）
- 14、民族の壁を崩すイエス様（ソジョン・記）
- 15、ヨセフ訓練学校
- 16、奇跡は起きる、信じれば（ソジョン・記）
- 17、短期宣教旅行の祝福
- 18、ミャンマーの全ての部族・地域に教会を（ソジョン・記）
- 19、滅私奉公
- 20、ミャンマーで父の学校
- 21、愛希ちゃん受洗
- 22、様々な困難
- 23、パレイ教会開拓伝道
- 24、ホーム・スクール
- 25、一冊の本から宣教へ
- 26、教会開拓者セミナー
- 27、未伝地へ引越し
- 28、WUPM（世界未伝道部族宣教会）との出会い
- 29、ついにミャンマー宣教再開
- 30、会堂と家の建築
- 31、「蒔いた種は無駄にならない」チャートン村の話
- 32、青年セミナー
- 33、タウンヨー族カンドー村伝道

- 34、 ガユナー教会の成長
- 35、 雄基が聖書学校へ
- 36、 祈りの家（ソジョン・記）
- 37、 ガユナー聖書学校、1 か月間の熱い闘い
- 38、 ソジョンの手術とその後
- 39、 雄基の神学校入学と日本への一時帰国
- 40、 WUPM Japan は、こうして始まった

おわりに

付録

- 1、 本当の友達
- 2、 宣教への導き
- 3、 降りていく愛
- 4、 救いの証し（ソジョン・記）
- 5、 宣教師への召命の証し（ソジョン・記）
- 6、 宣教は大変？
- 7、 あなたは宣教者タイプ？！チェックテスト
- 8、 宣教のハードルを下げる
- 9、 ミャンマー語、これだけ知っていれば大丈夫！
- 10、 伊藤仁 略歴
- 11、 伊藤ソジョン 略歴

1、なぜ、ミャンマーへ？

私は以前から、宣教師になりたいと思っていて、世界宣教のビジョンを持ってずっと祈っていました。しかし「ではどの国に行くか」というのは、はっきりわかりませんでした。まだ福音の届いていない未伝道部族のことについて、色々と資料を見て調べたりもしました。でも、具体的な行き先については、主の導きにゆだねることにしました。

そんなとき、私が牧師をしていた教会に、ミャンマー人の牧師先生である、ドピ先生が訪れました。彼は、ミャンマーの宣教事情について色々と話してくれました。私は、「私も以前から、世界宣教のビジョンを持っていたんですよ」と言いました。そうしたら、彼は、「じゃあ、あなたがミャンマーに来ればいいですね」と言いました。私は、こう答えました。「そうですね。行けたら行きたいですね……。」ところが、この出会いがきっかけとなって、教会側が「じゃあ、伊藤先生をミャンマーに派遣しよう」ということに「急きょ」決定して、その3週間後には、私は飛行機に乗ってミャンマーへと旅立ったのです。2002年、12月2日のことでした。

と言っても、私はミャンマーの言葉も文化も、何も知りませんでした。ミャンマーについて知っていたことと言えば、「ビルマの堅琴」「軍事独裁政権」「アウンサン・スーチー」「仏教国」「貧困」「マラリヤ」「暑い」……。私の心に突然、心配と恐れが波が襲って来ました。「そんな大変な所で、宣教なんてできるんだろうか……。」

しかし主は、私のために、全てを備えて下さっていました。まずは、ミャンマー第1の都市ヤンゴン（旧ラングーン、現在首都はネピドーに移転）ではなくて、内陸の第2都市マンダレーに導かれたことです。私は最初、ヤンゴンに住もうと思っていたのですが、ドピ先生が「ヤンゴンは教会がもう多いから、マンダレーで宣教するほうがいい」と強く勧めて、自分の親せきが牧会している教会（トリニティー教会）を紹介してくれました。それで結局、言われるままにマンダレーに住むことにしました。……後でわかったのですが、ヤンゴンは政府当局の監視が厳しくて、自由に宣教ができず、常に緊張感があります。でもマンダレーは、比較的ゆるやかで、大学などにも自由に入れるのです。もしヤンゴンに住んでいたら、学生伝道なんて難しかったと思います。それに、マンダレーは、ミャンマーの中心に位置していて、奥地の未伝道部族の人たちが多く集まっています。（ミャンマーには135の部族があります。）何よりも、トリニティー教会との信頼・協力関係の中でスタートしたので、色々な面で助けを受けることができました。とにかく、私たちがマンダレーに住むようになったのは、本当に主の導きでした。

そして、ビザのことも、主の備えがありました。私は最初1人で、妻のソジョンと生後5カ月の息子、雄基（ゆうき）を置いて、ドピ先生と一緒に1か月の観光ビザで入国しました。しかし、長期ビザを取るのに良い方法が見つからず、いったん帰国しました。次にどうしたら良いかわからなくて、悩んでいました。しかしそのすぐ後で、ドピ先生から電話があって、「タイのバンコクでビジネスビザを取る方法があるらしい」という情報を得ました。それで今度は、家も全部整理し、退路を断って、ソジョンと雄基を連れて、信仰によって日本を飛び立ちました。バンコクに行って、ある旅行社に行き、「私たちはミャンマーでビジネスをやるので、ビザを取ってほしい」と言いました。すると、何の証明書も紹介状もなしに、彼らが「何かの不思議な方法」で、ビザ（10週間、つまり約2か月半）を代行で取ってきてくれるのです。これに

は驚きました。それで、私たちは、名前だけのビジネス、あるときはファッションデザイナー（ソジョンが日本でファッション関係の仕事をしていたので）、あるときは日本語教師です、と言って「ビジネスマン」となって堂々と入国できたのでした。これも、考えもしなかった主の奇跡でした。

その1年後のことですが、ビザの現地での延長が突然できなくなって、2か月半ごとに、バンコクにいったん出て、3、4日かけてビザを取り、再入国しなければならなくなりました。そのたびに家族全員で飛行機に乗って出入国するので、そのためにお金と時間と労力がかかり、とても大変でした。しかし、私たちは発想を変えて、「これも家族旅行だ、まだ国外追放されるよりましだ」と考えることにしました。実際、雄基は「また飛行機に乗れる！」と言って喜んでいました。それで、あきらめずに、他の方法を探しながら、忍耐持って祈り続けました。そうするうちに、6年後の2009年5月からは、奇跡的に（どういう方法なのか、いまだによくわかっていません）、やっと1年ビザを取ることができました。……主は私たちの祈りに応えて下さり、不可能を可能に変えて、宣教の道を開き、全てを備えて下さるのです。ハレルヤ！

2、 生活の適応

このようにして、ミャンマーに住み始めたのですが、最初はやはり大変で、毎日生きるのが戦い、といった感じでした。

(1) 電気：一番大変だったのは、電気が来ないことでした。マンダレーでは、電気が8時間来ると、次の8時間は停電、というような体制になっていて、しかもその来るはずの8時間のときも時々停電、来たとしても電圧が低くて（本来なら220ボルト、しかし来るのはいつも100前後）電球がぼんやり光る、といった有様でした。なので、クーラーはせっかく買ったのにほとんど使えず、冷蔵庫の中も温かくなってみんなくさってしまい、扇風機も止まってしまうのであおいでいるしかありませんでした。停電のときは、真っ暗な家の中を、懐中電灯とろうそくで生活しました。ろうそくだと、風でゆれて本も読めないの、早く寝るようにしました。毎晩ろうそくをつけながら「うちは毎日クリスマスのキャンドルサービスだね」と冗談を言いました。満月のときは、月の光がこんなにありがたいものか、と思ったものです。深夜になると、電圧が少し高くなるので「今がチャンス」とばかりに、水を貯水槽に送るポンプを回しました。変圧器を見守りながら、水が一杯になるまで寝ないで1、2時間待っていなければなりません。これをしておかないと、後で貯水槽に水がなくなったとき、水を送ることができなくて、断水になってしまうのです。それから、一番困ったのは、周りの家はみんな電気が来ているのに、私の家だけ来ていないときでした。風で電線の接続が悪くなっているの、長い竹ざおを持って、それをつなげるのです。中々うまくいかなくて、見るに見かねた近所の人、いつも助けてくれました。家に発電機が置いてあったのですが、古くて大きいタイプのものでした。大家さんが来てやってくれと、一発で回りますが、私が汗を流して、息を切らしてどんなにがんばっても、重くて全然回らないのです。だから、あってもほとんど使えませんでした。

(2) 暑さ：マンダレーは内陸の盆地で、ミャンマーの中でも特に暑く、一番暑い 4、5 月には、夜の室内気温が 35 度以上にもなります。夜は汗だくで寝られず、風がある時だけ少し寝られる、といった感じでした。全身あせもができて、かゆくてたまりません。昼はだるくて何もできず、ばててしまって何も食べたくありません。やせてしまって、当時の写真を見るとほおがこけていました。また、マンダレーは蚊が多いので、一日中蚊取り線香をたいて、夜は蚊帳の中で寝ました。11 月頃になると、今度は急に寒くなって、セーターが必要なくらいになります。季節の変化に体がついていけなくて、風邪をひいて鼻水やせきが止まらず、寝込んだりしました。

(3) 食べ物：ミャンマーの食べ物は、辛くてあぶらっぽいものが多いです。でも、家ではソジョンが料理をしてくれるので、私たちの家族に合った味で食べることができます。ただ困ったのは、市場に行っても、必要な材料が中々手に入らないことです。日本のものなどは、ほとんどありません。マンダレーは内陸なので、海の魚はあまりありません。川の魚は、細かい骨が多くて、食べるのが大変です。肉は、豚や鶏をほふったばかりのものが、そのまま露店で売られています。ハエが集まっていて、見ただけでは新鮮で安全なのか分からず、手が出せませんでした。そういうわけで、我が家の食卓は、いつも野菜と卵でした。たまに、韓国のソジョンの実家から、肉や魚の缶詰などが送られてくると、それはもう大変なごちそうでした。

(4) 交通手段：どこへ行くにも、自転車で行きました。家族 3 人、私は雄基を背中に背負って、暑い炎天下の日差しの中、麦わら帽子をかぶって行きました。教会や大学など、30 分以上かけて行きました。道はガタガタで、水たまりが多く、良い道を選んでいくのが大変でした。道の途中でタイヤがパンクして、困ったことが何度もありました。そんなときは、近くに自転車修理屋を見つけるまで歩いて自転車を押して行かなければなりません。それで、いつも「途中でタイヤがパンクしませんように」と祈って行きました。大雨に降られて、何時間も雨宿りしたときもありました。夜は、信号も街灯もなく真っ暗の中、車やバイクも多くて、とても危険でした。道を横切るには、相当の勇気と覚悟が必要でした。外出するだけで疲れて、家に帰るとバツタリと倒れ込む感じでした。

(5) その他：洗濯機がなくて、たらいに水を入れて、洗濯物と洗剤を入れて、ソジョンがゴム手袋をつけて手で洗い、私がそれを足で踏んでゆすぎました。洗濯物が多い時は 2、3 時間以上かかり、それを屋上に干した後は、もう疲れて何もできませんでした。温水のシャワー器もなかったので、水でシャワーしました。冬にはあまりに冷たくて、いつも「ワーッ」とか声をあげていました。ソジョンと雄基は、ガスになべでお湯を沸かして、それを風呂場に持って行って、水でぬるくして使いました。

・・・とにかくこの頃は、毎日生活すること自体が大仕事であり、まさにサバイバルでした。

しかし、ミャンマーに来て 5 年くらいたってからは、このような生活にも慣れてきました。色々な「生きる術」を身につけ、財政的にも祝福されて来ました。特に、新しい家に引っ越し

てからは、だいぶ状況が改善されてきました。

- ① 電気：家に性能の良い大型発電機が置いてあって、スイッチ一つで回せるようになりました。これは、私たち一家にとって、生活の「革命的变化」をもたらしました。燃料のディーゼルさえ入れておけば、いつでも電気が使えるのです。また、ディーゼル代を節約するためには、大きなバッテリーに充電しておいて、停電の時に蛍光灯をつけることもできるようになりました。
- ② 暑さ：この発電機のおかげで、クーラーをつけて夜も涼しく寝ることができるようになりました。また、新しい家は、構造がとても涼しくて、外が暑くても家に入るとひんやりしていて、とても過ごしやすくなりました。
- ③ 食べ物：マンダレーにも、近代的で大きなデパートが建てられて、そこに行けば、輸入品や、パックに入った「肉」なども、手に入るようになりました。
- ④ 交通手段：タクシーを使うようになりました。家から教会までが片道約 10 分、2 千チャット（約 2 百円）で済みます。本当にラクになりました。
- ⑤ 洗濯機も買いました。「ボタンを押すだけで洗濯してくれるなんて、なんてありがたいんだろう！」と思ったものです。温水シャワー器のおかげで、寒い夜でも温かいお湯でシャワーできるようになりました。

・・・とにかく、ミャンマーに来たばかりの最初の頃と比べると、夢のようです。本当に主に感謝します。

3、何も思いわずらわないで（ソジョン・記）

ミャンマーに来たばかりの頃は、とにかく何も知らなかったので、あらゆることが心配の種でした。

- ① 昔の家の後ろの家は、お坊さんが住んでいて、夜になると毎晩、長い間お経を読む声が聞こえていました。ある雨の日、その日のお経は何か変な声で、しかも長々と続きました。私は、とても気になって、気持ちが落ち着きませんでした。それで、「これは霊的戦いだ」と思って、私も負けないように、熱心に祈って対抗しました。ところが、あの変なお経の音が、いつまでもたっても終わらないのです。何だろうと思って、よく聞いてみました。そうしたら、何とそれは、カエルが合唱する声だったのです！低くて良く響く声だったので、お経の声だと勘違いしたのでした。
- ② あるとき、ある都市でデモと暴動があった、というニュースを聞きました。それを聞いて、私はとても心配になりました。マンダレーでも暴動が起きたらどうしよう。そんなことを考えながら、夜、寝ました。次の日の朝、目を覚ますと、外で遠くから、ワーワーと群衆が騒ぐような声が聞こえてくるではありませんか！ 私は、主人を起こして、「マンダレーでも暴動が起きたに違いない」と言いました。ところが主人は、「そんなわけがない」と言って、聞き入れてくれません。では、あの声は何だったのでしょうか。しばらくして、その正体がわかりました。それは、朝、鳥の大群がワーワーと鳴く声だったのです！ニュースを心配していたので、全てがそのように聞こえて、暴動だと思い込んでしまったのでした。

- ③ となりの家の夫婦は、時々大声でけんかをしていて、その声がよく聞こえてきました。ある日、「ウオー」と泣く声が聞こえました。「これは、となりの家のご主人が、奥さんを虐待しているに違いない」と思いました。そして、それを主人（仁）に言ったら、主人は、「それは絶対違う」と言って、全く信じてくれません。それで、私と2人でしばらく議論が続きました。私は、「そうに違いないのに、何で信じてくれないんだ」と思って、とても怒りました。その日は結論が出ないで、とにかく寝ました。次の日の夜、またあの「ウオー」という叫び声が聞こえてきました。ところが、その声は、昨日とは別の所から聞こえてきます。そして、なぜか汽車が汽笛を鳴らすときに、いつも聞こえてくるのです。よく聞いてみると、その声は、「犬の遠吠え」でした。後でそれを主人に言ったら、主人は「だから私が言ったじゃない」と言って、2人で大笑いしてしまいました。
- ④ ビザを取るために、バンコクに行った時のことです。韓国の私の実家と電話で話しているとき、母が「カンボジアで旧ソ連製の古くて小さい飛行機が墜落事故に遭ったそうだから、気をつけるように」と言いました。その後、主人が、ヤンゴンに帰る飛行機を、いつものタイ航空ではなくて、もっと安い「バンコクエアウェイ」にした、と言って来ました。私は怒って「何でそんな聞いたこともない航空会社にして、古くて小さい飛行機で、墜落でもしたらどうするの!」と言いました。その日の夜は、大ゲンカになりました。それでも、最後は主人の決定に従うしかなくて、しぶしぶ受け入れました。でも、もともと「飛行機恐怖症」の私は、心配でたまりませんでした。次の日、空港で「バンコクエアウェイ」の飛行機に乗って見たら……とても大きくて良い飛行機でした。タイ航空と、それほど変わりませんでした。機内食もおいしくて、結構満足でした。主人は私に「どうだ、バンコクエアウェイは?」……私は恥ずかしくて、何も言えませんでした。
- 「何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。」(ピリピ4:6, 7)

4、 カーセヤが買った車（ソジョン・記）

最初、2003年にミャンマーに来た時は、3人家族でした。最初の2年間は、信仰だけで生きていた苦労時代でした。自転車2台で、5か月の赤ちゃんだった長男の雄基を主人が背負って、デコボコの道を炎天下で何時間も移動するだけで、かなりのパワーを使っていました。しかし、夢に見た宣教地で、家族で共に過ごせる喜びの方が、もっと大きかったです。全てが不思議で、初めての探検時代でした。そのうち家族も増えて、私が住んでいるマンダレーでの一般タクシーである「レーベイン」（4輪車の意味）を使うようになりました。タクシーとは言え、バイクと車の中間ぐらいの古い乗り物です。窓はないし、荷台の上に屋根が付いていて、椅子も板の上に座布団みたいなのがあれば、いい方です。たしか、50年以上前の日本製の「マツダ」らしいけど、日本では見たことがありません。この国では、「セヤ」は先生の意味で、女性は「セヤマ」と呼びます。私たちもここでは、「セヤ・イトー」「セヤマ・ソジョン」と呼ばれています。また、面白いのは、職人にもこの「セヤ」という言葉をよくつけます。たとえば、運転手は「カ

ーセヤ」(CAR、すなわち車の先生)、電気技術者は「ミーセヤ」(ミーは電気のこと)、水道技術者は「パイプセヤ」、などなど。私たちが今いつも使っているカーセヤと出会ったのは、3年前のことです。他のタクシーの運転手よりも誠実で、しょっちゅう壊れる家の修理から掃除まで、とても良くやってくれます。彼は未信者ではあるが、私たちを通して福音を聞き、少しずつ心を開くようになりました。そして「子どもを見てくれる」という名目で、教会の日本語教室に「同室」するようになりました。・・・・・・ところで、ミャンマーに来てから6年になるので、私はそろそろ自分の車が必要だと思い始め、祈っていました。家族も5人になり、何よりもレーベインだと、窓がなくて暑さとはこりで大変だからです。しかし、主人はどうもあまり乗り気ではありませんでした(外国人の場合、名義や免許証の複雑な問題があるので)。私は雑誌などで相場を調べている中で、「250」で買えるのを見つけました。私は「これは、250万チャット、簡単に計算すると、約25万円、このぐらいなら、まあいいか」と思いながら、主人からも「一応」許可がもらえました。そして、カーセヤの知り合いの信頼できる仲介人の紹介によって、少しまけてもらいました。さあいよいよ契約する前に、最後に紙に値段を書いて、カーセヤに見せながら確認をしました。その時、何が起こったのでしょうか。その車は、250万チャットではなく、25'000'000チャット、約250万円でした。私は、0(ゼロ)を一個まちがっていたのです。本当に恥ずかしくて、穴があいたら入りたい気持ちでした。その日は夫婦げんかの日となりました。主よ、おゆるしてください。車は当分あきらめることにしました。・・・・・・それから、4か月過ぎたある日、カーセヤがレーベインではなくて、もっと良い乗用車(1974年型トヨタ・カローラ)に乗って、我が家に現れました。彼のおじいさんからの遺産で買ったそうです。そして、「これからは、この車で家族をのせてあげますね」と言いました。新しく買ったカーセヤの車に初めて乗せてもらった時、私は主人や子どもたちと一緒に「うわー、窓にガラスがついている。いすのクッションがいいな。」と歓声をあげて喜びました。主は一番良い方法と時をご存じだったのです。「主よ、感謝します。」



(自転車で出発)



(「レーベイン」というタクシー)

5、ミャンマー語と「証しトラクト」

ミャンマーに来る前、私はミャンマー語をほとんど全く知りませんでした。知っているのはただ一つ「ミンガラバー」(こんにちは、の意味)だけでした。ミャンマーに来てからは、トリニティー教会の牧師夫人先生が、週に3回私の家に来て、ミャンマー語を教えて下さいました。

ミャンマー語は、文法は日本と似ていて、動詞が文の最後に来ます。発音も、それほど難しくありません。ただ、文字が全部「○」（マル）の連続で、まるで視力検査の記号のようです。一生懸命「描いて」といって、目も頭もぐるぐる回りそうでした。「ヨハネの福音書」を一緒に読みながら、熱心に勉強しました。・・・時々、トリニティー教会で、説教や聖書講義を頼まれました。でも、私はミャンマー語ではできないし、日本語ができる人もいません。それで、英語でやるしかありませんでした。私は英語が苦手だったので、説教準備のために、1週間前から、辞書を広げて英語と格闘しました。それでも、講壇に立つと、私流の「無鉄砲英語」で話しました。すると、通訳者が、私の言いたいことをよくわかってきて、ミャンマー語で私の代わりにメッセージしてくれるのです。こうして、何回もメッセージしているうちに、自信がついて来て、だいぶ英語が上達しました。そうしているうちに、ミャンマー語のほうも少しずつ話せるようになってきて、1年9か月たってからは、ミャンマー語でメッセージできるようになりました。

ミャンマー語が少しずつ話せるようになってきて、私はさっそく近所の人や学生たちに伝道しようと思いました。しかし、日本の文化や気候、料理、育児のことなどはたくさんしゃべるのですが、一番言いたい「イエス様を信じて下さい」が、なかなか口から出て来ないのです。知らないからではありません。ミャンマー語でどう言うか知っていても、「反応が悪かったらどうしよう」とか「もう少し親しくなってからの方がいいのだろうか」などと、あれこれ考えているうちに、言えなくなってしまうのです。「今日こそは言おう」と思っているうちに、色々と他の話ばかりして、最後には、「イエス様」の「イ」も出て来ないのです。・・・私は悩みました。私は海を超えて、はるばる日本からミャンマーに来て、伝道するために来たのに、イエス様の「イ」も言い出せないなんて・・・。どうやったら伝道できるだろうか。私は祈りました。そうしたら、主がアイデアを下さいました。「話すのができなければ、紙に書けばいいではないか。」そうだ、自分の救いの証しを、ミャンマー語で書いてみよう。そう思って、書いてみました。

① クリスマンになる前の私はどうだったのか。

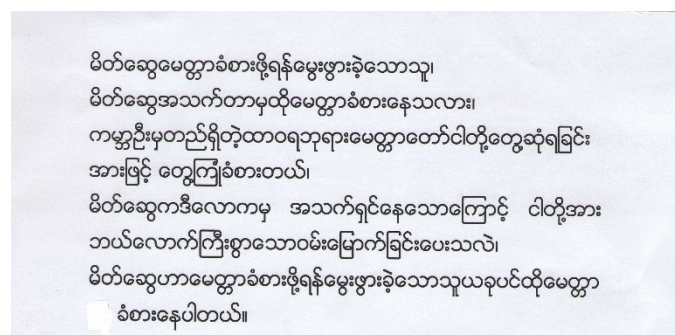
② どうやってキリストを信じたのか。

③ キリストを信じた後、私の人生はどう変わったのか。

・・・これを、手書きで一生懸命書いて、それをコピーして、出会った人々に手渡しました。すると、それをもらった人は、すぐにその場で読んでくれるのです。そして、「字がきれいだね」とか「いい話だね」とか言うてくれました。私はうれしくなって、これを何百枚もコピーして、配りまわりました。近所の人、子どもたち、市場のおばさん、タクシーの運転手、床屋のお兄さん・・・。誰一人として、拒否する人はいません。みんな喜んで受け取って、その場で読み出します。中には、声を出して周りの人に読んで聞かせる人、「友達にもあげたいからもっと下さい」という人もいました。それからは、伝道が楽しくなりました。どこに行くにも、この「証シトラクト」を何枚もかばんに入れておいて、出会う人みんなにあげるのです。「これ、私書いたんです。読んでみて下さい。」と言って、名刺代わりに渡すだけ。とても簡単です。相手も、私の個人的な体験談なので、興味を持って、拒否感なく読んでくれます。私は、「こんな簡単な方法だったら、何でもっと早くやらなかったんだろう」と思いました。私は以前も、日本で色々な既製のトラクトを集めて、配ってはいました。しかし、自分が作ったオリジナル作

品で、しかも自分の人生ストーリーとなると、不思議と他の人に読んでほしいと思って、プレゼントしたくなるのです。それで、後では、この証シトラクトの「日本語版」も作って、日本に一時帰国中にも、出会う人みんなに配り回っています。(付録1 参照)

自分がイエス様と出会って、人生が変えられたドラマ。それを他の人にも知ってもらえたら、どんなにうれしいでしょう。伝道は、まず「知らせ」ることであって、その結果や反応は主にゆだねる。そのことがわかってから、肩の力が抜けて、伝道が楽しく、やめられなくなりました。



(これがミャンマー文字！)

6、 国籍が賜物

ミャンマーに来てからわかったことは、私が「日本人である」ということ自体が、大きな特権である、ということでした。ミャンマーの人は、みんな日本に好意的で、関心も多く、「日本」と言うと「経済的に発展している、あこがれの国」というイメージを持っています。私が日本人だ、というだけで、VIPのように尊敬され、親切にされます。「日本語を勉強して、日本に行って、働いてお金をもうけたい」という「ジャパン・ドリーム」を持つ人もたくさんいます。マンダレー大学には、日本語学科があって、英語、中国語に次いで人気があります。それから、テレビの韓国ドラマの影響で、韓国語を学びたい、という人も増えていて、韓国語学科も、人気急上昇です。そこで、私たち夫婦は、私が日本人、ソジョンが韓国人、ということで、まさに学生たちのニーズにぴったりなのです。私たちは、日本にいるときから、主に学生、若者を対象にして伝道していました。それで、ミャンマーに来て、学生伝道をビジョンとして祈っていました。・・・そんなとき、日本語学科の学生で、クリスチানের姉妹2人と出会いました。彼女たちは、習いたての日本語で、「先生の家に遊びに行ってもいいですか？」と言うので、「もちろどうぞ」と言って、家に招きました。そうしたら、今度は、「日本語学科の他の友達がいるのですが、未信者でも誘っていいですか？」と言うではありませんか。私たちは喜んで、「どうぞどうぞ、ぜひ連れて来て下さい」と言いました。こうして、毎週土曜日に私の家で、「日本語による」家庭集会が始まったのです。私は集まってきた学生たちに言いました。「言葉を学ぶには、歌が一番いいですよ。日本語の歌を、一緒に歌いましょう。」そして、ギターを弾きながら、「君は愛されるため生まれた～」と歌うのです。すると、学生たちは一緒に歌いながら、わからない単語をメモして、「この意味は何ですか」と質問してきます。私は、「その意味はね・・・」と言いながら、イエス・キリストの福音について説明しました。「あなたはイエ

ス様に愛されているよ。その愛を受けるために、あなたは生まれたんだよ。これが、人生の目的だよ。」そう話しをすると、学生たちはメモを取りながら、目を大きくして聞き入っていて、大きくうなずくのです。そして、自分が愛されていることを知って、イエス様に心を開くようになっていきました。私はうれしくてたまりませんでした。ミャンマー語がまだ十分にできなくても、日本語で伝道メッセージができて、イエス様の愛を伝えることができるなんて、なんて特権だろう、と思いました。こうして、初めの頃は、私の家でクリスマスパーティーをやったり、伝道集会をやったりして、たくさんの日本語学科の学生が来ました。一緒に賛美して、福音を語り、受け入れる人も少しずつ現れるようになりました。私は、「日本人である」という、その国籍が、主からの賜物であり、主がそれを宣教のために用いて下さるんだ、ということを知りました。



(日本語学科、韓国語学科の学生たち)

7、 「出て行って」福音を

土曜日の家庭集会は、初めはとても良かったのですが、半年ぐらいたつと、学生たちが中々来られなくなってきました。朝から料理を準備して、期待しながら、「今日は何人来るだろう」と思って待っていても、約束の 10 時になっても、11 時、昼の 12 時になっても、誰も来ません。がっかりして、その料理を家族 3 人で黙って食べる、という時が何回もありました。「どうしたらいいんだろう・・・」私たちは祈りました。そんなときに、このみことばが示されたのです。「全世界に出て行き・・・福音を宣べ伝えなさい。」(マルコ 16 : 15) そうだ、出て行こう！家の中で人が来るのを待っているだけではダメだ。そう思った私たちは、学生たちのいる寮に直接行くことにしました。それも、事前に約束せず、アポなし、突然行くのです。それがミャンマー式です。そうすれば、逃げられることもありません。行ってみると、ひまそうに、のんびり休んでいるではありませんか。そこで、私たちは、「今一緒に、ここで聖書を学びましょう」と言うのです。女子寮なので、私は入れません。ソジョンと雄基（当時 3 歳、男でも入れます）だけが入れます。それで、その学生の部屋で、1 対 1 で聖書を教えて、その後ソジョンが悩み事を聞いてあげて、そのために手を置いて祈ってあげます。そうするうちに親しくなっていて、心が開かれていきました。雄基が一緒だと、他のひまな女子学生たちは大喜びで、「かわいいー」とか言いながら、どこかに連れて行って面倒を見てくれます。雄基がいるだけで、色々な人とすぐ親しくなれます。雄基は、まさに「キリストの親善大使」の役割を果たしていました。私は、というと、最初は外で一人で、いすに座って待っていたのですが、そのう

ちに、ギターを持って、寮の前の路傍で賛美するようになりました。そうすると、窓から見ていた学生たちが、一人、また一人と加わってきたので、歌詞カードを配り、一緒に賛美しました。そうやって、「路傍賛美集会」をしていくうちに、関心のある学生がいて、今度はその場で、いすと小さいテーブルを出して、「路傍バイブル・スタディー」を始めました。

そうしている中で、ダイノウ先生というクリスチャンの教授先生と出会いました。彼女は、日本に7年間留学していたことがあって、日本語はペラペラでした。日本から戻ってきたばかりで、マンダレー大学で教授として働いていました。それで、学生たちに伝道したいと思っていたのです。私が日本人の宣教師で、学生伝道をしていると聞くと、とても喜んでくれました。それで、先生の自宅で、毎週土曜日に家庭集会をやろう、ということになったのです。先生の家は、大学の構内にあり、学生たちが集まるのに一番良い所です。それに、先生は、自分のクラスの学生たちをたくさん知っているの、自分の家にどんどん誘うことができます。本当に、学生伝道の拠点として、ぴったりの所でした。このダイノウ先生宅の集会を通して、多くの学生たちと出会い、伝道することができました。・・・私たちが外に「出て行く」ときに、主は出会いと導きを与えて、伝道の門を開いて下さったのです。ハレルヤ！



(バイブルスタディー・路傍賛美の様子)



(ダイノウ先生宅での集会)

8、 若者たちの「宗教」

私は最初、ミャンマーの学生に伝道するときに、彼らの大部分が仏教徒だということを考えて、それに向けてメッセージを語っていました。例えば、「仏教とキリスト教はどう違うか」とか、「行いや修行ではなくて、キリストへの信仰によって救われる」とか……。ところが、彼らはそんなことを聞いても、あまり関心を示さないのです。かえって、変な細かい議論と反

発を招くばかりで、ちっとも効果がありません。現代の都会のミャンマーの若者にとって、仏教とは、ただの習慣、儀式でしかないのです。しかも、地方から来た学生たちは、親元を離れて、寮生活をしており、村の因習の影響からも離れています。「仏教の教えが自分の人生を幸せにするんだ」と、本気で信じて行っている若者は、むしろ少ないのです。……では、彼らは何を信じているのでしょうか。何が、自分の人生に幸せをもたらすと考えているのでしょうか。それは、「お金」です。そして、「この世での成功」や「名誉」です。この「世俗主義」こそが、彼らの「宗教」であり、人生の価値観、世界観、判断基準なのです。クリスチャンの学生でさえ、そういう人が多いのです。だから、大学に入って学歴を得ようとし、または英語やコンピューターの塾に通って、いい仕事につこうとします。外国に出て行ってお金をもうけたいと思って、一生懸命努力します。「お金」こそが、自分の人生を幸せにする、と固く信じて疑わず、それを基準として行動します。仏教信者というよりは、「お金教」信者なのです。もちろん、田舎の村や、年配の人たちには、仏教が強い影響力を持っています。しかし、私が伝道のターゲットとしての的を絞っている、マンダレーという大都会の、大学生グループという「現代の村社会」では、「お金教」が圧倒的なのです。だから、仏教との違いを説明しても、何の興味もないわけです。また、個人主義的で、政治や正義にも無関心です。

このような「宗教」を信じている彼らに、どのようにアプローチしていったらよいでしょう。私は、日本の東京で学生・若者伝道をしていたときのことを思い出しました。そして、こう考えたのです。「そうだ、これは、今の日本の若者たちの宗教と、基本的には同じだ。だから、同じ切り口でアプローチしていいんだ。」それで、彼らにこう語ったのです。「今、日本では、お金をたくさん得ても、時間を失い、家族関係を失い、心の健康を失っている人がたくさんいる。お金が本当の幸せをもたらすのではない。私も学生るとき、人生の成功を求めて頑張っていた。でも、どんなにそれを求めても、何も得られなかった。必要な物はあっても、心は満たされなかった。でも、イエス・キリストに出会ったとき、私の人生は変えられた。本当の幸せ、喜び、平安、希望を見いだした。イエス様のために世界へ出ていくことが、私の人生のビジョンとなった。そしてイエス様は、その私の夢を実現させて下さって、私は今ここに来ている。私は今、このミャンマーにいて、本当に幸せだ。あなたも、イエス・キリストを信じて、人生をささげなさい。そうすれば、あなたの人生は変えられて、本当の幸せと人生のビジョンを発見できるよ。」……このように語るとき、彼らの目は輝くのです。そして、「こんな私でも、希望がありますか」といった目で、私を見るのです。彼らは、大学を卒業しても就職先もなく、人生に希望がありません。ミャンマーにいても、政治的、経済的にひどい状況で、何のビジョンも見いだせないでいます。本物のビジョンを求めて、飢え渴いているのです。そんな彼らに、私はこう語ります。「イエス・キリストこそが、あなたのビジョンです。このお方のために生きなさい。イエス様はあなたを用いて、全世界を祝福するようになりますよ。」

私のビジョンは、このミャンマーの若者たちが、イエス・キリストに人生の希望を見いだして、宣教のビジョンを持って、全世界へとばたいて行くようになることです。その日が必ず来る、しかも近いうちに来ると信じて、この福音を語り続けます。

9、 宣教報告旅行の祝福

宣教報告（デピュテーション）のために日本各地を巡回旅行する中で、たくさんの祝福を体験しました。これは、宣教の現場での祝福とはまた違った、宣教師の「別の味」でもありました。当時書いたニュースレターの記事の一部を掲載します。

（1）家族の大切さ

2006 年 4 月から日本に一時帰国して、各地をデピュテーションしながら、最近強く感じることは、「家族の大切さ」ということです。ミャンマーにいるときは、家族みんなどこに行くにも、いつも一緒でした。しかし、日本に来て、特に 6 月に妻のソジョンが出産してからは、私一人で各地を旅行するようになりました。それで、1、2 週間家族と会えないということもしばしばです。旅先で一人で宿泊していると、愛する妻と、子どもたちの顔が浮かぶのです。単身赴任のような気持ちです。毎回初めて訪れる教会に、一人で行って説教するのは、少しプレッシャーがありました。しかし、その中で支えられたのは、毎日の妻との電話でした。朝には「今日～教会で～時ごろ説教するから祈ってくれ」とお願いし、夜には結果報告、祈りへの感謝、そして今日一日子どもたちはどうだったかなど、毎日 1 時間以上もおしゃべりします。不思議なのは、帰ってきて茨城県の実家で一緒にいるときはそれほど話す時間がないのに、旅先で離れているときは、携帯電話で実に色々なことを話し、霊的に深い所までお互いに分かち合えるのです。私は毎日、妻とのこの「おしゃべりタイム」が楽しみで、待ちきれないほどになりました。妻から励まし、慰め、助言、説教のヒントをもらうこともよくありました。このおしゃべりを通して、私たちは離れていても、いつも心をつなげて、チームワークで奉仕することができました。妻に感謝！ 妻は茨城県の私の両親の家にあります。出産後、2 人の子どもの世話をしたり、家事をしたりと、大変そうです。でも、両親が色々と助けて下さるのが本当に感謝です。心配していた母乳もよく出て、最近は少し気持ちが落ち着いてきたようです。雄基は先日 4 歳の誕生パーティーをしました。半年前から毎晩祈り続けた「黄色いキリンの書いてあるリュック」が与えられて、もう大喜び！ お兄さんになって、愛希がかわいくてしかたがないらしく、いつも話しかけています。愛希はまだ 3 ヶ月なのにもう首がすわり、寝返りしています。とても元気で、よく声を出して笑います。・・・11 月末にはデピュテーションを終えてミャンマーに戻ります。どうか家族が守られ、共に主に仕えていけるように、お祈り下さい。

（2）愛希ちゃん誕生（ソジョン・記）

2006 年 6 月 9 日、やっと 2 番目の赤ちゃんが生まれました。予定日より 4 日遅れての出産、3635 グラムの元気な女の子でした。日本でのデピュテーション中のため、夫の実家（茨城県笠間市）でのお産になりました。名前は、「愛希（あき）」とつけました。生まれるまで男か女か調べずにいたのですが、2 番目の子は女の子のような気がして、この名前にしようと、夫と二人で考えていたのです。そうしたら、やっぱり女の子。心から主に感謝しました。・・・初めてであっても 2 回目であっても、出産というのは、女性にとって不安であり、絶対的な神様の

存在を思うようになるときではないでしょうか。自分の命をかける出産の時、私は主にすがり、ひたすら主に祈るしか方法がありません。しかし主を知らない人は、頼れるものがなくてどんなに心細いでしょう。私は今回、聖霊の強い風のような勢いで、短い時間でさっと生まれるようにと、ずっと祈っていました（雄基の出産のときは 25 時間もかかって大変だったのです）。しかし、陣痛が始まってなかなか進まず、時間がかかりそうになってきたので、またかと思って、悲しくなっていました。でも、10 時間ぐらいたって、助産婦の判断で少し促進剤を入れたら、いきなり「聖霊の嵐のような」激しい陣痛が来て、それから 30 分もたたないうちに生まれてしまいました。本当に感謝。・・・病院で 5 日間入院していたときも、色々と祈られました。その病院では、自然分娩、母子同室、母乳育児を強調して指導していました。でも、彼らはこの全てを治めている創造主を知っているのでしょうか。尊い命を与え、顔や体をデザインし、ちょうど良い時に陣痛を来させ、さらに出産後すぐに母乳が出るようにする、このすばらしいわざが創造主の御手であることに気づいているのでしょうか。もし彼らが、その主を知るようになれば、産婦人科は、創造主を知り体験できるすばらしい伝道の間になるでしょう。そう思って、彼らの救いのために祈り、また退院のときには、主人の救いの証しを書いたトラクトを渡したりしました。彼らも、私たちが宣教師一家であると聞いて、関心を持って読んでくれたようです。・・・私たちが日本にいる間にも、常にこのすばらしい主を証しする者であるように、お祈り下さい。

（3）父と息子の 2 人旅

私は今、5 ヶ月間のデピュテーションを終えて、妻ソジョンの実家である韓国のプサンで、この記事を書いています（2009 年 2 月）。この 5 か月間、聖治の誕生、支援者・諸教会の皆様との再会、そして多くの新しい出会いも与えられ、主の恵みにあふれた日本滞在でした。特に感謝だったのは、息子の雄基（ゆうき、6 歳）と 2 人だけで 3 週間、四国巡回旅行に行ったことでした。私は最初、スケジュールも忙しくて大変だから、子どもの雄基が一緒に行くのは難しいのでは、と心配して、連れて行くべきか出発直前まで悩みました。でも雄基は「どうしても一緒に行きたい！」と言うのです。私は雄基に言いました。「大変なこともあるけど、それでも行きたいか？」そうしたら雄基は「でも、一緒に行けば、楽しいこともたくさんあるでしょ？そう信じて、信仰で行くんだ。」と言うではありませんか。私は言いました。「そうか、雄基がそこまで言うなら、お父さんについて来なさい。」・・・それから 3 週間、どうなったかというところ、雄基は、色々な教会で何回もクリスマスパーティーに参加し、プレゼントをたくさんもらい、みんなからかわいがられました。ある姉妹に「こどもの国」という所に連れて行ってもらったり、たこあげして遊んでもらったりしました。集会で雄基が自分の受洗の証しをすると、みんなに喜ばれ、特に年配のある婦人の方は、感動して涙を流しながら、「良かったね。良かったね。」と言ってくれました。ラジオ放送に出演するという貴重な体験もできました。雄基は本当にこの旅行を楽しんでいました。まさに、雄基の信仰の通りになったのです！そして、1 番大きな収穫は、この 3 週間を通して、父と息子のきずなが強まった、ということです。雄基は、重いリュックを背負いながら、寒い朝でも、夜遅い集会でも、よく父親を助けて、従って来てくれました。こんな同労者を与えて下さった主に、心から感謝します。この雄基のこれからの

信仰成長のため、そして、愛希（あき、2歳）や聖治（せいじ、3か月）も、この主に従う道を、最後までまっすぐに歩んで行けるように、どうかお祈り下さい。

（４）救いと受洗の証し（雄基が紙に書いたものをそのまま書き写しました）

1ねんまえのことです。お父さんがほうとうむすこのメッセージをしました。そのとき私は、こころのおうぎにじぶんがすわって、じぶんのこころにつみがあるのがわかりました。そのときお父さんが「くいあらためる人はまえにきてください」といいました。私はまえにいて、なきながらくいあらためました。そして私は6さいになる8月にはせんれいをうけたいとおもって、1ねんかんずーつといのりました。それをお父さんにはなして、ミャンマーのぼくしせんせいであるスワンせんせいにそうだんすることにしました。しかし、にちようびはスワンせんせいが、いそがしかったです。お父さんは、「きょうはしょうがないね」といいました。そのとき私は、「お父さんがすこしはなしがあります」といって、せんせいをお父さんのところにつれていきました。そしてせんれいのことをそうだんしたところ、せんせいは「いいでしょう」といって、よろこんでくれました。それで、2008年8月3日にせんれいをうけました。イエスさまがゆうきのことをあいしている、とわかって、うれしかったです。ゆうきはしょうらい、イエスさまのためにはたらく人になりたいです。

「ぜんせかいにでていき、すべてのつくられたものに、ふくいんをのべつたえなさい。」

（マルコ 16：15）



（雄基の受洗）

10、私の家は天国に

2006年4月から11月までの8か月間、私たち一家は日本に一時帰国していました。2番目の子ども「愛希（あき）」の出産と、デピュテーション（宣教報告）のためです。そして、12月に、久しぶりにミャンマーのマンダレーの我が家に戻ってきました。そうしたら、家の大家さんが、申し訳なさそうな顔でこう言うのです。「法律が変わって、外国人に家を貸すのが難しくなったので、悪いけど、出て行って下さい。」……それから、私たちの「家探しの長一い旅」が始まりました。マンダレー市内をぐるぐる回って、借家を探しました。しかし、どの家に行

っても、全然うまくいきませんでした。最初は、どの大家さんも OK なのですが、その区域の役人が、「外国人に家を貸すなら役所にお金をドルで払うように」と言うので、後で結局 NO になってしまうのです。この家で決まるか、と思ったら、次の日にはダメになる、というくり返しでした。さんざん探し回ったけど、どの家も借りることができず、結局、私たち一家 4 人は、ホテルの一室に入る以外に道がなくなっていました。私はもう、泣き出したい気持ちでした。明日はどうしたら良いか、いくら考えても、全く見当が付きませんでした。「もう日本に帰るしかないのだろうか」とも思いました。実際、マンダレーでは多くの外国人が家を借りられなくなり、自分の国に帰って行きました。しかし、私は、あきらめることができませんでした。私は自分に、こう言い聞かせました。「いや、このミャンマー宣教は、主の御心だ。主がこの良い働きを始めて下さったのだから、主が必ず完成させて下さる。(ピリピ 1:6) 何か方法があるはずだ。私は絶対にあきらめない！」その頃の私の口ぐせは、「明日のことは、明日が心配します。」(マタイ 6:34) でした。そうやって、とにかく祈り続けました。

・・・そのうちに、「外国人の個人名義ではダメだけど、会社の名義なら借りられる」ということを知りました。そして、色々な会社を探す中で、ヤンゴンにある、日本人が経営している会社と出会いました。その社長の好意で、会社の名義を借りることができました。さらに、ある人のコネで、マンダレーの北のある区域の役人と面談して、その区域の中なら、外国人でも家を借りて良い、ということになりました。そして、続けて家を探す中で、その地区の「有力者」の家が見つかりました。有力者の家なので、外国人が借りても、区域の役人は何も文句を言ったり、お金を要求したりしません。その家に行ってみたら、何と、私たちが祈っていた条件にぴったりの家でした。私たちは以前から、家に学生たちを住ませて学生寮をやりながら、共同体生活を通して弟子訓練するミニストリーをしたい、というビジョンを持って、ずっと祈っていました。その家は、3 階建ての大きな家で、部屋も多く、集会できる広間もあり、また周囲には家がなくて、いくら大きい音を出しても大丈夫です。とにかく、色々な面で、寮をするのに好都合で、本当に祈りの答えでした。私たち一家は、2 か月間のホテル暮らしを終えて、やっと新しい「我が家」に入ることができたのです。主の山に備えあり！ 主に感謝します。

私たち一家は、あるときはミャンマーに住み、あるときは日本に、またあるときは韓国、そして、ビザのためにタイ、といった感じで、いつも旅行ばかりです。これが自分の家、というのもなく、まさに「地上では旅人であり、寄留者」というのを実感します。しかし、第 2 コリント 5:1 には、こう書いてあります。

「私たちの住まいである地上の幕屋がこわれても、神の下さる建物があることを、私たちは知っています。それは、人の手によらない、天にある永遠の家です。」

そうです。私の家は天国にあります。それは、もう引っ越ししなくていい、修理もしなくていい、永遠の家です。その家で、愛する主と共に永遠に住むのです。ああ、何てすばらしいでしょう！ その家があるから、天国があるから、私は今、この地上でも希望があります。いくら住まいが変わっても、地上では旅人でも、ちゃんと最終ゴールがあるから、安心です。この地上で色々なことがあるけれど、いつもこのゴールに向かって、その「入居」する日を楽しみに待ちつつ、毎日歩んでいきたいと思います。

11、「GO」と「STOP」

さて、私たちは新しい家に入って、学生寮ミニストリーをする環境も整ったし、これでいよいよ学生伝道は「GO」サインだ、と思いました。ところが、これが中々思うようにいきません。土曜日の家庭集会を再開したのですが、学生が集まらないのです。1, 2回来ても、次から来なくなったりして、続けて毎週来る人があまりいませんでした。大学生は、1年生のときは、遊びと世の楽しみで忙しく、霊的な飢え渴きがないのです。最終学年が近づくにつれて、将来の進路のことを考えて、心へりくだって、人生の導きを求めるようになってきます。そんなときに、主を信じて献身しようとする学生も現れるのですが、その頃にはもうすぐ卒業となって、自分の故郷に帰ってしまうのです。そういうわけで、学生寮に住ませて、献身者として、継続的に弟子訓練を受けるような、ふさわしい学生を見つけることができませんでした。せっかく大きい家があっても、入れる学生がいまま、時が過ぎて行きました。

そんなときに、2007年9月に、ミャンマー全国で大規模な反政府デモが起きたのです。日本人のカメラマンが銃で撃たれて殺されたりして、それはもう大変な騒ぎでした。マンダレーでも戒厳令が発せられて、夜間外出禁止、5人以上の集会は禁止となりました。大学構内にも、自由に入れなくなりました。以前は入れたのですが、その時から、門で車を止められて、身分証明書の提示を求めたり、行き先をチェックしたりするのです。私がどんなにロンジー（ミャンマー式の巻きスカート）をはいて、ミャンマー語で話しても、すぐ外国人とわかってしまって、目立ってしまいます。（ちなみに、ソジョンは肌の色が濃いので、どこに行っても全然OKです。誰も外国人だとは思いません。）それに、ダイノウ先生の家に行くと言うと先生が当局に目をつけられて、迷惑をかけることになってしまいます。それで、大学構内にあるダイノウ先生宅での集会は、やむなく中止することにしました。本当に、思いもかけない「STOP」サインでした。安全のため、しばらく家から出ることも、控えなければなりませんでした。「これからどうやっていけばいいのだろう」と思い悩む日々が続きました。

そんなときに、私の毎週通っているトリニティー教会の子どもたち、中高生たちが、私の家の集会に来るようになりました。トリニティー教会は、チン族という、少数部族の人が多いです。チン族は、1972年に大きなリバイバルがあって、部族のほとんど大部分がクリスチャンになりました。しかし、今はその2世、3世となってきて、新生体験していない、名前だけのクリスチャンも増えてきています。子どもたちへの「信仰継承」が彼らの問題であり、ニーズなのです。教会の人たちが、私のところに来て、言いました。「うちの息子、娘たちを、先生の家で集会に送ってもいいですか？」私は答えました。「もちろん、どうぞどうぞ、ぜひ送って下さい！」こうして、私の家には、雄基と同じくらいの5, 6歳の子から、上は15, 16歳ぐらいまでの子どもたちが次々と集まるようになりました。ところが、正直に言うと、私は子どもが苦手なのです。私の賜物は、大学生、若者伝道、特に全く未信者への伝道です。自分が大学生のときにクリスチャンになったので、これなら良くわかります。しかし、クリスチャンホームで、しかも子どもとなると、どう扱っていいのか、全くわかりませんでした。彼らは、創世記から黙示録まで、聖書のお話をみんな知りつくして、十字架の話しをしても、「そんなの知ってるよ」といった感じなのです。私は困ってしまいました。でも、苦手だからと言って、やらないわけにはいきません。「これは主の働き、私は主のしもべ、何でもやります！」という思いで、とに

かくやってみました。子ども向けの賛美を準備して、歌って踊って飛びはねて、楽しく賛美しました。（私は息をぜーぜー切らしながらの賛美でした。）メッセージをするときは、ホワイトボードに絵を描きながら、できるだけわかりやすく話しました。毎週やっていくうちに、だんだんできるようになってきました。

そうしたら、子どもたちが変わってきたのです。救いの確信を持つようになり、洗礼を受ける子が現れ、献身したいという子まで現れました。喜んだのは、その親たちです。「先生、うちの子がお世話になって、ありがとうございます」と言って、スイカやパパイヤ、マンゴなど、色々な果物を持って来てくれました。そして、このことを通して、トリニティー教会との協力関係が、より緊密になりました。宣教師とは、何か自分のミニストリーの成功のためではなく、現地人教会のニーズのために仕えるしもべなのです。そのことが、より深く体験できました。それから、子どもたちはまだ純粋で、教えられた通りに受け入れます。大学受験前の高校生は、勉強も大変で、進路への不安もあって、飢え渇きがあります。彼らが主によって変えられて、訓練されて、キリストの弟子となるなら、今度は彼らを「大学」という宣教地への「キリストの大使」として派遣することができるのです。これこそが、主が私たちに与えて下さった、新しい戦略なのでした。

あるとき、私は、何か路傍伝道をするのに都合の良い所はないか、と思って、トリニティー教会の先生に聞いてみました。するとその先生は、「ありますよ。すぐ近くの、エーヤワディー川の河原には、ひまそうな人がいっぱいいて、トラクトを配っても何も問題ないですよ。」と教えてくれました。行ってみたら、本当にその通りでした。そこは貧しい人たちの集落で、家もテントで、子どもたちは着る服もなく、夕方になると、人々はひまで何もしていないのです。私はこれを見て、「ここは、私の集会に来ている中高生たちの伝道訓練にぴったりだ」と思いました。いよいよ「GO」サインです。私は彼らに「一緒に路傍伝道しよう」と言って、彼らを車に乗せて、その河原に連れて行きました。彼らは、そんな所でトラクト配りなんて、一度もやったことがありません。車の中で、みんな口数も少なく、不安そうな顔でした。彼らは、「ミャンマーは軍事政権で仏教国、しかも自分は少数民族だから、伝道は難しい」と頭から固く「信じて」いるのです。私は彼らに言いました。「大丈夫、やればできる。とにかくやってみよう！」車が河原に着いて、みんなを2人1組のチームに組ませて、私の「証しトラクト」を袋いっぱいに持たせました。それで、彼らは人々の所に行って配り始めました。すると、どうでしょう。子どもたちがワーツと集まって来て、「私にも下さい」と言って手を伸ばしてくるのです。中高生たちは、夢中になって配りました。いっぱいあったトラクトは、あっという間になくなってしまいました。人々は貧しさの中で、真理と希望を求めて飢え渇いているのです。誰もが、イエス・キリストの救いを必要としていて、それを待っているのです。中高生たちは、そのことをその目で見ました。彼らの信仰と情熱は、大いに引き上げられました。彼らは喜びにあふれて、興奮しながら言いました。「先生、また行きましょうね！」

「ミャンマーは軍事政権で仏教国だから伝道ができない」なんて、一体誰が言ったのでしょうか。誰がそんなふうに思い込ませているのでしょうか。それはサタンです。サタンはうそつきです。心の中でそうささやいて、私たちをだまして、伝道させないように仕向けているのです。では、聖書には、何と書いてあるのでしょうか。「みことばを宣べ伝えなさい。時が良くても悪くてもしっかりとやりなさい。」（Ⅱテモテ 4：2）「できるものなら、というのか。信じる者には、

どんなことでもできるのです。」(マルコ 9:23)・・・サタンのうそと、聖書のみことば、どちらを信じますか？ 私たちが真理のみことばに立って、信仰によって前進するとき、主が必ず伝道の門を開いて下さいます。主が「STOP」というとき立ち止まり、御声を聞く。そして「GO」というときには、直ちに行動する。この聖霊の導きに敏感に従うとき、主ご自身が宣教を導き、前進させて下さる、ということを、身をもって体験しました。

12、受洗者第1号

私たちは2007年6月から、トリニティー教会で、日本語教室をスタートしました。毎週日曜日の午後2時から3時まで、教会の会堂で、無料でやりました。これは、伝道のため、人々を教会に誘うのが目的で、日本語は、そのための手段にすぎません。内容は、日本語の賛美を歌って、基本的な会話を教え、後はソジョンが日本語で聖書のメッセージを語り、私がそれをミャンマー語で通訳する、というものです。

この日本語教室に、ソーテイントンという未信者の若者(20歳、男性)が、友人に誘われてやって来ました。彼は中国系の、仏教家庭の出身です。言葉話すのに少し障害を持っていて、食堂を営んでいる親を助けて働いていました。彼は日本語にも関心を持っていましたが、それよりも、真理に飢え渴いていました。それで、私の家に来て、聖書を学ぶようになりました。彼は福音を、驚くほど素直に受け入れ、救いの確信を持ち、そしてさらに聖書を学びたいと言って来ました。私は最初、正直言って、そんなに期待していませんでした。しかし、彼が続けて家に来て、色々と聖書について質問してくるので、喜んで答えていました。あるとき、彼は、自分の家族関係のことを打ち明けました。母との関係がうまくいかなくて、いつもぶつかるのだそうです。「こんなとき、どうしたらいいんですか」と彼は尋ねました。私は、どう答えたらいいか、祈りながら考えました。そして、聖書を開き、エペソ 6:1-3 を、一緒に読みました。

「子どもたちよ。主にあって両親に従いなさい。これは正しいことだからです。『あなたの父と母を敬え』これは第一の戒めであり、約束を伴ったものです。すなわち、『そうしたら、あなたはしあわせになり、地上で長生きする』という約束です。」

そして、彼にこう言ったのです。「聖書には、こう書いてあるよ。この通りに従うなら、あなたは必ず幸せになるよ。」そして、彼のために、手を置いて、心をこめて祈ってあげました。彼はとても励まされ、答えを得た、という表情で帰って行きました。・・・さて、彼は家に帰ると、そのみことばをそのまま実践しました。母を敬うことにしたのです。母との関係は、一気に回復してしまいました。彼は大喜びでした。真理のみことばの力によって、人生が変えられることを体験したのです。彼は私のところに来て言いました。「先生、私は将来、聖書を教える先生になりたいです。」驚いたのは私です。「そ、そう。それはすばらしいね。でも、その前に、洗礼を受けないとね。」彼は言いました。「洗礼って何ですか。」私は洗礼の意味を、簡単に説明しました。すると彼は、「じゃあ、洗礼を受けます」と言うのです。私は言いました。「でも、両親は仏教で、反対されるのではないかな。」彼は答えました。「大丈夫です。私がちゃんと説得します。」・・・彼は家に帰って、父親にこう言ったそうです。「お父さん、僕は仏教をやめてクリスチャンになるよ。」父親は案の定、とても怒って反対しました。でも、そんな父親に、彼

は続けて言いました。「だったら、もし僕が仏教のお坊さんになって出家する、と言ったらどうしますか。それよりは、クリスチャンのお坊さんになったほうがいいでしょう。」父親はびっくりして、こう言ったそうです。「それなら、お前の好きなようにしなさい。」

こうしてソーテイントンは、2007年のクリスマスに、トリニティー教会の洗礼槽で、私の手によって、洗礼（バプテスマ）を受けました。私たち一家がミャンマーに来てから5年たって、初めて授ける「受洗者第1号」です。それは、本当に感動的な洗礼式でした。涙が出るほどうれしかったです。「ひとりの罪人が悔い改めるなら、神の御使いたちに喜びがわき起こるのです。」（ルカ 15：10）・・・一人の魂が救われる喜び、これにまさる喜びはありません。私はこのために、ミャンマーに来たのです。「宣教師をやっていて良かった。ミャンマーに来て本当に良かった」と思う瞬間でした。



（ソーテイントンの受洗）

13、 やっと生まれました（ソジョン・記）

2008年1月25日、マンダレーにある病院で流産の手術を受けました。私としては、初めての体験でもあって、まさか、というショックでした。21日に外出から帰った後、体の異常を感じてからのことでした。自然流産だということがわかって、次の日に手術を受ける決断をするまで、自分の心の中に葛藤と戦いがありました。2004年に長男の雄基の脇の腫れ物の手術を受けた時の、大変だった記憶も重なって、私としては、最初、大きな恐れと不安が押し寄せて来ました。隣の国のバンコクに行って手術を受けるか、どうするべきか。しかし、今の状況の中でこのマンダレーを離れるのは支障があるし・・・。主よ。なぜこんなことが・・・。その葛藤の中で主人と相談したところ、ここで手術を受けよう、という主人の意思に従うことにしました。それがまた、主の御心でもある、とわかりました。それから、主は色々な助けの手を与えて下さいました。手術の前日の夜、以前2回も流産の経験がある牧師先生ご夫妻が私の事情を聞いて訪問して下さい、強い祈りをもって、励まして下さいました。また、当日には、聖書学校のスタッフの、ある姉妹が同行して、雄基と愛希を見てくれて、また待機室で一緒に祈って、励ましてくれました。そんなとき、隣のベッドに、5歳の女の子が、耳の下の腫れ物の手術のために入ってきました。私は、それを見て、ちょうど雄基が1歳9ヶ月の時の手術のことを思い出しました。その時は、手術の間、私と主人は心が裂かれる思いで、テープで賛美を聞きながら、いやし主であるイエス様にすがり頼って祈っていました。・・・この女の子

のお母さんの顔は、心配と恐れそのものでした。イエス様を知らないそのお母さんは、この時、一体何にすがり頼るのだろうか、と思ったら、私の心が痛みました。また、自分の心の中にあった恐れや心配が恥ずかしくなりました。そして、私と共におられる主を完全に信頼できなかった自分の不信仰を悔い改めました。そして、そのお母さんに、4年前の雄基の事を話して、今は元気に直っていると話しながら、私がつまっていた、イエス様を紹介する福音の書物や証しトラクトを渡しました。彼女も一生懸命読んでくれました。その後、私はとても平安な気持ちで、手術を受けることができました。そして、その日のうちに無事退院して、家に戻りました。ハレルヤ！

その次の日は、土曜日の家庭集会がありました。1対1養育を通して弟子として献身の思いを持っている、私の担当であった二人の若い姉妹（ニャンレ、ヌワンピ）の学びを、主人にお願いし、食事の用意も全部任せて、部屋で休むことにしました。参加できない思いを、祈りをもって過ごしました。後で、主人から聞いたら、普段受け身だった彼女たちが、ちょうど、弟子への召しのメッセージを聞いたこともあって、積極的に礼拝と食事の奉仕をし、使命感に燃えて、家や庭の掃除までやってくれました。そして、本気で私の健康の回復のためにも心配し、祈ってくれた、ということでした。……それを聞いて、私は、長い間待っていた「霊的娘たち」が「やっと生まれた」という思いでした。

今回のことを通して、マルタのように走り回っていた私を、主は強制的に休ませ、悔い改めをもって、マリヤのように主との深い交わりをするように、と安息を与えて下さいました。また、家の家事や子どもたちの世話まで、全部主人にお願いするしかない状況で、主人は神様の前にへりくだって、謙遜に仕え、頑張ってくれました。心から感謝します。その中で、私と主人は、お互いの大切さと戦友としての愛を、もっと確認することができました。今回、望んでいた出産はできなかったのですが、主はこの体験を通して、もっと大きな祝福である「霊的出産」を与えて下さいました。ハレルヤ！今回主が、何人かを通して、不思議と同一に与えて下さったみことばは、次のことばでした。

「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」（ローマ8：28）

14、民族の壁を崩すイエス様（ソジョン・記）

私たちの結婚は、よく証しの材料に用いられます。私の主人は、日本に来ていた韓国人の宣教師や留学生たちの、日本人に対する宣教の情熱によって、涙のとりなし祈りの「初穂」として救われました。私自身も日本で留学中にその教会で救われて、日本人伝道の思いと、日本の若者達が世界へと遣わされる、というビジョンが与えられました。その結果（？）なのか、後になって私は日本人と結婚し、共に世界宣教に遣わされるようになりました。

……先日、私たちの家でバイブルキャンプをしました。「民族を抱く祈り」というテーマで、学生たちが自分の部族（国内135部族がある）の壁を乗り越えて、他部族に対する救霊の思いが与えられるように、と祈っていました。しかし、このテーマで講義を準備するたびに、私と主人は、なぜかいつも夫婦げんかをするのです。私は中々気持ちがクリアされなくて、キ

キャンプの前日の夢にまで出て苦しみました。そのとき、主はあることを思い出させて下さいました。それは、私が以前した「日本人のために、へりくだり、しもべとして仕えます。」という献身の告白でした。それから、「私たちの結婚は最初から、世界宣教のビジョンによって始まった」ということでした。それを思い出した時、主の前に悔い改めることができました。その後、キャンプでこれらのことを彼らに「生々しく」証しました。そして、私の家庭の中で民族の壁を崩し、二つのものを一つにして下さる、キリストの素晴らしいみわざを、彼らに分ち合うことが出来たのです。主に感謝！

「キリストこそ私たちの平和であり、二つのものを一つにし、隔ての壁を打ちこわし、ご自分の肉において、敵意を廃棄された方です。」（エペソ 2；14－15）

15、ヨセフ訓練学校

2007年から、私の家で行っている家庭集会に、キンピという青年が来るようになりました。彼はチン族のクリスチャン家庭で育ち、家族と一緒にマンダレーに来て、トリニティー教会に通っていました。6人兄弟の3番目で、そのすぐ下の妹ニャンレは、私たちの日本語教室のメッセージを通して、救いの確信を持ち、洗礼を受けました。キンピは何回か私の家に泊まったりして、親しくなりました。彼は、以前から献身の思いがあって、高校を卒業後、聖書学校に入りたいと思っていました。ところが、家の経済事情が難しく、入学をあきらめざるをえなくなりました。彼はがっかりして、私のところに来て、言いました。「先生、私はこれからどうしたらいいのでしょうか？」私はこう言いました。「そうか、それなら、私がキンピのために、スペシャル聖書学校を開いてあげよう。昼間は、外で仕事をして、お金を稼いで、家計を助けて下さい。でも、夜は私の家に泊まって、弟子訓練を受けたらどうか。私の家は、そのために準備してあるのだから。」これを聞いて、彼はもう大喜びでした。そして、彼がそれを両親に話したら、両親も大喜び。しかし、一番喜んだのは誰でしょう。それは私です。私たち一家は、このような共同体生活による弟子訓練学校、学生寮ミニストリーをやりたいと思って、何年も前からずっと祈っていたのです。これはまさに、その祈りの答えでした。こうして彼は、私の家の住み込み訓練生の第1号となりました。朝は5時に起きて、共にディボーションをして、聖書を通して主の御声を聴く訓練をします。朝食を食べたら、弁当を持って、自転車で職場に向かいます。病院の雑用係で、暑い中自転車で買い物に出るなど、結構厳しい仕事です。給料は1日千チャット（約百円）だけです。上司に叱られたり、同僚とうまくいかなかったりして、とても苦労します。それでも彼は、一生懸命働きました。この世の厳しさを体験して、体も疲れて、心もへりくだらされて、ボロボロになって、夜8時頃私の家に帰ってきます。すると、「今日はこんなことがあった。これが大変だった」などと、色々と打ち明けてきます。私はそれを「うんうん」と言って聞いてあげます。それから、聖書を開いて「臨時聖書講義」が始まります。みことばを通して、彼の今の悩み、苦しみに答えてあげるのです。私はよく、ヨセフの話をしました。「ヨセフは奴隷として売られても、その家で忠実に働いた。神様が下さった夢、ビジョンを忘れなかった。後で神様は、彼を引き上げて下さり、彼はエジプトの首相になった。……キンピ、今は大変だけど、ビジョンを抱き続けて、今いる所で忠実に仕えなさい。あなたはヨ

セフのように、後で首相（霊的指導者）になるんだ！」・・・彼は大いに励まされ、みことばを通して答えを得て、また次の日職場に向かうのです。私はこれを「ヨセフ訓練学校」と名づけました。この訓練を通して、彼の信仰は鍛えられ、大きく成長しました。以前は1週間に1回しか会わなくて、深い話もできず、相手のことを知るのが難しかったのです。しかし、この共同体訓練だと、心の奥のことまで分かち合い、祈り合うことができます。弟子は、机上の知識によってよりも、体験と人間関係の中で成長し、変えられていきます。私は、この「学生寮ミニストリーによる霊的指導者養成」というビジョンに、ますます確信を持つようになりました。

こうして、彼は2ヶ月半、私の家に泊まって訓練を受けました。その後、私たち一家がデピューテーションのために一時帰国したので、彼も自分の家に戻りました。

日本でのデピューテーションを終えて、ミャンマーに戻ろうとすると、私たちは、これからの働きの方角性について祈っていました。そんなとき、韓国のプサンにある教会の牧師先生から「あなたの賜物は、牧会ではなくて学生伝道だよ」とズバリ言われました。そして「キャンパス行伝」という本を読むようにすすめられました。私はちょっとショックでしたが、言われるままに、その本を買って、ソジョンと2人でその本を読み始めました。そうする中で、私の中に眠っていた大学生リバイバルへのビジョンが、再び燃え上がって来ました。

ミャンマーの私の家に戻ったとき、キンピは私たち一家が帰って来るのを待っていて、真先に駆けつけてくれました。彼は、私の証しトラクトをいっぱい持って行って、市場などに行って一人でトラクトを配り、路傍伝道をしていたのです。彼の献身の思いが変わらないのを見て、私たちは感激しました。そして、彼の将来について、主の御心を求めて祈りました。そんなとき、ソジョンがこう言いました。「キンピを、福音の戦士として、大学へ派遣したらどうでしょう。その目的のために、彼を塾（予備校）に入れて、受験勉強できるように支援したら・・・。」これを聞いたとき、私は「そうだ、それが御心だ」という確信が来ました。私がこれをキンピに話したら、彼は飛び上がって喜びました。両親もちろん大賛成です。塾に入れさせるにはとてもお金がかかるので、今まで送れないでいたからです。こうして彼は、マンダレーの中で1番大きくて有名な CAE という塾に通うことになりました。そして夜は、再び私の家に泊まることになりました。

彼は、苦手な勉強に苦しみながらも、自分の証しトラクトをクラスの友達に配りながら、伝道しています。キンピを通して、その塾に福音が伝えられ、真理に飢え渴いている受験生たちがキリストを信じるように、と祈っています。そして、彼が受験に合格したら、大学という「宣教地」へ派遣します。キンピを通して、多くの学生たちが救われて、大学にリバイバルが起きるように、ビジョンを抱いて祈り続けます。

16、奇跡は起きる、信じれば（ソジョン・記）

今回の戦いは、まるで紅海が別れる奇跡のようでした。まずは、キンピ青年が通っている CAE という塾（マンダレーで一番有名です）で、伝道集会を開くように主に示されてから、ずっと祈って来ました。最初塾を尋ねた時、塾長と話しの中で

その塾の正門に書かれているのが聖書のことばからとったものである、と聞いてびっくりしました。心を治めるものが本当の勝利者であるということば（箴言 16:32）で、その塾の名前「CONQUEROR」もそこからとったのでした。塾長の恩師は以前宣教師から英語を学んだそうです。たぶんその影響からだと思います。この国に西洋の宣教師達が追い出される前に、すでに種が蒔かれたことがわかりました。それからいただいたみことばは、申命記の 1:8 でした。「見よ。わたしはその地をあなたがたの手に渡している。行け。その地を所有せよ。これは、主があなたがたの先祖アブラハム、イサク、ヤコブに誓って、彼らとその後の子孫に与えると言われた地である。」その後、何回か塾を尋ね、塾長と話し合い、プレゼンテーションをお願いしましたが、はっきりした返答は得られませんでした。それでも、いつがいいですか、と何回も聞いたところで、塾長が、「あまり宗教的な内容でなければいい」ということで、許可して下さいました。ずっと引き伸ばされていたのですが、やっと決まりました。一応、家族で日本語・韓国語教室の宣伝と紹介の内容、ということで、1 時間与えられました。それで「蛇のようにさとく、鳩のようにすなおに」福音をつたえ、証しできるように、また、あらゆる妨害から守られ、無事に行われるように、と祈りました。集会前の 1 週間は、霊的戦いが激しく、まずは、子どもたちが病氣したり、悪夢を見たりして、家族の中で緊張感が絶えませんでした。そして、当日は主日で、朝の礼拝の賛美の時、「神様が門を開くと閉じる者がいない、信仰で勝ち取るのだ」という確信を与えてくださいました。その日は忙しく、ようやく夜になって、塾に向かいました。塾に向かう時、「この戦いは主がなさるのだ」という平安がありました。主人も雄基に「今日は奇跡が起きるから、見ていなさい」と言いました。やっと塾に着いたのですが、コンピューターとプロジェクターのトラブルで、私（ソジョン）の証しのための写真がなかなか開けなくて、30 分遅れて、やっとはじまりました。最初、塾長に家族が紹介された時、学生達が歓声をあげてよこびました。日本人と韓国人の夫婦と子どもたち、というのは、彼らにとってはまさに「上野公園のパンダ」以上のめずらしさなのです。簡単な家族紹介と日本語と韓国語教室の紹介の後、賛美「君は愛されるため生まれた」を日本語とミャンマー語で歌いました。何と 600 人ぐらいの学生達、飢え渴いた魂たちが、イエス様の愛と救いを求めて集まっていました。この場面を、どんなに何回も想像しながら祈ったことでしょう。彼らの心が開かれているのがわかりました。私たちはトラクト（一面は語学教室の宣伝と裏面は福音の内容）を 400 枚しか準備しなかったので、十分足りませんでした。信仰が足りなかった、と反省しました。それをまず配り、そして、私の写真を見せながら、救いの証しや結婚、家族のことなど、今に至るまでのことを紹介しました。みんな興味深く聞いてくれました。その後、主人がショートメッセージで救いの証しをしました。「皆さんを造り、愛し、どんな状況からも救うことができる方がいます。その方はイエス・キリストです。それを忘れないでください」と伝えたら、塾長が来て、「そろそろ・・・」と言いました。そして、最後にもう一回祝福の賛美をし、集会は終わりました。学生達も顔が明るく、子どもたちにバイバイしながら会場を去りました。主がどんなにその魂たちを愛し、待っておられたのでしょうか。彼らはまさに、この国の将来の希望なのです。このように蒔かれた福音の種が必ず実を結び、刈り取る時が来る、と信じて、心で宣言しながら祈りました。すべて主に感謝をささげます。主が戦ってくださいました。勝利は主のものです。また、共に祈ってくださった皆様にも心から感謝します。ハレルヤ！

17、 短期宣教旅行の祝福

私たちは、ミャンマーに来た最初の頃から、私たちだけではなく、日本のもっと多くのクリスチャンが、このミャンマーに来てほしいと思っていました。世界宣教の現場の最前線を見て、肌で体験し、宣教に参加する祝福を共有し、その恵みを日本に持って帰ってほしい、と思って、切に祈っていました。その祈りに主は答えてくださり、たくさんのチームがこのミャンマーのマンダレーまで来て下さいました。

(1) 榑哲夫さん(2007年2月と11月)

クリスチャンのビジネスマンの方です。仕事でタイのバンコクまで来ているので、近くのミャンマーまで足を伸ばして来て下さいました。1回目のときは、ちょうど私たちが借りる家がなく、ホテル住まいをしていたときです。彼が来てくれたことは、大きな慰めになりました。2回目の11月のときは、反政府デモの後の、ビザ取得が難しいときでした。しかし、奇跡的にビザが取れて、道が開かれ、不安な中にいた私たち一家を大いに励まして下さいました。

(榑 哲夫さんの証し)

今年の2月にミャンマーを訪問し、今回で2度目になります。今回はデモ行進への武力弾圧という事件があったため、ビザを入手するのにたくさんの書類と3週間以上の日数がかかりました。詳しい日程表まで提出させられましたので尾行でもつくのではないかと少し心配しましたが、ミャンマーに到着してみると平穩そのものでした。

前回訪問したときは、伊藤宣教師ご家族はホテル住まいの不便な生活を強いられておりましたが、今では家が与えられ、一階の広いリビングルームではホームセルミーティングが行えるようになりました。



左の写真がホームセルに集まってきた人たちです。多くは学生ですが、今日は未信者のビジネスマンの方(右端)も加わりました。

右の写真は、神学生たちの特別賛美です。彼らの多くはギターやキーボード、そしてドラムを演奏します。もうすでに賛美演奏のグループがいくつかできています。



左の写真は日曜日の午後 2 時から行われる、伊藤宣教師による日本語学校の風景です。日本語学校とは言っても聖書を教えます。

ミャンマーの多くの学生や子供たちは日本語にとっても興味を持っています。賛美はミャンマー語と日本語で歌われました。

輪になって懇親会をした時、皆日本語で上手に自己紹介をしてくれました。また、日本についてたくさんの質問を受けました。



トリニティー教会の日曜礼拝は 100 名ぐらいの人で会場はいっぱいになります。夕方礼拝は 4 時から行われ、神学生や若い人たちが多く集まります。この日は伊藤宣教師がメッセージをしました。聖霊が強く働かれ多くの人が涙を流し招きに応じて前に出てきました。

伊藤宣教師ご家族のために祈られる人は幸いです。その人は彼らと同労者です。彼らと共に祝福を受けます。伊藤宣教師ご家族のために捧げられる人は幸いです。神はそのことを決して忘れず報いられます。

（２）恵約宣教教会チーム（２００７年８月）

東京の渋谷にある恵約宣教教会の青年３人（松崎祐介さん、松下幸敏さん、中村成佑さん）が来て下さいました。彼らは、どこか短期宣教旅行に行くのに、受け入れてくれる所はないか、と探していました。そのとき、ある人が私たちのことを紹介して下さいました。だから、その３人は、マンダレー空港で初めて私と出会ったのでした。３人とも、クリスチャンになってまだ数年、特に中村成佑さん（ヒロ）は、洗礼を受ける直前なのに宣教旅行に来ました。彼らは、各集会で率直な救いの証しを語って下さいました。そのことが、ミャンマーのクリスチャンたちに大きなチャレンジとなったようです。ヒロは、この旅行を通して、「東南アジアにコーヒー農園を持って、人々に雇用を提供し、そこで働く人に福音を伝えたい」というビジョンを持つに至りました。

（中村成佑さんの証し）

ミャンマーに行った。

ミャンマーというところがある所だっけ？と皆が思うと思う。実際、ミャンマーに行く前、私はミャンマーのことを何も知らなかった。六月のある日、教会の兄弟が宣教旅行にミャンマーに行かないかと尋ねてきた。私は九月からアメリカに長いこと留学する予定だったので、これが最後の機会だと思い、是非参加したい旨を伝えた。それから、ミャンマーの事について熱心に調べてみた。世間の情報ではミャンマーは軍事政権で、非常に不安定であるように思える。「やめようかな？」とも思ったが、「まあ死ぬ事は無いだろう」と思い、自身初のアジア旅行を楽しみにしていた。以前から、現地の言葉を話せないのに宣教旅行に行く人に疑問を感じていた私は、賛美なら何かしら現地の人の心を動かす事ができるだろうと考え、一緒に行く兄弟達と何度か練習をかさねた。

さて出発の日が来た。成田からまずタイに降り立ち、一泊した。タイでの夕飯は麺がおいしかった。翌朝、ミャンマーの首都ヤンゴンへ。すぐに飛行機を乗り継ぎ、伊藤宣教師ご家族が住んでいるマンダレーへ。空港で出迎えてくれたのは伊藤宣教師のこぼれ落ちそうな笑顔だった。ホテルに向かう車内で伊藤宣教師は、どれほど私たちを待ち望んでいたか、どれほどそれを神に祈ってきたかを話してくれた。ホテルで荷物を降ろし、この日は音楽学校と称して聖書教育をしているハッピーファミリー聖書学校にて、日本人向けに特別に調理された夕食の後、礼拝に参加。まず、そこで面食らったのがミャンマー人の賛美が現代的だったところ。私たちは、「きっと現代的な賛美は伝わってないだろう」などと考え、賛美の練習をしてきたが、この意図は脆くも崩れ去った。賛美の後、人生初めての証しをした。伊藤宣教師の丁寧な通訳のもと、足を震わしながらも自分の信仰を証しすることができた。学生達は真剣に私の話を聞いてくれ、証の中にあつた私の体験にも深く共感してくれた。礼拝が終わると、皆が声をかけてくれ、握手を求めてくれた。その瞬間、私は言葉が通じない国でも、自分の信仰が現地の兄弟姉妹に何らかの影響を与えることができる事を知った。それは私自身、彼らから何らかの影響を受けている事からも明らかであった。

二日目、この日は伊藤宣教師宅でノンクリスチャンを交えての賛美集会があった。メッセージ

を含め、日本語で賛美も披露した。集会後には皆で食事をし、楽しく交わりの時を持った。この日も昼食、夕食と、特別に調理をしてくれて、お腹を壊す心配をしなくて済んだ。

三日目は主日であった。ホテルから程近いトリニティー教会にてすべてを主に委ね、礼拝する一日を過ごした。正直、二日間頑張り過ぎて少し疲れていた私は、ここで全てを主に委ね、ありのままの自分で礼拝し、賛美する事によって、体の中心から主に癒される経験をした。夕飯はハッピーファミリー聖書学校のスタッフと中華料理を食べた。翌日帰国する事を考え、少し寂しくなった。最終日は日本へのお土産を買い、空港へ向かう。ミャンマーの物価は日本の十分の一くらい。面白い物も沢山あった。マンダレー空港では、送りに来てくれた伊藤宣教師ご家族と今後の互いについて祈る。この出会いを神に感謝する。ピヤントウィメーノー！（また会いましょう）と残して、伊藤宣教師は神の御手に包まれていった。

ミャンマーはとても平和な国だった。蚊はそれほど多くなかったし、お腹を壊す心配も無かった。また、ミャンマーの心の純粋な兄弟姉妹と出会えた。この経験はこれからの私の信仰生活にとって大きな糧となるだろう。また、伊藤宣教師ご家族と出会えた事に感謝する。すばらしい人格者であると共に、神の前に正直なご家族は、まだ出会って間もない私たちにもご自身の日々の信仰の歩みを証しし、分かち合って下さった。

神から与えられたこの貴重な交わりの時と、決して断たれる事の無い神の家族の愛に感謝！

（３）北海道聖書学院（HBI）チーム（2009年7月）

片柳百合子先生と学院生5人（横谷亘さん&環さんご夫妻、木村太さん、高橋政宣さん、小清水結佳さん）の6人チームで来て下さいました。HBIでは、2年に1回、海外研修旅行に行くことになっていました。そこで、私のニュースレターを見つけて、私にEメールで打診して来たのです。私はもちろん大喜びで、「OKです。ぜひ来て下さい。」とすぐ返事しました。実は、私は以前HBIにちょっとあいさつに行って、ニュースレターを1枚置いていっただけだったのです。それが、その1枚を通して、この旅行が実現したのです。6人の誰とも1度も会ったことがありませんでしたが、Eメールでずっと、くわしいやり取りをして準備を進めました。だから、マンダレー空港で初めて会ったときにも、初対面という感じがしませんでした。2週間のスケジュールの中で、6人は、それぞれの個性と賜物を発揮しながら、実によく奉仕して下さいました。学院生の年齢がみな30代、40代ということもあって、人格的、信仰的な成熟さと落ち着きが感じられました。また、私たちと同じ世代なので、共感できる課題も多くありました。チームの皆さんは、日本の忙しさを離れて、ミャンマーの「ピーピー」（ゆっくり、の意味）の世界の中で、心のいやしを体験したそうです。私たち一家も、彼らとの交わりを通して、ゆっくりと心を休めることができました。

（横谷 環さんの証し）すべての源

「海外研修旅行で何が一番印象に残った？」一緒に行った夫に聞かれて、私ははたと立ち止まって考えた。伊藤先生ご家族とお会いできたこと、ミャンマーの人々の優しさと素敵な笑顔にいやされたこと、ミャンマーの神学校へ行って神学生と交わりをもてたこと、ピンウーリン

という保養地で安息の時間をもつことができたこと、様々な奉仕の機会を与えていただき、その奉仕が守られたこと等々……。『でもやっぱり「あなたと行けたのが一番嬉しかったわ。」と言うべきだろうか?』などと考えていたら口の中がもぞもぞしてしまい、結局“一番”を選ぶことができなかった。裏を返せば、それほど一日一日が充実していたとも言えるかもしれない。目をつぶるとたくさんの「顔」が思い浮かぶ。ミャンマーの人々の笑顔。ミャンマーの人々は、本当に素敵な笑顔で笑う。それは心から笑っている健康的な笑顔。特に“タナカ”と呼ばれる白い日焼け止めを顔中にぐるぐると塗られている子どもたちの笑顔は、ギュッと抱きしめたいほどかわいらしい。そして伊藤先生の笑顔。本当にイエス様が大好きで、その大好きなイエス様のために働けるのが嬉しくてたまらない、という笑顔をしている。そして奥様ソジョンさんの笑顔。暖かくて愛情に満ちたその笑顔に、どれだけの人が慰めと励ましを受けているだろうか。片柳先生が研修に行く前から「主のすばらしさを味わい、これを見つめる旅とさせてください。」と祈っているのを何度か聞いていた。『どういう意味かな?』ミャンマーへ行くまではあまり実感がなかった。しかし研修を終えた今、この旅が本当にそのような旅とされていたことを実感し、驚きを感じている。飛行機の中、またピンウーリンに行った時など、“何もしない”時間がたっぷりあった。また、ミャンマーのピーピー（ゆっくり）の生活の中で、疲れを覚えていた私のたましいは安らぎを得た。それは主との交わり以外に“何もしない”時間。『私は主に愛されている！主のそばにいるのが私の幸せ。主の他に何もいらない。』神様のあふれるばかりの愛を味わう体験をさせていただいた、その時、何か心の奥からわき上がってくる力を感じた。『ああ、これが宣教の核になる力だ。』そう感じた。そして伊藤先生ご夫妻の笑顔はここから来るものであることがよく分かった。



（北海道聖書学院チーム）



（後平先生たち 8 人のチーム、パラウン族訪問）

（4）後平先生たち 8 人のチーム（2009 年 8 月）

私のニュースレター「ビルマの琴音」に広告を出して、ミャンマーへの短期宣教旅行の参加者を募集しました。そうしたら、日本各地から、8 人の「勇士」が応募して下さいました。私と神学校同期生の後平一先生、その息子さんで 6 歳の広君、仙台で教会開拓中の及川安丈先生、新潟の会社員大友真理（まこと）さん、宣教師訓練コース受講中の馬場愛寿香さん、北海道の

菅原早紀子さん、埼玉県の会社員斉藤尚子さん、四国高松の高校3年生の杉原真実（まみ）さんの8人です。とても多彩でみんな個性豊かな「混成」チームでしたが、リーダーの後平先生のもとで、8人は実によく一致して、チームワークで動いて下さいました。トリニティー教会では、朝の教会学校から、主日礼拝、日本語教室、夕拝まで奉仕して下さい、特に子どもの教会学校ではMEBIGで大変盛り上がりました。その後、マングレーから車で8時間かかる所にある未伝道部族、パラウン族の村を訪問して、現地人伝道者の働きために「祈りの歩行」をして来ました。馬場愛寿香さんは、7人が日本に戻った後も、もう一週間延長滞在して、私たち一家と共に「ダラ」という町を訪問しました。貧しい人たちの中で子どもたちに福音を伝え、実を結んでいる現地人伝道者の働きを見て、大きな励ましとチャレンジを受けました。

（杉原真実さんの証し）

私は今回、このミャンマーの宣教旅行に参加でき、とても感謝でした。このツアーで感じたことや出来事などを書いて見たいと思います。私は初め、参加する前から、目標というか祈りがありました。この旅で「神さまとの関係を再確認したい。自分の生きる意味、生きるよこび、何のために生きているのか等をもっと良くわかりたい。」と思っていました。私は、この旅行に来る前からクリスチャンであってバプテスマを受けていましたが、そのことがどうしてもわからず、生きる意味がわかりませんでした。また、病んでしまうと「生きたくないな」とよく思っていました。なので、それを神様にお祈りして、旅に参加しました。初めてミャンマーに来て、いつもの生活環境と違うので、少し戸惑いました。日本にいる時は、静かな礼拝しか出たことがなかったので、すごく驚きました。本当に神様だけを見て、心から讃美しているみんなの姿を見て、びっくりしました。「これが本当に神様と会話して、心から礼拝することなんだ。」それを見て、それまでわからなかったことが、少しわかるような気がして、涙が止まりませんでした。心が震えてとても感動しました。

今回の旅行では、ミャンマーでのスケジュールがわかった日からすごく悩んでいたことがありました。それは、あかしとダンスです。私はあまりあかしをしたことがないし、ダンスも普段はチームで踊っていたので、一人で踊ることにすごく抵抗がありました。それでも、神様が与えてくださった奉仕だから、精一杯やろうと思ってミャンマーに来ました。でも、実際本当に気が重くて緊張して、早く終わってほしいと思っていました。また、ミャンマーに来てからも、周りのクリスチャンと自分を比べてしまい、すごく卑屈になっていました。「私はあんなにすごくないし」とばかり思っていました。こんな気持ちであかししてもいいのかなあ。でも、あかしとダンスをする前日、伊藤先生と話す機会が与えられました。その時、泣きながら、伊藤先生に思っていることやどうしてミャンマーに来たのかをすべて話すことができました。そして、伊藤先生は、私のためにお祈りして下さいました。その時から、私の心は180度変えられました。何も状況は変わっていないのに、神様は私の心を変えてくださったのです。「私には何も力はないけど、神様が私を強めて、一緒にいてくださるから、何も不安に思わないで、精一杯がんばろう。」そう思うように変えられました。本番では、いつもは手がふるえる程緊張するのに、全く緊張せず、あかしとダンスをすることができました。また、終わった後は、本当に神様の恵みが私を包み、喜びにあふれていました。このすばらしい気持ちを伝えたい。だ

から、「私もあかしをして共に生きて行きたい」と初めて思うことが出来ました。

そして、未伝道地域のパラウン族訪問は、想像していた以上に素晴らしい体験でした。こんなに遠く離れて、国も文化も言語も違うのに、同じ神様を信じ、まだイエス様のことを知らない人々に福音を伝えるために一生懸命働いている人と出会えてうれしかったです。素晴らしい神様の愛と力に感動し、恐れおののきました。神様は私たち人間すべてを愛して下さっていることが改めてわかりました。この先生たちの働きを日本でも伝えてもっともっと自分の教会のためにも仕えていきたいと思います。

本当にこのミャンマー宣教ツアーでは、素晴らしいメンバーと旅ができ、素晴らしい人々に会い、素晴らしい主の愛にふれることができました。初めは、こんな宣教旅行だと思っていませんでした(笑)。ちょっと教会を訪問するだけぐらいにしか思っていませんでした。でも、神様は私をこの旅に導いて確かな答えを下さいました。神様は、私の小さな祈りを聞いてくださり、何十倍にもして私に示してくださいました。この方こそ、私の神であり、主です。私は何も恐れなくて、ただ主だけを見て生活して行けばいいことを知りました。すべてを神様におまかせして生きてゆく!!!それを教えていただきました。旅が終わってから、「神様のことをもっと知りたい、もっと関わりたい。」と思うようになりました。普段の生活に戻ってもいつも神様の声を聞いて、近づいて、全てを頼って生活して行きたいです。デボーションを頑張って霊的に成長し、日々の生活の中に神様の存在をもっといっぱい見つけて行きたいと思います。素晴らしい主の導きに驚きの連続の旅でした。これからも神様と一緒に生きて行きたいです。ハレルヤ!感謝します。

(5) ブンキョウゴスペルセンターチーム (2009年11月)

福井県のブンキョウゴスペルセンターという教会から、5人のチーム(小野山千華先生、中林史郎さん、山下健太さん、山田幸代さん、ファン・ジンリさん)が来て下さいました。千華先生は、以前マンダレーに来たことがあって、もう一度教会の若者を連れて行きたいと願っていたのですが、今回実現しました。宣教旅行に慣れていて、英語もでき、劇や証しもよく準備していて、よく訓練されているチームでした。特に伝道スピリットが素晴らしくて、マンダレー・ヒルという観光地に行ったときは、会う人にどんどんトラクトを配り、大胆に証しするのを見て、とてもチャレンジを受けました。日曜日の日本語教室には、近所の未信者の子どもたちがたくさん来て、彼らに合わせた劇や証しをしました。このとき以来、その子どもたちは毎週来るようになりました。その後、チームはヤンゴンに行き、ダラという町で子ども伝道をしているモン先生の所で奉仕しました。



(ブンキョウゴスペルセンターチーム)



(CFNJ 聖書学院チーム)

(6) CFNJ 聖書学院チーム (2009 年 12 月)

北海道にある CFNJ 聖書学院から、8 人のチーム（鍛冶川利文&紀子先生ご夫妻、外山敏行さん、稲本妃美子さん、西岡潤也さん、増田成遂さん、須藤大地さん、高木純一さん）が来て下さいました。マンダレーのハッピーファミリー聖書学校の創立者であるダニエル・マッカーシー先生が、CFNJ とつながりがあって、2 年前に一度行こうとしたのですが、反政府デモが起きて、そのときはできませんでした。しかし今回、ダニエル先生の強い勧めによって、やっと実現しました。学生たちは若くてとても元気が良く、賜物も多くて、劇や証し、奉仕、現地学生との交流など、活発に動いていました。後半は、タウンジーという町に行って、孤児院を訪問して、教会で奉仕して、インレー湖で船に乗って観光しました。また、外山敏行さんと妃美子さんは、以前から交際していたのですが、旅行中に私たち夫婦と色々と話をする中で結婚をする決心に至って、3 ヶ月後に結婚式を挙げました。

(鍛冶川紀子先生の証し) I LOVE ミャンマー

『主によって語られたことは必ず実現すると信じきった人は、何と幸いなことでしょう』
2007 年の元旦礼拝で、私は主に尋ねました。「今年は学院の海外アウトリーチの年です。主よ、どこに行きましょうか？」と。すると主はすぐに「ミャンマー」と語ってくださいました。私は続けて尋ねました。「ミャンマーは軍事政権下の国だし、言葉も難しそうだし、私が行っても十分に証しすることも出来ないのではありませんか？」と。すると主は「ミャンマーには伊藤宣教師がいる」と語ってくださいました。早速そのことを主人に分ち合い、ミャンマーに行く準備を始めましたが、その年、折悪しくミャンマーで暴動が起こり、日本人カメラマンが殺されると言うショッキングな出来事が起こり、大切な学生達を危険な目には合わせられないという理由でその年のミャンマー行きは中止となりました。2 年後の今年、私はもう一度先に語られた主の言葉を思い出しミャンマー行きを祈り始めました。そして主が語られたお言葉に、今こそ従うときだと思い参加を決意したのです。

マンダレーの聖書学校、ハッピーファミリーに到着して、学院長夫妻を初め優しいスタッフの

方々や、明るく、人懐っこく、輝いた笑顔で迎えてくれた学生達の姿を見たとき、本当に来てよかったとまず思いました。一番に驚き感動したのは主を愛する彼らの喜びと踊りに満ちた賛美でした。集会の中で幼い子供たちも、霊によって心から主を礼拝している姿を見て、素晴らしい弟子訓練が成されているのだなと感心しました。CFNJ チームの若い学生達はすぐにミャンマーの人々の中に溶け込み、様々な奉仕をする中で、言葉の壁や文化の壁などを乗り越えて、主にある交わりを心から楽しんでいる様子で、とてもほほえましく嬉しく思うと同時に頼もしくも感じました。個人的には今回のアトリーチで最も印象に残ったこと、感謝だったことは、現地に遣わされて7年間忠実にミャンマーの人々に仕えておられる伊藤宣教師ファミリーと出会い、奥様のソジョンさんや3人の子供さんたちとともに、祈りあいながら主の働きをし、交わり、楽しく過ごせたことでした。特にダンスの賜物を持った賢い雄基君(7歳)には、すっかり心を奪われてしまいました。冗談抜きでカバンに詰め込んで日本に連れ帰りたいくらいでした。伊藤先生が日本語からミャンマー語に通訳してくださったおかげで、チームの全員が、心置きなく証しやメッセージを取り次ぐことが出来ました。私の証に感動して泣きながら通訳してくださったり、チームの状態が悪いときにはまず祈りましょうと声をかけてリードしてくださったり、本当に何から何までお世話になり、感謝でいっぱいです。ハッピーファミリーのダンスチームの姉妹達にタンバリンやフラを教えるチャンスも与えられ、教会で共にクリスマスフラを踊れたことも大きな喜びでした。メイゼンというひとりの姉妹がミャンマーでの私の霊の娘となりました。このミャンマーアウトリーチを可能にしてくださり、ミャンマーの人々を愛する心を与えてくださり、よりよき関係を結ぶように導いてくださった神様と、ダニエル宣教師に特別な感謝を捧げます。そして、献金や祈りで支えてくださった、愛する神の家族の皆様に心から感謝いたします。ハレルヤ～！

「短期宣教チームが来て結んだ実」(ソジョン・記)

2009年は、短期宣教チーム訪問の大豊作でした。合計4チームが来てくれました。「日本のクリスチャンが世界宣教に出て行くための橋渡しとなる」という私たちのビジョンと祈りに、主は期待以上に応えて下さいました。そして、日本からのチームが来るたびに、ここでの宣教活動に突破口が開かれたのです。・・・私たちの日本語教室は、「日曜日に未信者を教会に誘う」という伝道の目的をもって始めていましたが、中々未信者が定着しませんでした。しかし、7月チーム(HBI)が来たとき、教会から離れていた人たちが再び来てくれました。8月チーム(後平先生たち8人)のときは、子ども伝道のMEBIGセミナーと実践によって、大きなチャレンジを受けました。11月チーム(ブンキョウゴスペルセンター)のときから、近所の未信者の子どもたちが毎週来るようになり、そのため、彼らにターゲットをしぼって、思い切ってプログラムを一新しました。日本語は少しだけにして、ゲームと伝道メッセージと暗唱聖句によるMEBIG方式を取り入れました。その後、子どもたちだけでなく、中高生や青年達も新しく加わり、たまにはお坊さんも来るようになりました。そして、12月チーム(CFNJ)のときは、今まで最高の、50人を超えたにぎやかな集会となりました！・・・このようにして、私たちだけではできなかった伝道の門が、日本からの同労者たちの助けによって、大きく開かれたのです。なんと不思議で、感謝なことでしょうか。今、元気に楽しく毎週集まって、少しずつ変

えられて輝いている子どもたちの顔を見るたび、主の素晴らしいみわざを賛美せずにはいられません。尊い犠牲を払ってこの地を訪ね、この民を愛し、祈り、イエス・キリストの愛を注いでくださった皆様に、心から感謝します。

(7) 及川先生たち 4 人のチーム (2010 年 3 月)

2009 年 8 月のときに 1 度来たことのある及川安丈先生と、その息子の仰君 (10 歳)、今井南海 (みなみ) さん (高 3) とその弟の鷹志 (たかし) さん (高 1) の 4 人で来ました。及川先生は、「希望の車いす」という働きをしています。これは、日本で使われなくなった車いすを修理して、アジアの貧しい人たちに贈るという働きです。今回は 2 台の車いすを持って来ました。マンダレーの障害者団体の、ニューライトという団体を通して、障害のある若者 2 人に直接手渡しでプレゼントして、同時に福音を証しすることができました。今井さん姉弟の 2 人は、そのお母さんが子どもたちの救いと信仰の成長のためにミャンマーに送ろうと思い、本人も海外を体験したいということで、やって来ました。キンピたち兄弟姉妹と同世代で、一緒にピンウーリンに行ったり、及川先生の持って来たスポーツチャンバラで盛り上がりたりするなど、良い交流を持つことができました。



(及川先生たち 4 人のチーム、車いすをプレゼント)

(藪内祐衣さん・新門広美さん)

(8) 藪内祐衣さん・新門広美さんチーム (2011 年 1 月)

1 月 11 日～24 日に、藪内祐衣さん・新門広美さんの 2 人が、マンダレーを訪問して下さいました。キンピの家で、彼女たち 2 人を講師として、日本語教室をやりました。近くの男子寮から 3 人の学生 (未信者) が来てくれました。とても反応が良くて、その後も日本語教室に参加するようになりました。主日には、トリニティー教会の午前の礼拝で祐衣さんが証しをして、ミャンマーに来るまでの紆余曲折を生々しく話して下さいました。「何回も妨害、壁があっても、神様の御声に聞き従って、あきらめずに、信仰をもって前進して、やっとこのミャンマーに来ることができた」という証しに、みんなが励まされました。午後には、広美さんが、未信者向けに救いの証しとメッセージ、そして、詩篇 100 篇の歌詞で詩吟を歌った CD にあわせて、日本舞踊を披露して下さいました。サムライのような力強い舞いで、大好評でした。すばらし

い賜物が、日本文化の紹介と共に、世界宣教に用いられれば、と思いました。その後、サガイン・レップン村に伝道に行ったり、マンダレーのエルベテル教会の孤児たちを訪問したりしました。12日間の滞在中、雄基、愛希、聖治たちも、お姉さんたちに遊んでもらって、大喜びでした。

(9) 菅原早紀子さん (2011 年 6 月)

6 月 2 日から 27 日までの 25 日間、菅原早紀子さんがミャンマーに来て下さいました。彼女は北海道に住んでいる保育士の方で、2009 年 8 月に、一度短期宣教チームでここに来たことがあります。滞在中、私たち一家と一緒に、タウンヨー族という未開拓・未伝道部族の所に、一週間伝道旅行に行きました。今回は、先生の家で 8 人ほどが参加して、天外内トレーニング（弟子育成セミナー）をしました。早紀子さんも、通訳をしてもらいながらメモを取って、熱心に学んでいました。その次の日から、参加者がみんなで一緒にタウンヨー族の村に伝道に行き、学んだことをすぐ「実践」しました。早紀子さんは、伝道に行く先々で「エプロンシアター」という、エプロンの上での人形劇をやって見せてくれました。ある山奥の村で、エプロンシアターを使って「放蕩息子」の話をしたら、「息子が村を出て都会で放蕩する」という話がこの村の状況とぴったり合っていたせいか、みんなとても良くわかって、「うんうん」とうなずいていました。彼女は、保育士という賜物と経験を生かして、現地の保育園でも良く奉仕してくれました。ことばがわからなくても、身振り手振りとスキンシップで、子どもたちと良くコミュニケーションできました。わが家の子どもたち 3 人のためにも、一人一人交代しながら相手して、本を読んだり、絵を描いたりして、「教育宣教師」の役割をして下さいました。私たちは「未来の宣教師育成のために、日本の若者たちを宣教の現場で短期実践訓練して、将来宣教師になるための手助けをしたい」と願って、ずっと祈って来ました。早紀子さんは、まさにその祈りの答えでした。本当に主に感謝します。



(菅原早紀子さん、エプロンシアターの様子)

(菅原早紀子さんの証し)

6 月 2 日～27 日まで、ミャンマーを訪問しました。2009 年に初めてミャンマーを訪れ、今回の訪問は二度目となります。前回とは違い今回は一人で出発し、少し長く滞在することにな

りましたが、神様が心を平安で満たしてくださったので、不安に感じることもなく、まるで足のつかない深い海の真ん中で、神様に全てを委ねてプカプカ浮いているような感覚でした。マンドレーでは、エルベテル教会がやっているエデン保育園に4日間通わせていただくことになりました。私は日本の保育園で働いているので、ミャンマーの保育園がどういう所か、どんな必要があるのかを知りたいと思っていました。保育園では「セアマー(先生)！セアマー！」と可愛い子どもたちが次々に集まってきて、緊張が一気に消えました。というのも、それまではいつも伊藤先生ご家族に同行させていただいていたのですが、訓練のために一人でタクシーに乗って保育園へ行き、通訳なしの環境で過ごしてみるようにと課題を与えられ、いつもより緊張してホテルを出たのです。しかし、ミャンマーの子ども達も日本の子ども達もちっとも変わらず、膝の上にちょこんと座ったり、私がミャンマー語を理解できなくてもたくさん話しかけてくれたり、「これ見て！」と色々なものを見せに来てくれました。私が片言のミャンマー語で「これ何？」と聞くと、ミャンマー語をたくさん教えてくれて、日本の手遊び歌を覚えて会うたびに歌ってくれました。保育園での時間はとても楽しく、毎日あつと言う間でした。最後の日に、ミャンマー人の保育園の先生が私の乏しい英語をミャンマー語に通訳してくださり、エプロンシアター（エプロンの上を舞台に人形などを使って話を展開する、小さな子どものための視覚教材）で「天地創造・罪・十字架の救い」のお話をしました。教会がやっている保育園ですが子ども達はこの話を聞くのは初めてでした。「イエス様を信じる！」「天国に行きたい！」と次々に答えてくれる子ども達を見て、ミャンマーの子ども達やその家族に福音を伝えたいとますます強く思うようになりました。

ミャンマーでは素晴らしい体験を本当に多く与えられましたが、伊藤先生ご家族に家族の一員のように迎えていただいたこともその一つです。伝道集会などの外出予定のない日は、ホテルから先生のお宅まで歩いて行き、雄基君、愛希ちゃん、聖治君と一緒に勉強をしたり、絵本を読んだり、遊んだり、ホームスクーリングをほんの少しだけお手伝いさせていただきました。この時間は本当に楽しかったです！夕方にはソジョンさんの美味しいご飯をご馳走になり、家庭礼拝に参加するというのが日課でした。家庭礼拝ではたくさん賛美をし、ミャンマーの宣教のために、ミャンマーの働き人や兄弟姉妹のために、日本の教会と働き人や兄弟姉妹のために、離れている家族のために、そしてお互いのために毎日家族全員で祈っています。私は弱く無力な自分を見ると、とっくにホームシックになり帰りたくなっていたかもしれませんが、この家庭礼拝を通しいつも神様を見上げることができ、神様の全能の力に期待し続けることができました。家族全員が一つの宣教チームとして神様にお仕え出来るなんて、なんて素晴らしいことだろうと感動しました。

私はこの宣教旅行に行く前は、ミャンマーに行きたいと願う半面、私のような者が行ったところで、何のお役にも立てないのではないかと、私の現在の職業もミャンマーの宣教には関係がないのではないかと考えることがありました。しかし、ミャンマーに来てその思いは全く消え去りました。ミャンマーでは私の現在の職業も、どこから見てもミャンマー人の様な外見も、ところが実は日本人であるということも、どこへ行っても不思議ととても歓迎されました。これは私の努力で得たのではなく、神様から宣教のために与えられた賜物だと思います。旅行前は考えもつかなかったことですが、私に与えられた役割は、現地の働き人と協力し合い、今の職業を通して、どこにでもいる普通の人として、福音を聞いたことのない人々の所へ出掛けて

行き、神様がどのように私の人生を変えてくださったのかを証したり、エプロンシアターのよう
な与えられた道具を用いて、福音の種をどんどん蒔くことだと思えるようになりました。どう
進んだら良いのか分からなかった道が、少しずつ見えてきたような気がします。想像を遥かに
超える、素晴らしい旅を与えてくださった神様に感謝します。また、私を家族のように迎えて
くださった伊藤先生ご家族と、祈り支えてくださった教会の方々と家族、お腹を壊さないよう
に毎日祈ってくれた友人に心から感謝します。

短期宣教旅行の3つの祝福（仁・記）

短期宣教旅行には、3つの大きな祝福があります。

（1）まずは、長期宣教師にとって、大きな励めと励ましになります。「こんな遠くて大変な所
まで、時間とお金の犠牲を払って、よく来て下さった」ということ自体が、感激なのです。「あ
んまり行くと宣教師にとって迷惑になるのではないか」と心配する人がよくいますが、そんな
ことは全然ありません。同じ日本の人と会って、色々と話をしたり、ミャンマーのことを紹介
できるのは、この上もない喜びなのです。特に子どもたち（雄基と愛希）は、いつもお兄さん、
お姉さんたちに遊んでもらえるので、「今度はいつ日本チームが来るの？」と言って、心待ちに
しています。そして、日本からチームが来る時というのは、私たちが普段伝道して祈って来
た未信者たちを教会に誘う大きなチャンスになります。彼らは「日本からチームが来る」とい
うだけで、教会に来るのです。だから、チームが来る時は、私たちにとって一大イベントで
す。普段蒔いておいた種が、刈り取られるときです。このようなときをきっかけとして、信仰
を決心したり、成長したりして、私たちの普段の宣教活動の突破口となることが多いのです。
長期宣教師にはできないことが、短期宣教チームにはできるのです。これも、短期宣教チーム
だからこそできる特権です。

（2）次に、現地人教会のクリスチャンにとっても祝福となります。彼らは、困難の中にあっ
て、孤独感と、平凡な毎日のくり返しという無力感におそわれることがあります。しかし、そ
んなとき、遠い外国のクリスチャンがこのミャンマーを愛して、自分の国のために祈ってくれ
て、ここまで来て助けてくれる、世界に同盟軍がいる、ということを知って、大いに力づけら
れ、刺激とチャレンジを受けるのです。

（3）そして、一番大きな祝福を受けるのは、おそらく旅行に来る本人でしょう。短期宣教旅
行に行く前から、まず信仰が試され、色々な困難を乗り越えて、それでも行く決心をして、信
仰が成長します。現地では、日本の日常では体験できない様々なことを肌で感じ、学び、チャ
レンジを受けます。現地の人たちと直接交わり、世界大のニーズに目が開かれ、視野が広が
ります。奉仕を通して、賜物が生かされ、「こんな自分でも主は用いて下さるんだ」という喜びを
味わいます。他人の目や評価を気にすることから解放されて、主の目で自分を見るようになり、
自由になります。宣教地での主のみわざを見て、主と深く出会い、御手に触れられて、心のい
やしを体験します。忙しい日常から離れて、人生の目標を考え直し、人生が変えられます。宣
教の炎に燃やされ、新しいビジョンを見出し、希望にあふれます。そして、その恵みを持っ
て、日本に帰って行くのです。

私たちは、こんなにも素晴らしい短期宣教の祝福を、もっと多くの日本のクリスチャンに味わってほしい、と切に願っています。そして、そのような宣教志願者をどんどん受け入れて、彼らが将来世界へはばたいていく手助けをしたい、そのための橋渡しになりたいのです。……私たちのビジョンは、2本柱のビジョンです。1つはミャンマーのリバイバル、もう1つは日本のリバイバルです。そして、その日本のリバイバルは世界宣教から始まる、と私は信じます。私たちが短期宣教チームを受け入れることは、この2つのビジョンを1つにすることなのです。日本のクリスチャン、特に若者たちが、どんどん世界に出て行って、世界各地で活躍するような日が来ます。いや、もうすでに来ています。私はそのビジョン実現のために、今から備えているのです。

この本を読んでいるあなた、ぜひ短期宣教旅行に行ってください。「百聞は一見にしかず」です。ものはためし、何事もやってみないとわからないではありませんか。どうかあまり深く考え過ぎないで「気ラクーに、フラーっと」来て下さい。心からご案内致します！

18、ミャンマーの全ての部族・地域に教会を

2010年2月22日に、マンダレーで、アン・カンヒ宣教師を講師としてFTT (Finishing The Task) セミナーを開きました。FTTとは、主イエスの下さった大宣教命令（マタイ28：19, 20）の任務を「完了」させるための運動で、未接触・未伝道部族 (Unengaged Unreached People Groups) の中で教会開拓を始めることを目的としています。ミャンマーにある部族の中で、特に福音が届いてない、教会がない地域が宣教のターゲットです。未接触・未伝道部族が一番多いインドで、現地教会を動員したネットワークを通して、最近の4年間のうちに260の教会が始められたことを聞いて、驚きとチャレンジを受けました。アン先生は私たちに、こう話して下さいました。「韓国には教会がない地域はない。それは以前、韓国に来たアメリカ人宣教師達が、教会がないところを全部調査して地図を作り、その地域をターゲットにして開拓するように現地人に教えたからである。まさに、今ミャンマーに必要なことである。しかし、まだ、その働きをする人がいない。」その話の中で、ミャンマーの全ての地域に主の教会を始めるビジョンが与えられました。そして、セミナーで決心の時に、4部族中で特にダウエイ族を祈りました。そうしたら、その後、ちょうどダウエイで開拓を始めている2人の働き人に会いました。祈り始めたら、主が不思議に出会わせて下さったのです。これが私たちにはひとつの主からのサインでした。私たちの役割は、ミャンマーの地域教会を国内宣教や国外宣教に動員し、励ますことです。そして、未伝道部族や無教会地域での働き人と、地域教会をネットワークでつなげてあげる、橋渡しの役割です。この国の働き人たちが、そのようなネットワークによって支援されれば、どんなに助けになるでしょうか。ミャンマーに来て8年目に入る私たちに、神様は新しい使命を与えて下さいました。宣教に献身し、主からのビジョンと命令に従う、キリストの兵士たち。彼らがこの国の隅々まで、福音の光を届けるように、道を作る働きです。それ

によって、このミャンマーの全ての地域に主の教会が起こされ、主の栄光が現れると確信します。ぜひ、そのために祈りください。ミャンマーの全ての部族・地域に教会を！

(ソジョン・記)

(1) ダウエイ訪問記 (ソジョン・記)

私たちは、マンダレーでの FTT セミナー (2010 年 2 月) で、未接触・未伝道部族への宣教についてビジョンとチャレンジを受けました。その後、未接触・未伝道部族リストの中で、ダウエイ族を訪問したいと思って、祈っていました。しかし、ダウエイ族について何も知らなかったもので、どう始めていいかわかりませんでした。そこで、まずは FTT ディレクターのアン・カンヒ 宣教師と一緒にヤンゴンに行って、情報と紹介を得ようと思いました。そうしたら、そのヤンゴンのホテルの廊下で、ダウエイ族で伝道しているという若い伝道者 2 人と出会ったのです！私たちの祈りに、主はこんなにも早く答えてくださったのを見て、これが主の御心であり、私たちをこのビジョンへと進ませようとする主の熱意を感じました。その 2 人とホテルのロビーで話し合って、ダウエイ族を訪問する計画を立てました。そして、日本に帰る直前の 4 月に、訪問することにしました。

彼らが開拓している地域は、ダウエイ市から車で 5 時間かかるところにあります。私たち一家 5 人と、その伝道者、そして運転手で、ワゴン車で行きました。そこは、外国人は旅行禁止の地域ですが、守られるとの信仰で行くことにしました。途中、検問所があってドキドキしました。道はものすごくガタガタで、車は揺れて座席から落ちそうになるくらいでした。土ぼこりが舞い上がり、窓を閉めても車の中がほこりだらけになって、髪の毛がほこりで真っ白になりました。4 月はミャンマーで一番暑い季節なのに、車の窓を開けられなくて、風も入りません。エアコンは、あっても全然効きません。それはもう大変な暑さでした。最後は車も入れない道で、降りて草むらの中を歩く始末でした。そうしてやっとその家に着くと、「外国からお客さんが来た」ということで、家族親戚、近所の人も集まって、その場でいきなり家庭集会が始まりました。以前その伝道者を通して、その家の主人は福音を聞き、キリストを受け入れて 1 年ほどたっていました。彼は、救いの喜びにあふれた顔で、私たちに証しを語って下さいました。

「私は、昔は悪霊につかれていて、胸に刺青をして、夜は金縛りで苦しんでいました。でも、イエス様を信じてから、その日の夜に胸の刺青がさっと消えてしまい、その時から悪霊は出て行きました。また、夜に聖書が光っているのを見ました。私は救いの喜びにあふれていました。その後、泥棒をしたという誤解を受けて、私は牢屋に入れられてしまいました。でも、主が共にいて下さって、信仰の力で、この苦難を乗り越えることができました。その後、無実であるとなり、牢屋から出されました。今は、この家での家庭集会に近所の人たちを次々と誘い、息子も将来伝道者になりたいというビジョンを持っています。」こう話して、彼は外国から来た私たちを、心から歓迎して下さいました。私たちは、大いに励まされて、共に主をほめたたえ「大変だったけど、ここに来て本当に良かった」と実感しました。帰り道、体はクタクタだったけど、心は喜びにみちて帰りました。彼らは、このような奥地で、犠牲を払って献身的に奉仕し、霊的に戦っているのです。私たちは、こういう伝道者、働き人たちを応援していきたい、と心から思いました。そして、このように未伝地で伝道している働き人を、日本の教

会とネットワークでつなげて支援していくこと、それが私たちの使命なのだ、と改めて確認できたのです。



(ダウェイ族伝道)



(サガイン・レッパン村伝道)

(2) サガイン・レッパン村伝道 (ソジョン・記)

2011年1月11日～24日まで、新門広美さん、藪内祐衣さんの2人が、この地に来て下さいました。そして19日には、サガインで開拓伝道しているソーエーワ先生を、私たち一家5人と2人で一緒に訪問しました。まず午前中は、先生の教会で、40人以上の人々が集会に参加しました。その中で、祐衣さん、広美さん、私(ソジョン)が証しをしました。その後で仁が、「天・外・内トレーニング」(伝達が簡単で、宣教地で効果的な弟子育成方法)をやり、90秒で自分の救いの証しを話す練習などをしました。そして昼食後、車で30分ほどの、レッパン村に向かいました。この村は、特に仏教の強い地域で、教会やクリスチャンのいない「未伝地」です。この村のウーヤーチョーさんの親戚は、入院していたときにソーエーワ先生の奥さんに会い、その祈りによっていやしを体験しました。それ以来、一家そろって福音に心を開き、ソーエーワ先生の訪問を歓迎するようになったのです。ウーヤーチョーさんはまだ洗礼は受けていないけど、ほとんど信じていて、その村の「平安の子」(キーパーソン)でした。私たちの一行が来ると近所のみんなを家に呼んで、30人ぐらい(全員未信者！)が集まり、庭にごさを敷いて、「臨時伝道集会」が始まりました。そして、広美さん、祐衣さん、私、主人が次々と救いの証しをしました。そして最後は、主人が受け入れる祈りをすると、みんなが声を出して一緒に祈るのです。とにかく、すべてが守られ、みんなが喜んで福音を聞いてくれたことに、心から感謝しました。日本から来た2人も、大きな励ましとチャレンジを受けました。私たちはこの訪問を通して、FTT(未伝道部族・無教会地域での開拓)と天外内トレーニング、そして短期宣教旅行(MIT、モバイル・インパクト・チーム)の働きに確かな手ごたえを感じ、「これがこれから進む道だ」という確信を持つようになりました。これからも、このような未伝地を次々と訪問して、家の教会の開拓を助けていけるようにお祈り下さい。

一人のたましいのために (ソジョン・記)

2011年4月3日、朝早く6時半に家を出発して、マンダレーから1時間ほどのサガイン市

にあるソーエーワ先生の家に向かいました。着いてすぐに、先生ご夫妻と一緒に、そこから 30 分ぐらいのレッパン村に向かいました。ウーヤーチョーさんの家での集会で、最初お坊さんが突然登場して色々と議論が始まって、今日はどうなるのかなと思いました。しかし、その中で子ども達が 15 人ぐらい集まったので、ソーエーワ先生の奥様が、となりで静かに賛美して、簡単に福音を伝えました。その時、子どもたちは目を輝かせながら、賛美を歌ったり、返事をしたりしていました。やがてお坊さんは帰り、その後続けて、仁が絵本を通して福音を提示しました。やはり視聴覚教材が村の人々には効果的でした。それから私（ソジョン）が短く証しをしました。「地震と飢饉と戦争のうわさがある今が、まさに終わりの時です。主イエス様が再び来られる日は近づいています。だから、遅くならないうちにイエス様を信じ受け入れ、永遠に生きる天国に共に行きましょう。今こそ福音を伝えるために出て行きましょう」と話しました。そして、福音を伝えるべき一番の理由は、再臨と死後の裁きがあるからであり、またそれこそが福音の力であることを、私自身がもう一度感じました。その後、ソーエーワ先生が受け入れる祈りをしました。みんな素直に受け入れてくれて、特にウーヤーチョーさんの夫婦は信仰の告白をし、また来て下さいと言いました。色々な妨害と霊的圧迫感、緊張の中でしたが、主は人々の心にふれてくださいました。本当に主の守りを感じました。それから、サガインのソーエーワ先生の家に戻り、午後 2 時からの礼拝を準備しました。午後の礼拝では、とても暑くて疲れていましたが、賛美の中でふっとイエス様のことを思い出しました。ヨハネ 4 章 6 節には「イエスは旅の疲れで、井戸のかたわらに腰をおろしておられた」と書いてあります。パレスチナの地の昼間で、たぶんイエス様も、とても暑かったでしょう。でも、そこでイエス様はサマリヤの女と出会い、救いのみわざをなされたのです。イエス様の一人の魂に対するあわれみと愛を思った時、涙があふれました。そして「その一人の魂をも愛するイエス様の心を注いで下さい」と祈り求めました。また「私たちがこの地で、一人の魂でも救おうとして流したこの汗と涙は、いつか報われるのだ」という確信が来たのです。

「見よ。わたしはすぐに来る。わたしはそれぞれのしわざに応じて報いるために、わたしの報いを携えて来る。」（黙示録 22 : 12）

（3）パレイ町で天外内トレーニング

パレイ町は、マンダレーから車で 40 分ぐらいの所にあります。ここは以前、全くの無教会地域でしたが、マンダレーのエルベテル教会のタウンオル先生の伝道によって、1 家族が信じて、そこから家の教会の開拓が始まりました。今では、大人 8 人ぐらいが毎週集まっています。みんな信じてから 1 年もたっていない人たちばかりですが、救いの喜びと伝道の意欲で燃えています。アウンミューテインという 21 歳の青年（仏教出身の家庭でしたが、キリストを信じて献身した）が、その家に住み込んで伝道とフォローアップをしています。このパレイの家の教会で、3 月 17 日から毎週木曜日、4 週連続で、天外内トレーニングを開きました。その後、4 月 14～16 日の 3 日間、パレイ町の家の教会で、エルベテル教会の修養会が行われました。この時期は、1 年で一番暑い時（35 度以上！）で、ミャンマー暦の年末の「水祭り」の時です。車道を行くときに、水をかけられながら行きました。未信者向けのコースはタウンオル先生が担当し、5 人が参加しました。その中で、ナインウェンという青年が信仰の決心をして、後で 4

月 24 日にバプテスマを受けました。信者向けコースは私たちが担当しました。マンダレーのエルベテル教会の青年や子どもたちも参加して、20 人ぐらいになりました。天外内トレーニングの 1 段階を、全部教えることができました。このトレーニングを通して、コーポール・マモウン夫妻（ビルマ族、イスラム教出身、信じてから 1 年弱）、エーミーサンという主婦（ビルマ族、仏教出身）、アウンミェントウという青年（ビルマ族、仏教出身、主を信じてから半年ぐらい）は、霊的に急成長して、周りの人によく証しするようになりました。

5 月 28 日（土）と 29 日（日）には、パレイ町で弟子訓練を行いました。ソジョンのクラスは天外内トレーニングの 1 段階を教えて、4 人が参加しました。仁のクラスは天外内トレーニングの 2 段階（弟子育成者コース）を教えて、5 人が参加しました。タウンオル先生のクラスは未信者向けのコースで、7 人が参加しました。土曜日の午後には、伝道実践で、2 人組みになって未信者の家を訪問して、証しをして、祈ってきました。次の日の主日礼拝では、訓練参加者に司会や証しをしてもらいました。参加者の一人であるマ・ピューピューさん（主婦）は、バプテスマを受けてからまだ 1 ヶ月ですが、救いの喜びにあふれて、すぐに伝道に出かけて、自分の家の大家さんに証しして、私たちの所に連れてきました。コーポールは、信じてからまだ 1 年経っていませんが、今ではパレイ教会の長老的存在で、礼拝も彼の家で持たれています。今回は、主日礼拝で賛美リードと福音提示、ショートメッセージを担当しました。今回の未信者コースに来た 7 人のほとんどは、彼の知り合いです。これを通して、アウンソーレンとモーモーの 2 人（夫婦）は、バプテスマを受ける決心をするに至りました。マ・テインギーという主婦は、まだ受洗決心には至っていませんが、家にある偶像を取り払ってしまいました。そして、このセミナー参加者のために食事を全部準備してくれました。マ・ヌーという主婦は、このときに参加して、私たちが彼女のお金の問題のために、手を置いて祈ってあげました。そうしたら、そのすぐ何日か後で、彼女が他人に貸した後ずっと返って来なかったお金の一部が「奇跡的に」返って来たとのことでした。驚いた彼女は、イエス様を信じただけでなく、このことを親戚、近所の人みんなに「言いふらし」て、何人かの友人を教会に連れて来ました！

今回の弟子訓練では、参加者が住んでいる現場の村で教えて、関係形成ができている人に焦点を絞って訪問して、証したので、すぐに伝道の実が結ばれました。それと同時に、「天・外・内」の順序の通りに、信じてすぐの初信者が、外への伝道を通して、信仰が急成長することが実証されました。主に感謝します。

（４）タウンヨ一族宣教レポート

2011 年 6 月 8 日～14 日、私たち一家 5 人と、短期宣教旅行で 4 週間ミャンマーに来ている菅原早紀子さんと、シャン州インレー湖近くのタウンヨ一族を宣教している、ダンゴン先生の所を訪問しました。マンダレーから飛行機で 30 分ぐらいでヘーホー空港に到着し、そこから車で 1 時間ぐらいで、先生の家近くのホテルに着きました。タウンヨ一族は、人口 4 万人ほどの少数民族で、教会がまだ一つもない「未開拓・未伝道部族」です。山の中で生活し、経済的にとても貧しく、たきぎを切って売ったり、とうもろこしを栽培したりして生計を立てています。昔、ビルマの国王からのろいをかけられたので、いまだに「自分たちの部族はのろわれている」と信じ込んでいます。劣等感が強く、山を降りて他の人と会おうともしません。教育

水準は低く、ビルマ語は話せても、文字を読み書きできない子どもがたくさんいます。学校はあっても、先生が来なくて休講ばかりで、子どもたちも仕事があるので学校にあまり行きません。タウンヨー語は、ビルマ語のなまった感じですが、全く聞き取れませんでした。宗教は、仏教とシャーマニズムが中心です。多くの村々の中で、教会はまだ一つ也没有ありません。ダンゴン先生（カチン族）一家だけが、この部族をターゲットにして宣教していて、もう 6 年目です。その中でも、町に住むようになったウートゥー一家は、イエス様を信じてバプテスマを受けた「初穂」です。

今回の旅行では、まず 9 日（木）に、ダンゴン先生の家で天外内トレーニング（弟子育成）の 1 段階をやりました。ダンゴン先生ご夫妻、ウートゥーご夫妻（受洗して 3 年）、ウーコーレーご夫妻（エンター族、受洗して 3 年）、伝道者のラウタン先生ご夫妻（チン族）が参加しました。このトレーニングを通して、メンバーにチームとしての一体感が生まれ、次の日からの伝道に同労者として参加するようになりました。

10 日（金）には、ダンゴン先生の案内で、タウンヨー族のルーケン村を訪問しました。車で 20 分ぐらい行った後、山道を 30 分ほど歩いて行きました。村長さんの家に、子どもと大人合わせて 20 人ぐらいが集まりました。早紀子さんやソジョン、仁が、次々と証しして、福音を伝えました。今までは、ダンゴン先生が一人で伝道に出かけていたのですが、今回ウートゥーは初めて伝道旅行に参加しました。また、ソジョンは妊娠中でおなかも大きいのに、チームと一緒に山の上まで歩いて登って、しかも子どもたち 3 人も連れて行って、家族が共に宣教しているのを見て、ダンゴン先生、ラウタン先生たちは驚きとチャレンジを受けたとのことでした。

11 日（土）には、車で 30 分ぐらいの所にある、タウンチェー村を訪問しました。今回は、ダンゴン先生の奥様と娘も参加し、ラウタン先生も奥様と娘を連れて、「家族合同伝道旅行」になりました。村長さんの家に行ったら、子どもと大人合わせて 40 人ぐらいが集まりました。早紀子さんが「エプロンシアター」という、エプロンの上での人形劇をやって、放蕩息子の話をしました。そうしたら、「村を出て町に行く息子」という話の内容がこの村の状況とぴったり合っていたせいか、みんなとても良く聞いて、反応してくれました。その後、ソジョンが結婚の証しと家庭の和解の話をしたら、みんな大笑いをしながら喜んで聞いていました。仁の福音紙芝居も、みんな真剣に聞いて、最後にみんなでキリストを受け入れる祈りをしました。その後、ウートゥーが「私もタウンヨー族ですよ」と言って、救いの証しをすると、みんなが驚きと共感を持って聞き入っていました。先生の奥様たちも、次々に証しをしました。雄基も、福音の絵本を開いて、子どもたちみんなに説明したりして、活躍していました。とにかく、昨日の村と比べて、この村の人々は、福音にとっても心が開かれていました。

12 日（日）には、ダンゴン先生の家で、子どもの教会学校と主日礼拝をしました。その後すぐに、天外内トレーニングの 2 段階をやりました。昨日の村での伝道の例を挙げながら、宣教の実際について、働き人向けの訓練をしました。

13 日（月）は、インレー湖に行って、ダンゴン先生が買ったばかりのボートに乗って、みんなで観光しました。途中で、ウーコーレーの親戚の家（エンター族、水の上に家を建てて生活している）を突然訪問して、「臨時伝道集会」になったりしました。港に戻る途中で、エンジンの燃料が足りなくなり、近所の人に助けてもらう、というハプニングもありました。一日中船に乗っていたので、夜ベッドに入って目を閉じると、ベッドがゆらゆらゆれているような感じ

でした。

この伝道旅行で感謝なことは、全くの「未接触・未伝道部族」にアプローチできたことです。天外内トレーニングも1、2段階までできて、メンバーが伝道旅行に参加し、同労者・働き人・信徒リーダーとして整えられてきたことが、とても良かったです。菅原早紀子さんも、「みんながチームワークで宣教できたのが良かった」とのことでした。今後も、日本からの短期宣教チームをここに案内して、本格的にエンゲージ（橋渡し）できたらと祈っています。このタウンヨー族の中から、主の働き人が起こされて、山の上の全ての村々に、家の教会が次々と生み出されるように、お祈り下さい。



（キリストを受け入れる祈りをする村人たち）（村の子どもに福音の絵本を説明する雄基）



（楽しくトレーニング！ダンゴン先生の家で）

一気に8人受洗！・・・タウンヨー族宣教旅行報告

2012年6月7～13日、シャン州のタウンヨー族で伝道しているダンゴン先生の所に、短期宣教旅行に行って来ました。マンダレーから南へ飛行機で30分、その後は車で1時間の所にあります。去年も6月に、私たち一家と菅原早紀子さんと一緒に行った所です。今年は、家族6人だけでなく、マンダレーのエルベテル教会の主任牧師タウンオル先生ご夫妻を誘って一緒に行きました。

村伝道では、2つの村を訪問しました。一つは、去年行ったタウンヨー族のシェータウンウー村に行って、村長の家を訪問しました。次はターエン村に行って、やはり村長の家を訪ねました。村長はパオ族、奥様はタウンヨー族でした。家族、親戚や近所の人など、8人ぐらいが

集まりました。とても歓迎してくれて、みんな心が開かれていました。まず私が証しして、その後ソジョンが絵を使いながら面白く福音を証しました。そして、タウンオル先生がキリストの救いについて聖書からよく話して下さいました。みんなうなずきながら、よく聞いてくれました。最後に私が福音の紙芝居の絵を見せながら、信じて受け入れるように言うと、みんなが私の後についてイエス様を受け入れる祈りをしました。村長はずっと笑顔で、私たちを車まで見送ってくれました。村伝道は、やはり平安の子（福音に心を開いているリーダー、ルカ 10:6）がカギだな、と実感しました。この村長の家が、そのまま家の教会となるように祈りました。タウンオル先生ご夫妻も、とても喜びました。

市場伝道では、5日に一度開かれるナンパン市場に行きました。ここには、近くの未伝道部族の村々からたくさんの方が来ているのです。大きな広い市場で、私たちも迷子になりそうでした。私たち一家や神学生たちを含めた 19 人の合同チームでトラクト配布をしました。私もハンドスピーカー（拡声器）を握って、福音の紙芝居の絵を見せながら伝道メッセージをしました。大声で熱弁をふるって、次々と場所を変えながら 5 回もメッセージしました。人々もよくトラクトを受け取り、関心持って聴いてくれました。私の救いの証しを書いたトラクトも配りました。わざわざもらいに来る人や、その場で読み出す人もいました。みんなで配ったので、トラクト 3 万枚があつという間になりました。ミャンマーでこんな路傍伝道ができるなんて！マンダレーでは、ありえないことです。ダンゴン先生の「恐れなければ、何でもできるんだ」という言葉が心に残りました。雄基はもちろん、愛希や聖治もよく配りました。聖治（3 歳）は、お姉さんがやると「せいじもやる！」と言って、何でもまねするのです。帰りの車の中ではみんなが喜びに満たされて、おしゃべり大会で笑いながら帰って行きました。

主日にはダンゴン先生の家で、タウンオル先生が伝道講義をしました。近くで教会開拓をしているラウタン先生が 3 人の未信者を、シェーモウン先生が 12 人ぐらいの未信者を連れてきました。タウンオル先生は福音をわかりやすく説明し、熱弁をふるって、2 時間以上続けて聖書講義をしました。みんなもよく聞いていました。最後に私が洗礼を受けるようにチャレンジをしたら、3 人が決心しました。昼食後、タウンオル先生がもう一度講義して、イエス様を信じるとどんな祝福を受けるのかを説明しました。その後、もう一度受洗のチャレンジをしたら、5 人が決心して、合計 8 人となりました。ハレルヤ！青年男性 7 人（タウンヨー族、パオ族、ダヌ族など）、主婦 1 人（バマ族）が受洗することになりました。洗礼式は予定していなかったのですが、先生たちと相談した結果、今日すぐにやった方が良いということになりました。近くに洗礼槽も川もないので、急いで大きなビニールシートを買って来て、竹の棒で枠を作り、その上にビニールシートをかぶせて、井戸の水をくんで、あつという間に「ミャンマー式臨時洗礼槽」が出来上がりました。8 人のうち、4 人はタウンオル先生が、4 人は私が洗礼を授けました。受ける 8 人も、まわりのみんなも、大喜びでした。みんな未信者家庭の出身で、しかも一気に 8 人も受洗するのを見るのは、私がミャンマーに来て初めてです！本当に、人間の計画を超えた神様のみわざでした。主に栄光を帰します。ハレルヤ！！

今回の宣教旅行は、どれも一人では決してできないことばかりでした。ダンゴン先生、ラウタン先生、シェーモウン先生、タウンオル先生ご夫妻、そして私たち一家が、それぞれ自分たちの賜物を持って、謙遜に仕え合って一つになったとき、主の栄光が現わされました。現場の伝道者たちとチームワークで伝道したことが、大きな収穫につながりました。タウンオル先生

ご夫妻は、「この宣教旅行に来て本当に良かった。誘って下さって感謝です」と何回も言っていました。マンダレーで開拓牧会して 15 年、夫婦そろって宣教旅行に出かけるのは今回が初めてだそうです。特に奥様は、以前から旅行が好きだそうで、すずしい気候の中、日常の忙しさから解放されて、夫との 2 人きりの時を持てて、この旅行を思いっきり楽しんでいました。いつも教会の仕事で色々大変なのに、それを一旦置いて、決心して宣教に出たとき、大きな祝福を受けました。リフレッシュされて、新しい宣教のビジョンに燃やされて、喜びに満たされて帰って行きました。主のみわざに感謝します。



(村で訪問伝道、タウンオル先生ご夫妻と)



(村長の家で証しするソジョン)



(市場で伝道説教、スピーカーで)



(喜びの洗礼式)



(一気に 8 人受洗！)

19, 「滅私奉公」(2012年7月、仁・記)

最近私が宣教の働きをする中で、特に主から示されていることがあります。それは「滅私奉公」つまり、自分の欲を捨てて主と他人に仕える、と言うことです。

以前私は、この宣教地で何とかして実績を収めて成功したい、自分の「城」を築きたい、と思って頑張っていました。自分の弟子を育てて、その弟子が次々と弟子を再生産して、大きな教会、又は宣教団体を作ることが、私の夢であり、野望でした。そしてそれが主のためであり、主のビジョンだと信じて疑いませんでした。しかし、何年やっても、中々その夢は実現しませんでした。学生伝道をする中で「この人こそ自分の弟子となる人だ」というような献身者が現れると、集中して教えて育てようと思いました。しかし、そのような人は、いつも決まって、大事なときに私から去って行きました。

ずっと以前から学生寮ミニストリーをしようとして祈ってきました。だから、大学の近くにちょうど良い家が与えられたときは、やっと長年の夢がかなったと思いました。しかし、その家の管理人をするはずの一家が、他の町に急に引越することになりました。もう1年分の家賃を払ってしまったのに、その支払った直後に出て行ったのです。色々と他の道も探して見ましたが、うまくいかず、結局その家は、他の人にゆずることになりました。私の学生寮ミニストリーの夢は、そこで消えてしまいました。それだけではありません。その一家の長男である一人の青年を、私は自分の弟子として育てようと思って、ずっと以前から世話してきました。私の家に泊まり込みで訓練したり、大学受験の予備校に入るお金を出してあげたりもしました。彼が奇跡的に大学に合格したときは、「これでいよいよ大学の中で思い切り伝道ができるぞ!」と思って、私はもう夢もりもりでした。しかし、私が日本に一時帰国している間に、彼は勉強が大変だと言って、たった1年で大学を中退し、ヤンゴンに行ってしまったのです。私はショックでした。裏切られたような気持ちでした。彼は私にとって学生伝道・弟子再生産ビジョンの「最後の希望の星」でした。でも、そのビジョンも、彼と共に消えてしまいました。私が今まで彼と彼の一家のために投資してきた時間と労力とお金は、一体何だったのか、と思いました。大きな挫折感と無力感に襲われました。もう何もやる気が起きませんでした。「もう何年もやっているのに、目に見える実が何もない」と思うと、全てがむなしくさえ感じました。

いつも主日礼拝に出席していた教会の中で、日本語教室をやったりもしました。しかし、私たちが日本に一時帰国するたびに、ミニストリーが途切れてしまうのでした。日本語教室に来ていた子どもたちも、その教会の教会学校によくつながっていたので、私たちがさらに重ねてやらないほうが良いと思いました。それで、日本語教室はもうやらなくなりました。また、その教会の主日礼拝でも、以前はよく説教を頼まれました。でも、私が他の教会で説教することが多くなるにつれて、説教を頼まれることはなくなりました。その教会の中で私のすることは、ほとんどなくなりました。主日礼拝に来て、ただ座っているだけで、何の奉仕もしないで家に帰るだけの日曜日は、私にとって、本当につらいものでした。礼拝中も、苦々しい思いとさばく気持ちで一杯でした。「もうここにいても、自分は何も役に立たないのか。自分の働く場所はないのか。いてもいなくても同じではないか」そんなふうに思えて、何だか自己憐憫におちいってしまうのでした。

しかし、そんな中で転換点となったのは、FTT(未伝道部族宣教の働き)との出会いでした。

それを通して、私はこう考えました。「現地人の働き人がもうすでにやっている働きを、私がさらにやっても、あまり意味がない。競争になるだけだし、現地人のほうが私よりもずっとうまくやるだろう。現地人ができることは、現地人にまかせればよい。外国人宣教師である私のやることは、現地人も誰もやったことのない働きをやることだ。誰も行かないような地域・部族に行き、新しい道を切り開くことだ。私には、私にしかできないことがある。その主から与えられた自分の役割を、一つ一つ忠実にやっていけば、それでいいんだ。」そう思ったら、心が軽くなりました。今までの苦々しい思いから、解放されました。そしてそれから、主は私に、不思議と次々と新しい出会いを与えて下さいました。「教会の無い地域に教会を開拓する」という同じビジョンを持った現地人の先生たちとの出会いでした。私が自分の私利私欲を捨てて、その先生たちと一緒に伝道し、その現地人教会のためにしもべとして仕えるときに、不思議と次々と良い実が結ばれていくのでした。

2012年6月にシャン州のタウンヨー族に宣教旅行に行きました。私たち一家だけではなく、マンダレーのエルベテル教会のタウンオル先生ご夫妻も一緒に連れて行きました。そして、その現地の先生たちが、未信者たちを連れて来て、伝道集会をやりました。そこでは、私ではなく、タウンオル先生にメイン・スピーカーとなって頂きました。その集会によって、何と8人もの受洗者が与えられたのです！未信者たちを連れて来たその町のシューモウン先生は「これは私たちの働きの初穂です！」と、興奮して言いながら、大喜びしていました。今まで教会が無かったその先生の村で、初めて教会が生み出されました。今でもシューモウン先生が、その受洗者たちを続けてフォローアップしています。私たちがしたことは、1週間だけ来て、伝道して、現地の先生につなげて、去る、それだけです。でも、私は満足でした。何はともあれ「未伝道部族に教会を生み出す」というビジョンが、実現したのです。これからも、もっと広く次々と実現していくことでしょう。

タダウーという町は、マンダレーから車で1時間くらいの所にあるのですが、教会が全く無い「無教会地域」でした。政府の統制も厳しい地域でした。その町で開拓伝道しているケインマン先生は、テントメーカー・自給伝道者として、小型トラックを運転してキャベツを運ぶ仕事をしながら、色々な所に行き福音の種まきをしてきました。でも、中々実が結ばれませんでした。そんなとき、私と出会う、ビジョンを共有するようになりました。私はその先生に「今まで先生が関係形成をしてきた人々の所と一緒にいき、刈り取り伝道をしましょう」と言いました。先生と2人でバイクに乗って、仕事仲間の家に行きました。そうしたら、その家の父親が真理にうへ渇いていて、私たちが福音を語ったら、喜んで受け入れたのです！まさに主の時、収穫の時だったのです。先生は大喜びでした。もちろん私も大喜びでした。これから毎週1回、未信者リストを持ちながら、一軒一軒訪問伝道することにしました。

一人ではできないことが、二人ならできる。私一人ではできなかったことが、現地の先生と協力するなら、道が開かれる。別に自分の弟子とならなくても、現地の先生が刈り取るなら、それで良い。自分のグループを増やすのではなく、天国の人口が増えれば、それで良い。主が喜んで下されば、それで良い。これは私の実でも、その先生の実でもなく、主の実なのだ。……そう思ったら、心が自由になって、喜びがわきあがってきたのです。

私は今でも、伝道に行くとき、教会で奉仕するとき、いつも心にこう言い聞かせながら祈ります。「主よ。この私を、以前の野望と不満と自己憐憫から解放して下さい感謝します。今日も

滅私奉公の精神で、この国の人々のために、しもべとして喜んで仕えていくことができますように。どうか私を、祝福の通路として用いて下さい。」

「キリストは、神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました。」（ピリピ 2：6-9）

20、ミャンマーで父の学校

毎年4月中旬になると、ミャンマーでは「水祭り」が行われて、仕事はみんな休みになります。この期間に、私たちが宣教協力しているエルベテル教会では、毎年泊まり込みのキャンプを行っています。私は主任牧師のタウンオル先生から「今年は長老・執事の責任、というテーマでやるので、そのような内容で講義して下さい」と言われました。私は聖書を開いて準備しているときに、このみことばが心に響いてきました。

「監督はこういう人でなければなりません。～自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人です。——自分自身の家庭を治めることを知らない人が、どうして神の教会の世話をすることができるでしょう」（1テモテ 3：2-5）

これを読んで、私は「そうだ、今回は既婚者を対象にして家庭セミナーをやろう」と思いました。そして、男女をクラス分けして、男性は私が、女性はソジョンが担当することになりました。私は以前日本に一時帰国したときに「父の学校」というセミナーを受講してとても恵まれたので、それをミャンマーでもやってみたい、と以前から思っていたのです。いつか使おうと思って持ってきた父の学校のテキストを、本棚から引っ張り出しました。そうしたら、そのときにセミナーの宿題で私が書いた「妻が愛らしい20の理由」や「愛する妻への手紙」などが本にはさんであったので、もう一度読み返しました。日本で父の学校をやったときの感動が、再びよみがえってきました。それで、この父の学校の講義を短く要約して、ミャンマー語でレジメを書きました。ソジョンも女性・母親対象で「家族関係」の講義を準備しました。

当日、男性クラスには4人の父親が参加しました。少人数だったので、深く分かち合いをすることができました。最初の「父の影響」の講義で、私が自分自身の父親の話をした後、「みなさんの父親はどんな人でしたか？」と聞きました。そうしたら、ある参加者は「私の父親は、私がまだ母の胎内にいるときに離婚して、他の女と結婚してしまいました」と言って、涙を流しながら、今までの父に対する苦い思いを正直に語ってくれました。また次の参加者も、「私の父も、私がまだ小さいときに、家を出てしまいました」と話しました。私たちは、心を痛めながら、共感して聞き入っていました。一人一人の衝撃的な、心の痛い身の上話を聞きながら、「このミャンマーでも父の学校がどんなに必要だろうか」と、ひしひしと感じました。そして、「今まで父から受けた悪い影響を断ち切り、私たちはアブラハムのように、後の世代には祝福を流していくようにしよう」とみんなで決心しました。その後、「父の男性」「父の使命」「父の霊性」の講義を終えて、「妻が愛らしい10の理由」と「愛する妻への手紙」を書く時間になり

ました。私は最初「ミャンマーの男性文化では、恥ずかしくて書けないのではないか」と心配しました。それでみんなに「これは日本文化でも韓国文化でもありません。聖書の文化に従って書きましょう」と言いました。そうしたら、みんな素直に書いてくれました。

女性クラスのほうは 10 人ぐらいが参加し、ソジョンが自分の夫婦の体験を交えながら話をし、みんな爆笑していました。「夫を尊敬する 10 の理由」を書く時間に、ある参加者は「夫の悪い理由を書いたらダメですか?」と言って、みんなを笑わせました。ある婦人は「教会でこういうテーマの講義を聴くのは初めてです」と言っていました。とにかく、大きな反応、手答えがありました。

その日の午後、洗足式の時を持ちました。まず夫が、愛する妻の前で、さっき書いた「妻が愛らしい 10 の理由」と「愛する妻への手紙」を読み上げました。妻も夫に「夫を尊敬する 10 の理由」を読んで、交換し合いました。そして、みんなが見守る中で、一組ずつ、夫が妻の足を洗い、タオルでふきました。その子どもたちもよく見ていました。ある 60 歳以上の夫は、普段は無口なのですが「今までの人生で、ラブレターを書いたのは初めてだ」と言いました。その妻は、夫が足を洗っている間、涙ぐんでいました。そして、夫が妻のために手を置いて祈り、みんなもその夫婦のために祈りました。その後、一組ずつ肩を組んで写真を取り、最後にはみんなで全体写真を取りました。それは本当に幸せな、感動的な時でした。

次の日、父の学校に参加したウーチョーチョーウさんが、14 歳ぐらいの女の子を教会に連れて来ました。後で聞いたら、その子は、以前の妻との間に生まれた、自分の「娘」だとのことでした。……彼は、自分の父親が酒飲みで、暴力をふるう父だったのが、自分も父親になったら、同じようになっていました。でも、3 年前にイエス様を信じて、本当に変えられて、今では家族みんなで教会に通っていたのです。でも、彼が再婚だったことも、そんな娘がいたことも、全く知りませんでした。彼はきっと、前日の講義で、父親としての責任を痛感して、その娘にも何とか福音を伝えて救われてほしいと思ったのでしょう。その女の子は、子どもたちのクラスに参加して、熱心に福音を聞いていました。弟や妹たち（新しい妻の子ども）とも仲良くなって、表情も明るくなりました。また、彼の長男は、今回のセミナーの最終日に、洗礼を受けました。今回の父の学校・家庭セミナーを通して、このような具体的な家庭回復の恵みが与えられたことを、主に感謝します。

今回の父の学校は、ミャンマーでは初めての試みなので、どうやっていいかわからず、試行錯誤でしたが、これを第 1 期として、これからも次々と開いていきたいと思います。そして、この働きを通して、ミャンマーの父親たちが生き返り、それによって家庭が生き返るように祈ります。「クードー、アチャノウディー、アペーピッバーイ!」（主よ、私が、父親です!）

この国に時が満ちた（ソジョン・記）

4 月 13 日～16 日まで、エルベテル教会でキャンプ・セミナーが行われて、私たち一家も参加しました。私（ソジョン）は最初、「光児（こうじ、まだ 8 か月の赤ちゃん）を抱えて、暑い中一日中いるのは大変だから、今年のキャンプは主人だけ参加して、私は家で留守番していよう」と思っていました。でも、キャンプが始まる 1 週間前に、主人だけではなく、私も講義を担当することになり、結局一家 6 人全員参加となりました。というのは、私たちが日本で受講

した「父の学校」の内容をこのキャンプでやってみようということになり、主人が男性クラスで「父の学校」を、私が女性クラスで「母の学校」をすることになったからです。ミャンマー語の聖書を開いてみことばを写しながら、レジメを何枚も書いて準備しました。

参加してみたら、意外と少人数で、新しい世代のキーパーソンたちが参加していました。そして初日と2日目は、父の学校と母の学校を通して、「父が生けると家庭が生ける。家庭が生けると教会が生ける。教会が生けるとミャンマーが生ける」というスローガンで行いました。そして、2日目の午後には、主任牧師のタンオル先生ご夫妻を含め、4組が洗足式を行いました。ご主人たちが愛する妻の足を洗う時は、涙と喜びと感動の瞬間でした。この地のリバイバルは、家庭のいやしと回復から始まるのだと感じました。その後、私は講義を3回担当しました。1回目は、創世記1章から、生きる目的と地を従えるビジョンについて話しました。「韓国には全ての市町村に教会がある。それは以前、アメリカの宣教師達が来て、全国を回って無教会地域を調査し、そこに現地人伝道者を戦略的に派遣したからだ」という話をしました。そして「始めたら、もう半分（到達したと同じだ）だ」という韓国のことわざを引用して、みんなを励ました。タウンオル先生を始めみんなが共感して、ビジョンを共有することができて、とてもうれしかったです。2回目は、ルツ記を通して、霊的出産について、世代から世代へと祝福を受け継いでいく話をしました。私のたどたどしいミャンマー語にもかかわらず、みんな恵まれたと言ってきて、とても良い反応でした。足りない私を主ご自身が助け用いて下さったのです。3回目の講義をする前の夜、いよいよネタが切れて明日はどうか、と思っていました。そんな時、何年も前に講義して取っておいた「民族を抱く祈り」という題のレジメを一枚見つけました。主人がそれを見て急に、「明日はソジョンがそれをやることにするから準備してね」と言って、先に寝てしまいました。私はベッドの上で横になりながら、そのレジメを読んで準備しました。そうしたら、読んでいるうちに涙があふれて、ベッドから起き上がってみことばを書き出しました。

「わたしの名を呼び求めているわたしの民がみずからへりくだり、祈りをささげ、わたしの顔を慕い求め、その悪い道から立ち返るなら、わたしが親しく天から聞いて、彼らの罪を赦し、彼らの地をいやそう」（Ⅱ歴代7：14）

次の日に、そのテーマでみことばを分かち合い、みんなで祈る時を持ちました。一人一人が心から悔い改め、この民の罪をとりなし、「主の救霊の思いを注いで下さい」と涙を流しながら祈りました。また、この国を祝福し、将来クリスチアンの大統領や政治家たちがたくさん出るようにも祈りました。私も久しぶりに涙を流しながら祈り、この国に対する救霊の思いで胸が熱くなりました。信じて1、2年しか経ってない人も、この国の福音化のために熱い献身の思いで祈りをささげていました。そして、「ミャンマー宣教のために人生をささげる人は前に出て下さい」という招きがなされて、ほとんどみんなが前に出てひざまずき、タウンオル先生が一人一人按手して祈りました。それは、まさにリバイバルの始まりでした。後で「こんな体験は初めてです」と顔を輝かせながら言う姉妹もいました。私は正直言って、こんなにも聖霊が熱く働くとは思っていませんでした。少し前に私にディボーションを通して与えられていたみことばが、成就された思いでした。

「見よ。わたしのささえるわたしのしもべ、わたしの心の喜ぶわたしが選んだ者。わたしが彼の上にわたしの霊を受け、彼は国々に公義をもたらし。～先の事は、見よ。すでに起こった。

新しい事を、わたしは告げよう。それが起こる前に、あなたがたに聞かせよう。」

(イザヤ 42 : 1、9)

そして午後には、教会学校の子どもたち 3 人の洗礼式が行われました。キャンプの閉会礼拝のメッセージは主人が、「宣教に必要な聖霊の力」というテーマで語りました。……エルベテル教会は以前からみんな伝道熱心です。難しいと言われるビルマ族の仏教徒やイスラム教徒から救われた方もいます。信じて何年も経ってないけど献身の思いで熱い姉妹もいます。しかし、大変な環境や試練を乗り越えて、宣教のために献身しようとする彼らに今一番必要なのは、聖霊でした。全ての民族・市町村に教会を建てるというミャンマー完全福音化のビジョン実現のためには、聖霊の力が必要です。主は約束どおり、主が選んだしもべの上に、主の霊を注いで下さったのです。「この国に時が満ちた」ことを肌で感じるときでした。今から主ご自身がこの国でなさるみわざを期待します。

私たちがこのミャンマーに来て今年が 9 年目になります。最近私は、思うようにいかないとき、目に見える実がないように思われるときがあって、「主よ、どうしてですか」と尋ねました。そのとき主は、「今までのあなたたちの苦労は無駄ではないんだよ」と私に語って下さり、私は心の平安を回復しました。今回のキャンプは、まさにこの答えだと思いました。参加したあるおばあさんから、「赤ちゃんや子どもを 4 人も連れて、主の働きをするのは簡単ではないのに、あなたは良くやったね」と言われました。本当に主に感謝します。主人と雄基と教会の皆さんが協力して世話をしてくれたおかげです。生後 8 ヶ月の光児を、みんながリレーでだっこしてかわいがってくれました。3 日目の午後は、さすがに疲れが出たのか、私としてはめずらしく頭痛と吐き気がありました。でも、みんなの祈りのおかげで夜にはいやされました。4 日間フルタイムの体力戦でしたが、何とか守られました。子どもたちもセミナー中は健康が守られ、終わってからどっと疲れが出ましたが、今は大丈夫です。

キャンプから帰る車の中で、以前本で読んだ、中国に行ったイギリスの女性宣教師グラディース・アイルワード (Gladys Aylward) のことを急に思い出しました。家政婦で学歴もなかった彼女は、主を信じてから劇的に変えられ、中国で宣教師として勇敢に用いられました。彼女は晩年にこう告白したのです。「主は、最初はずっとすばらしい人を選んだのに、たぶんその人が主の召命を断ったのでしょう。ちょうどその時、主が天から地を見下ろしたとき、この私を見つけたのでしょう。」……何か自分と重なるような思いでした。何でもない私が、主の世界宣教の召命に応答しただけで、こんなにもすばらしい宣教の祝福の中で生きる特権を与えられたのです。主の恵みに、ただ感謝をささげます。



(父の学校で、愛する妻の足を洗うタウンオル先生)



(愛希の受洗)

21, 愛希ちゃん受洗

一人娘の愛希（5歳）が、私に「洗礼を受けたい」と言いました。私は愛希に「本当にイエス様を信じたのか、救いの確信はあるのか」など、色々と質問しました。愛希はちゃんとしっかり答えていました。最後に私はこう言いました。「わかりました。でも、もし本気で洗礼を受けたいのなら、今度教会に行ったとき、自分の口でタウンオル先生に話さない。」彼女は兄の雄基と違ってはずかしがり屋で、その上ミャンマー語もあまり話さないのです。大丈夫かな、と思ったけれど、主にゆだねることにしました。日曜日になりました。教会に行って、家に帰る直前になったとき、彼女は自分からタウンオル先生の所に行って、「洗礼を受けたい」と言いました。先生は驚いて、「そうですか。それじゃ、ぜひやりましょう」と言って、喜んでくれました。それで、5月20日にエルベテル教会で洗礼式をすることになりました。うれしくて待ちきれないらしく、受ける前の1週間は毎日ずっと「今度の日曜日に、愛希、洗礼受けるんだよね？」と何回も聞いていました。ノートに自分の救いの証しを書いて、当日みんなの前で発表するために、何回も声を出して読んで練習しました。当日は、エルベテル教会の庭にある洗礼槽（普段は水浴び、洗濯をする水ため）で、教会のみんなに見守られながら、洗礼式を行いました。私（仁）が、「伊藤愛希、あなたはイエス・キリストを救い主として信じますか？」と日本語で聞くと、愛希は大きい声ではっきりと「はい、信じます！」と答えました。その後、私が父、子、聖霊の御名によって、バプテスマを受けました。水から上がった後も、愛希はうれしくてずっとニコニコしていました。その後、礼拝の中で、愛希はみんなの前で自分の救いの証しを読みました。日本語で読んで、私がミャンマー語に通訳しました。大きな声で、しっかり証しできました。教会のみんなも、とても喜びました。主任牧師のタウンオル先生も、「よかった、よかった」と言って、一緒に喜んでくれました。愛希はその後もなかなか興奮がおさまらないらしくて、家に帰っても、弟の聖治（3歳）に、「イエス様を信じると天国に行けるんだよ」と、ずっと伝道（？）していました。私たちファミリーにとっても、大きな喜びの日でした。皆様のお祈りに、心から感謝します。

愛希の救いの証し（ノートに書いたものをそのまま写します）

イエスさまを信じるとは、おとうとのせいじとよくけんかをしていました。イエスさまのこともしんじてはいたけれど、せんれいをうけようとはおもっていませんでした。5さいのとき、おとうさんがきょうかいでせいしよのはなしをしているのを、なんかいもきいていました。それをきいて、わたしは「じごくにいきたくないな」とおもいました。それで、おとうさんに「せんれいをうけたい」といいました。おとうさんはわたしに「イエスさまを信じたららつみがゆるされて、天国にいける」ということを、もういちどはなしてくれました。そのときに、わたしは「イエスさまをはっきりしんじて、せんれいをうけよう」とおもいました。それからは、じぶんが天国にいけるということがはっきりわかって、うれしくなりました。せいじとも、あまりけんかしなくなりました。せいしよのなかのマタイ 11 しょう 28 せつに「すべてつかれた人、おもにおっている人は、わたしのところにきなさい。わたしがやすませてあげ

ます」とかいてあるのをよんで、わたしのつみのおもにイエスさまがせおってください、ということがわかって、あんしんしました。イエスさまにかんしゃします。

2012年5月20日　　いとうあき

2 2, 様々な困難

(1) 泥棒

私たち一家は、2011年11月30日に日本を出国した後、11月30日～12月9日まで韓国のプサン（ソジョンの実家）、9日～13日までがタイのバンコク、13日～15日がミャンマーのヤンゴン、15日にマンダレーに着くという、とても慌ただしい、ハードなスケジュールでした。その上、マンダレーの家に着いてわかったのは、「家に泥棒が入った」ということでした。窓を破って鍵を壊して侵入して、色々なもの（CD デッキ、たくさんの DVD や CD、服、アイロン、ドライヤー、食料、おもちゃ、その他たくさん・・・）がぬすまれていました。「家の留守を守る人もいたはずなのに、どうして・・・」と今から言っても、どうにもなりません。精神的にがっかりしてしまって、2, 3日は力も出ませんでした。それでも、家の大掃除をして、何とか住めるようにして、家のベッドでやっと寝れたのは17日の夜でした。さらに、家に入ったその日にエルベテル教会のタウンオル先生がやってきて、メッセージを依頼されて、18日の主日と19日には、さっそくクリスマスメッセージをしました。

(2) 3度目の流産（ソジョン・記）

2012年9月18日にマンダレーの病院で、流産の手術を受けました。妊娠してまだ2カ月でしたが、超音波で検査したら、心臓がなくて生命体になっておらず、出血も続くので、摘出手術をすることになりました。以前も、愛希と聖治の間に1回、それから聖治と光児の間にも1回、このような流産を体験していて、今回で3回目になるので、精神的にはそれほどショックでもなかったです。ですが、全身麻酔をするので、やはりここミャンマーでの手術は不安でした。主人と子どもたちに「お母さんのためにお祈りしてね」と何回もお願いしました。当日も家族6人全員で病院に駆けつけました。心の中で不安がありましたが、手術室に呼ばれる直前「あしあと」の話を急に思い出しました。「そうだ。こういう時はイエス様が共にいるだけでなく、おんぶして下さるのだ」ということがわかりました。それからは、心に平安が戻り「大丈夫だ」という確信が来ました。ちょうどその時、呼ばれる電話がありました。手術室に入ってベッドに上がると、医者や看護婦、スタッフたちが私を見て「韓国人だ、韓国人だ」と騒いでいました。そして、夫はどこの国の人かと聞かれたので「日本人です」と言ったら、もっと大騒ぎになりました。それこそ上野公園のパンダ以上のめずらしさです。そのうちに私は、麻酔で意識がなくなって、目が覚めた時は、全てが無事に終わっていました。今回私は、家族とまた会えることの幸いが、ぐっと心に来ました。特に4人の子どもたちにとっては、お母さんとしては足りないけどこの私が絶対に必要なんだ、ということをもう一度思われました。そして、私

にしかできない妻として、また母としての責任であり特権でもあるこの務めを果たしていきたいと、もう一度改めて思いました。体の回復のためにもお祈り下さい。それから、私はしばらくの間、安静にしていなければならないので、その分の家事や子育ての重荷を主人（仁）が負うことになります。ちょうど直前にマンダレーに来て下さった保野あかね先生が「パパはウルトラセブン」という絵本を持って来て下さいました。それは子どもたちのためというより、主人のためになりました。主人はそれを読んでとても感動して「愛する奥さんのため、家族のために戦うんだ」と奮闘しています。主人の体力が守られるようにお祈り下さい。

（３）火事

私たちの家で、小さな火事が起きました。9月28日（金）の夜8時頃、夕食も終わってみんな上に行って、私はシャワー中でした。そうしたらソジョンが、何かにおいがするというのでドアを開けてみたら、階段からすごい煙が上がってきました。ソジョンがあわてて下に行ってみると、電気のスイッチ（家全体に電気を入れるメインのスイッチ）の所から、火が上がっていたのです！ソジョンが桶で水をかけようとする直前に、私が来て、消火器を取り出して火に向けて噴射したら、火はすぐに消えました。発見があと5分、10分遅かったら、家中に火が広がっているところでした。幸い、燃えたのはそのスイッチのまわりとドアと天井が少し黒くただけでした。原因は、スイッチが古くて電気の接続が悪く、ショートしたのだと思われます。後で聞いたところによると、このような電気による火事の場合は、水をかけたら感電してもっと危険なので、消火器でやらなければならない、とのこと。私たちの家に置いてあった消火器は、自分から準備しておいたものではなく、数ヶ月前にこの地区の消防団の人が来て「家ごとに1つずつ置かなければならない」と言って、買わされたものなのです。そのとき私が使い方を習っておいたので、いざという時に使うことができたのでした。子どもたちも4人いるので、今度家族で避難経路などを確認して、防災訓練をしておかなければ、と思いました。とにかく、危機一髪のところで助かって、本当に感謝でした。主が天使を送って特別に守って下さったと信じます。私たち一家が全ての危険から守られるように、お祈り下さい。

（４）地震

11月11日（日）朝7時半（日本時間9時）頃、マンダレーの近くでM6.6の大きな地震がありました。私の家もだいぶ揺れましたが、特に大きな被害はありませんでした。家族6人全員無事です。ちょうど朝食後で、教会に行く準備をしようしていたとき、グラッと来て、とても驚きました。余震も何回かありました。私は小さいときから日本で地震に慣れているので、すぐ対処できて何ともありませんでした。でも、子どもたちはショックだったようです。一生懸命イエス様に祈っていました。パレイ教会に行ってみたら、やはりみんなこわかったとのこと。ミャンマーでは地震はあまり起きないので、ミャンマーの人にとっても体験したことのないくらい地震だったそうです。ミャンマーの家は、日本のように耐震構造ではないので、大きな地震が起きたら簡単に崩れてしまいます。今回の地震で少なくとも10人以上の死者が出たようですが、正確な情報はまだわかりません。何人かの方々が心配して、私たちにメールを下さ

いました。この情報も、日本の方から頂いたメールで知りました。

その日の主日礼拝メッセージは、準備していたものをやめて、主イエスの再臨が近いことを、マタイ 24 章から共に学びました。未信者の方も来ていて、みんなよく聞いていました。終りの時代には、リバイバルがあるけど、患難とさばきもあります。ミャンマーは今、政治的にも経済的にも、大きな変革の時です。霊的にも、大いなるリバイバルとたましいの大収穫の時だと信じます。ただし、このような災害や患難とのときに、さらに主をおそれて、罪を悔い改め、主のあわれみを求めて祈らなければならないと感じました。このようなときに、ミャンマーのことを覚えて、ぜひお祈り下さい。

22、パレイ教会開拓伝道

(1) マ・サンサンモーさん

私たちが宣教協力しているエルベテル教会では、マンダレーから車で 40 分ぐらいのパレイという町に家の教会を開拓しています。私たちは、8 月からそのパレイ教会の担当となって、ほぼ毎週そこでメッセージすることになりました。その家に住んでいる責任者は、マ・サンサンモーさんという一般信徒の主婦です。その娘のリリー (5 歳くらい) が、9 月に入って急に体調が悪くなり、10 日ぐらいして意識不明となって緊急入院しました。蚊によって伝染する病気の一つだったそうです。私たちも、教会のみんなもお見舞いに行ってお祈りしました。病院でかかる費用も助けました。幸い、リリーは回復して、無事退院することができました。これを通して、マ・サンサンモーさんの夫、リリーの父親であるコーミエンゾーさんに、大きな変化が見られるようになりました。以前は、洗礼は受けたものの信仰はほとんどなくて、礼拝にも参加しませんでした。私が職場訪問しても全く無愛想で、話しかけても反応がありませんでした。しかし、リリーの事件の後、パレイ教会に行ってみたら、コーミエンゾーさんが何とニコニコしてあいさつして、礼拝にも最初から最後まで参加して、メッセージもじっと聴いているではありませんか。私は驚きました。きっとリリーの件を通して、主の愛といやしを体験したのだと思います。とにかく主に感謝しました。……このパレイ教会は、若い母親が 3、4 人と小さい子どもたち数人が、いつもの主日礼拝出席者です。そのような大変な中で、マ・サンサンモーさんが孤軍奮闘しています。今回の事を通して、彼女の一家全員の信仰が強められて、指導者として成熟しますように。

(2) 忠実な主の弟子 (ソジョン・記)

ミャンマーにおいて、私たちファミリーはマンダレーのエルベテル教会(タウンオル主任牧師)との協力関係の中で行動しています。エルベテル教会が開拓している枝教会のパレイ教会の牧会を、私たちが担当しています。主日礼拝には、毎週いつも家族 6 人で現地教会に参加しています。パレイ教会は、私たち家族 6 人や現地人の子どもたちも含めて、20 人ぐらいが主日礼拝に集まるようになりました。若い主婦達が主なメンバーです。

このパレイ教会で、10月26日と27日にセミナーをやりました。タウンオル主任牧師や副牧師のサイラス先生、エルベテル教会のメンバーたちも来て、一緒に奉仕しました。私はこのセミナーの1ヶ月ほど前に流産になって、安静にしていたとき、今回のセミナーのことを祈っていました。そのとき「今こそ忠実な主の弟子を養育する時である」という思いが示されていました。それで、セミナーで次のように講義しました。「イエス様の奇跡や噂を聞いて一時的に集まった群衆ではなく、3年間イエス様が一番力を注ぎ愛して育て、残された少数の弟子たちによって、全世界に福音が宣べ伝えられた。今日でも、イエス様が捜し求める器は、学歴や富や地位をもっている人ではなく、主を心から愛し、みことばに従う忠実な弟子である。今ミャンマーには大きな変化が訪れている。霊的にも門が開かれて、大勢の人たちが真理を求めて教会に来る日が来る。では今、教会は何を準備すべきか。建物やプログラムではなく、忠実な主の弟子を準備すべきである。主は忠実な弟子を用いて、主のみわざを行い、主の栄光を現すのである。」

・・・その時、マ・サンサンモーという主婦は、涙ぐみながら良く聞いていました。彼女は2012年6月からパレイ村に住んで、教会の信徒リーダーとして奉仕していたのです。そして、このセミナー以後、私はマ・サンサンモーと1対1で弟子養育を始めることになりました。毎週土曜日に、私がパレイに行って、彼女と会って聖書の学びをします。ヨハネの福音書の1章から5節ずつ読んで、みことばの適用と分かち合いをして、主の御声を聞く訓練です。平日にも毎日このようにディボーションをするように勧めました。その時、彼女は涙を流しながらこう言いました。「私は字が読めないので、暗唱聖句をしたみことばを握って祈ったり証ししたりしています。しかし、学歴がないゆえに、周りの人から軽蔑や偏見を受けるときもあります。そのせいで、村の人々に伝道しようとする時にも弱気になっていました。それで心の中で主に叫びながら、みことばをもっと理解して大胆にみことばを宣べ伝えたいです、と祈りました。主はその祈りを聞かれ、私もこのような学びができるようになって、本当に良かったです。」それを聞いて、私も「やっぱりこれを始めて良かった」と思って喜びました。彼女も、今しばらくは息子に聖書を読んでもらいながらのディボーションですが、いつかは字が読めるようになると信じます。私の目標は、彼女がまず、みことばによって成長してから、村の人たちを、みことばで教え養育できるようになることです。それから、「私の」人間的な弟子ではなく、イエス様につながり、イエス様に従ってついて行く、忠実な「主の」弟子になるようにお祈り下さい。

「私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。それで、たいせつなのは、植える者でも水を注ぐ者でもありません。成長させてくださる神なのです。」

(Iコリント3:6-7)

(3) みことばとしるし (ソジョン・記)

毎週の土曜日に、私はパレイ町に行って、パレイ教会の信徒リーダーである主婦マ・サンサンモーと聖書の学びをしています。それから、彼女が字を読めるように、今年から識字教育も始めました。実際に始めたら、読めるところもあって、始めてよかったと思います。その中で「どのくらい読めるか」よりも大切なのが、彼女の中にある「自分はできないんだ」という劣等感

との戦いであることがわかりました。サタンの計略にだまされないように、励ましながら、続けてやっていきたいです。その後は2人で近所の家を訪問して、簡単に福音を伝えてから、その人のために祈りをします。その中で、1月28日には3人が洗礼を受けるに至りました。受洗した3人のうちの1人は、マ・サンサンモーのお母さんです。マ・サンサンモーが救われて以来15年間、ずっと母の救いのために祈っていました。以前、お母さんが胃の病気の時、娘の祈りによっていやしを体験してから、心では一応信じていたそうです。1月からマ・サンサンモーと一緒にパレイに住むようになって、今回の受洗を決心しました。マ・サンサンモー自身も17年前、胃の病気のいやしを体験し、また結婚して8年間子どもができなかったのが、祈りを通して息子が与えられたのをきっかけとして、イエス様を救い主として信じ、クリスチャンになったのです。……それから、残りの2人は、コーミューゾーとマ・ニュートウェーという夫婦です。彼らも仏教徒でしたが、やはり祈りによっていやしを体験して、それをきっかけとして受洗を決心しました。受洗してからも、奥さんのマ・ニュートウェーが、「夫に仕事が与えられるように」と祈ったら、実際に祈りが応えられたことを喜びながら証していました。このように、イエス様の御名によって祈るとき、主はしるしをもって応えて下さり、主を信じる民を起こして下さいます。このように、生きておられる力強い主と共に働く特権を、心から感謝します。そして、みことばの約束を誠実に成し遂げて下さる主に、もう一度栄光をささげます。

「信じる人々には次のようなしるしが伴います。すなわち、わたしの名によって悪霊を追い出し、新しいことばを語り、蛇をもつかみ、たとい毒を飲んでも決して害を受けず、また、病人に手を置けば病人はいやされます。」(マルコ16:17-18)

(それから2年後、マ・サンサンモーは聖書が読めるまでに上達しました。そしてみことばを読んで力を得て、ますます祈り、伝道するようになりました。彼女がパレイ教会に来てから4年間で、19人もの人が洗礼を受けました。ハレルヤ！弟子作りのために蒔いた種は、無駄にならず、時が来て実を結んだのです。主の栄光をほめたたえます。)

(4) 苦勞の地で慰め

2013年10月17日(木)と18日(金)に、パレイ教会で聖書セミナーを行いました。いつもの通り、未信者向けの伝道講義クラスと、同時進行で信徒向けのクリスチャン生活クラス、子どもクラスの3つに分かれて行いました。未信者クラスは、エルベテル教会の主任牧師のタウンオル先生が主に講義しました。最初は誰も来なくて心配したのですが、時間が経つにつれてだんだん集まって来て、2日間で合計7人が参加しました。今まで祈りながら種を蒔いてきた人がみんな来て、感謝でした。信徒向けクラスには6人が参加して、主に私(仁)やソジョン、青年牧師のサイラス先生が担当しました。講義内容は、「弟子とすること」「感情面での成熟」「赦し」「話を聞いてあげること」「質問して考えさせること」「交わり」など色々でした。子どもクラスには10人が参加して、教会学校教師のチェンチェン先生(タウンオル先生の奥様の妹)が担当しました。また、今回のセミナーでは特に、ソジョンが賛美リードを担当しました。私がギターを弾き、雄基は振り付けをやり、愛希はタンバリンをやりました。曲は、私が以前、

日本語や韓国語の子ども向け賛美をミャンマー語に翻訳しておいたものを、久しぶりに使いました。「イエスの御名でサタンに勝利した」「解放された」「イエス様ゆえにあなたを愛します」など、単純でわかりやすい歌詞をくり返して宣言する曲で、子どもも大人もみんな盛り上がりました。閉会礼拝では、「わたしはいやす主」を賛美する中で、心と体のいやしを求める人を招き、みんなで手を置いて祈って、主の臨在があふれるときとなりました。

今回のセミナーで特に感謝だったのは、主婦のマ・オンマシェーさん（35歳）が、バプテスマを受ける決心をしたことです。警察官の妻で、パレイの町に来て5か月でしたが、家が私たちの教会のすぐ近くで、信徒リーダーのマ・サンサンモーと知り合うようになり、この10月から集会に来るようになったばかりでした。彼女はビルマ族の仏教徒出身ですが、今まで何回か教会に行ったことがあり、最初から心が開かれていました。彼女は本当に「平安の子」（ルカ 10：6-8）で、私たちを自分の家に招いて食事を出してくれたりもしました。今回のセミナーを通して、はっきりとした信仰告白に至り、自分から受洗したいと申し出ました。洗礼式は、2日後の10月20日の主日となりました。その日の朝は大雨で、ちゃんと教会に来るか心配しましたが、私たちがマンダレーのエルベテル教会に行ってみると、パレイ教会のチームは早々と教会に着いていました。みんなで彼女のために祈った後、雨の中で洗礼槽に入り、私が彼女にバプテスマを授けました。私たち一家も、教会のみんなも、喜びに満ちていました。その主日の朝のディボーションの箇所は、創世記 5：18-32 だったのですが、特に 29 節が心に留まりました。

「彼はその子をノアと名づけて言った。『主がこの地をのろわれたゆえに、私たちは働き、この手で苦勞しているが、この私たちに、この子は慰めを与えてくれるであろう。』」

このパレイの地は、今まで教会開拓しようとしても中々実を結ばず、何人もの伝道者が途中であきらめて去って行ったような地です。最近も、既存メンバーの数人が信仰から離れてしまい、少なからずショックを受けていたところでした。しかし主は、そのような苦勞の多い地で、私たちに慰めの子を与えて下さいました。この日のマ・オンマシェーの洗礼式は、主が私たちに与えて下さった、慰めのしるしでした。私たちはもう一度、この苦勞の地で、あきらめずに続けて主の宣教のために働き、霊的子どもたち、主の弟子たちを生み出していこうと決心したのでした。



（パレイ教会で。家族が宣教チーム！）



（マ・オンマシェーの受洗）

24, ホーム・スクール

(1) 1対1タイム

毎週月曜日の午前は「父と雄基の1対1タイム」ということにしました。ホーム・スクールに愛希(5歳)や聖治(3歳)も加わってきて、雄基に自習させることも多く、1対1でゆっくりと話すような時間がなかなか持てなかったからです。2人で自転車に乗って、近くのホテルに行って、お茶を飲みながら、雄基のやりたいことを一緒にやります。雄基は、日本の四国で参加した子どもの賛美チーム「イッピー」のCDが大好きで、その曲をミャンマー語に翻訳したい、と言いました。それで、父親の私は辞書を片手に、息子と2人で一生懸命考えて翻訳します。難しいけど、なかなか楽しいです。もうすでに4曲完成しました。雄基の夢は、これで「イッピー・ミャンマー」の賛美チームを結成して、コンサートすることだそうです！その後は、オセロや五目ならべをやって、簡単なものを食べて、家に帰ります。雄基はこの1対1タイムを、1週間ずっと楽しみに待っているのだそうです。雄基ももう9歳、早いものです。だんだん大人になるんだな、と思いました。この大切な時期に、親子の関係をしっかり作ってコミュニケーションしながら、主にある教育をしていくことができるように、どうかお祈り下さい。

(2) 本当にあった笑い話

ソジョンが最近、ある先生の下さったメールを読んで一言。

ソジョン「それにしても『ホーム・スクーリング、**ば**かたちより本質で』なんて、スゴイこと言うね！」

仁「えっ！それは『バカたち』じゃなくて、『ホーム・スクーリング**は**、かたちより本質で』って書いてあるんだよー！！」

ソジョン「えー！そうなのー！！！！」

・・・もう二人で大爆笑でした。私は真夜中にも思い出して、おっかしくておかしくてこらえきれず、一人でおなかを抱えて笑いだして、家族みんなを起こしてしまうほどでした・・・・・・。

(3) ホーム・スクールの話(ソジョン・記)

ここ1年ぐらいの間に、韓国人の宣教師が何組かマンダレーに来ました。彼らは毎週主日の午後2時にMK(ミッショナリー・キッズ、宣教師子弟)のための礼拝を始めたので、私たちファミリーも度々参加するようになりました。その宣教師たち中で、ホーム・スクールをしている家庭が、私たちの家庭を含めて4つあります。そのうちの2つはみんな十代の子どもたちです。もう1つの家庭、朴先生の家族は、最初は子どもたちを英語のインターナショナル・スクールに通わせていました。でも、悪い友達の影響で、長男(11歳)の信仰と性格がどんどん崩れていくのを見て、危機感を感じていました。そんなとき、私たちの家でのクリスマス会に朴先生の奥様が来て、雄基と愛希が降誕劇をしたり、愛希が救いの証しを発表したり、みんなで一緒に奉仕を手伝ったりするのを見て、チャレンジを受けました。それでつい最近、彼らもホ

ーム・スクールを始めました。私たちは、親同士も良い関係を保ち、お互いに情報を交換し、励まし合いながらやっています。2013 年 1 月 30 日の水曜日からは、我が家で雄基が教える「工作教室」を開くことになりました。朴先生一家が私たちの家を訪問した時、雄基が作ったバイオリンの紙工作を見て、朴先生の男の子 3 人兄弟の末っ子（4 歳）が、自分も作りたいと言いつ出したからです。それを聞いて雄基は大喜び。すぐに、何をやろうか色々と考えたり、聖治に作らせてみたりしながら、今からもうウキウキしています。今後は聖治が大好きな、サッカー教室などでもいいかな、と思っています。このホーム・スクールが祝福されて、さらに広がっていきますように、どうかお祈り下さい。

（4）雄基のホーム・スクール（雄基・記）

日本から本をいっぱいもらって、すっごくうれしくて、毎日夢中になって読んでいます。最近のホーム・スクールは、まず朝起きたら、お父さんが作った暗唱聖句の本を、声を出して読みます。その後は聖書（今はエペソ）を 10 節ずつ書いて、それをディボーションします。その後は、漢字のテストをします。その次は、算数か英語をやります。好きな科目は算数です。苦手なのは漢字です。日本からのチームが来ているときは、通訳やガイドをしています。お手伝いは、皿洗いや洗たく物たたみ、光児の世話（ミルク作り、おむつをかえる、遊び相手する）、そうじ、ねこのえさやりなど、色々あります。勉強も仕事も、一つ一つ忠実にできるように、祈って下さい。

（5）猫の話（ソジョン・記）

私たちファミリーは、1 年前ぐらいから猫を飼うようになりました。最初は 1 匹の野良猫でしたが、その猫が 3 匹の子猫を生んだので、えさをやるようになったのが始まりです。子どもたちは大喜びでした。何より主人（仁）が猫大好きで、昔から猫を飼うのが夢だったそうです。そのうち、私も情が移って、かわいいなと思うようになりました。それに主婦としても、ネズミや蛇まで取ってくれるので助かりました。子猫たちは 1 年も経たないうちに、母猫ぐらいに大きくなりました。それで引越しの時（2013 年 3 月）に、4 匹の猫たちも一緒に連れて行きました。引越ししてから 3 週間後に、主人が 4 日間旅行に出かけるので、私と子どもたちは家で留守番することになりました。この家の庭には、地下水をくみ上げるモーターがある小屋があります。私が家の中のスイッチでそのモーターを回した時に、子猫のうちの 1 匹が、あわててその小屋の小さい穴から飛び出しました。次の日にその小屋のドアを開けてみたら、それとは別のもう 1 匹の子猫が、そのモーターの横で死んでいたのです。私は叫び声をあげました。いつもえさをやっていた雄基も、泣きくずれました。主人が留守だったので、いつも使っているタクシーの運転手を急いで呼んで、死体を土に埋めてもらいました。

私はあまりのショックで、しばらくはそのことが頭から離れませんでした。悲しみと喪失感と、自分を責める思いでいっぱい、涙が止まりませんでした。雄基や愛希たちも、とても悲しかったです。そして子どもたちは「死」というものを目の前に見るのが初めての体験だったので、死に対して色々質問してきました。その時、私は子どもたちにこう言いました。「人間もいつ

かは死ぬのよ。だからそのための準備が必要よね。私たちは死んで終わりではなくて、イエス様を信じれば天国へ行けて、そこで永遠に住めるのよ」・・・そうしたら、愛希が弟の聖治（4歳）に言いました。「聖治も早くイエス様を信じて洗礼を受けないと。」それを聞いた聖治も真剣になって、色々と聞いてきました。次の日になって、聖治は私にこう言いました。「お母さん、うちの家の猫たちも水にジャブンと入れて、ちゃんと洗礼させてね！」私は何と答えたらいいか困って「うん、まあね」と言うしかありませんでした。とにかく、その後から、聖治は福音に関心を持つようになりました。

この事件を通して、主は私に、こう語っておられるような気がしました。「あなたは、1匹の猫の死をそんなにも悲しんでいる。だが、わたしは毎日毎日地獄に向かって死んで滅び行く、多くの失われたたましいのことで、どんなに心が痛み悲しんでいるか、それがわかるか？」私は、主にこう告白しました。「主よ、わかりました。私たちがここまで来たのも、そのためですね。一人のたましいでも救われるように、その心を持って、仕えていきます。」

（ヨナ4：10-11）主は仰せられた。「あなたは、自分で骨折らず、育てもせず、一夜で生え、一夜で滅びたこのとうごまを惜しんでいる。まして、わたしは、この大きな町ニネベを惜しまないでいられようか。そこには、右も左もわきまえない十二万以上の人間と、数多くの家畜とがいるではないか。」

（6）千人の宣教師の第1号、来たる！

2013年4月1日～9日に、瀧北圭先生がマンダレーに来て下さいました。彼女は四国香川県の津田キリスト教会にあるチャーチ・スクールで先生をしています。私たちが2011年に四国に滞在中、雄基もその学校で1か月ほどお世話になりました。雄基は「自分の担任だった先生が来てくれる！」と言って喜んでいました。圭先生は「チャーチ・スクールの子どもたちがこれから将来、宣教旅行に出て行くために、まず自分自身が宣教の現場を体験しておきたい」という動機で、今回の旅行を企画しました。まずミャンマーに9日間滞在し、その後タイ南部に40日間、そして香港で2か月、その後どこかの国に2週間短期宣教旅行に行って、8月中旬には日本に戻るそうです。家庭集会、パレイ教会での集会、孤児院訪問、青年礼拝、エルベテル教会のCS礼拝、主日礼拝などで、証しやメッセージをして下さいました。また、我が家でのホーム・スクールで、算数や読解、作文、習字、なわとびなど、多彩なプログラムで教えて下さいました。雄基や愛希は、もう大喜び！圭先生の授業が楽しくてたまらない、といった感じでした。本当に感謝でした。今回、私は声がかれていて大変だったので、雄基が通訳としてよく活躍してくれたのも感謝でした。・・・エルベテル教会での主日礼拝に一緒に参加して、ソジョンがメッセージの中で「あなたは主に選ばれたのだ」という話をしました。それを聞いて、私は1つのことを思い出しました。それは、2011年9月、四国の香川県青年宣教大会のことで、そのとき、私はメッセージして「この香川県から千人の宣教師を送り出しましょう！」とチャレンジをしました。あのとき、たくさんの人々がそのビジョンに応答してくれました。そして考えてみると、今ここに、その千人の宣教師の第1号が来ているのです！たくさんの青年たちの中から、主はまず圭先生を特別に選んで、このミャンマーの地に遣わして下さいました。第1号に続いて、これからも、続々と来ることでしょう。主の下されたビジョンは実現す

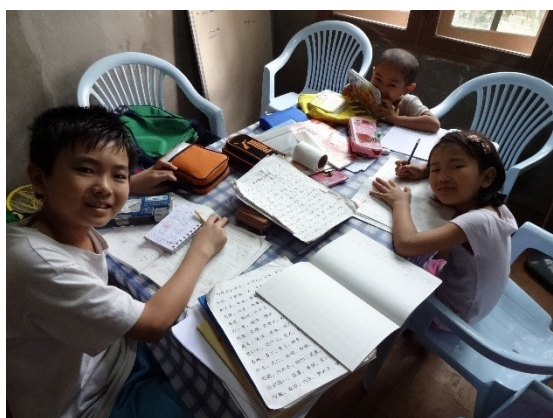
る！そのしるしを見たとき、胸がワクワクして来ました。「日本の若者たち、子どもたちは、これからどんどん宣教師、キリストの大使となって、全世界に羽ばたいて行く。日本は、靈的祝福を世界中に輸出する宣教大国になるんだ。そのビジョン実現のために、私も今から、信仰を持って準備していこう。」・・・私は改めて、そう決心したのでした。

「信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。」

(ヘブル 11 : 1)

「できるものなら、と言うのか。信じる者には、どんなことでもできるのです。」

(マルコ 9 : 23)



(ホーム・スクールの様子)



(パレイ教会で。右端中列が圭先生)

25、一冊の本から宣教へ

最近ソジョンは、読書に夢中です。友達から毎週何冊も借りてきて、ベッドで寝ながら次々と片っぱしから読みまくっています。そして、読んで恵まれたことをいつも私（仁）に話してくれます。おかげで私は、その本を読んでいなくてもその要点を知り、妻を通して色々と示されて恵みを共有し、夫婦の会話タイムにもなるという、一石三鳥の祝福に預かっています。その中で、「ラディカル・トゥギャザー」という本（Radical Together、著者 David Platt）を読んで、大変チャレンジを受けたというので、話を聞きました。その中で特に、未伝道部族宣教の緊急性についての話が、私たち2人の心をゆさぶりました。「全ての民族に福音が証しされて、それから終わりの日が来る。だからサタンはそれを妨害し、他のことに目を向けさせようとする。私たちは主の再臨を待ち望みつつ、その日が来るのを早めるために、最後の一部族に福音が届けられるまで、自分の残された時間と資金、労力を投資しなければならない」・・・これを通して私たちは、悔い改めと再献身の祈りへと導かれました。主から御心を示されたなら、すぐに行動しないと気が済まないのが私の性格です。さっそく未伝道部族への宣教視察旅行に行くことにしました。未伝道部族とは、教会もなく、聖書もなく、宣教者も働き人もいない、全く取り残された部族のことです。この国には、そのような部族がまだ 54 部族もあるとのこと。私たちは今まで何回か伝道旅行に行くだけでしたが、これからはもっと本格的に深く宣教に取り組んでいこうと決心しました。

8月20日～26日まで、シャン州タウンジー市に宣教視察旅行に行ってきました。タウンジーでは、アメリカから来た宣教師一家が2か月前から住み始めていました。YMCAで英語を教えながら、未伝道部族宣教を少しずつ始めるそうです。ヤンゴンに7年間住んだのでミャンマー語もペラペラで、びっくりしました。日本人、韓国人、アメリカ人が、ミャンマー語で話しているのは、とても不思議な感じでしたが、主を愛しミャンマーを愛する思いは同じだということを確認できて、良い交わりとなりました。22日には、未伝道部族の子どもたちのために学生寮の働きをしているマンボン先生を訪問して、証しました。23日には近くにある聖書学校に行って、宣教について講義しました。25日の主日礼拝は、チン族のラウタン先生の家で教会で説教しました。タウンヨー族宣教のダンゴン先生も一緒でした。信徒のフォローアップに壁を感じて落胆していたラウタン先生を励まして、未伝道部族宣教のビジョンに向けて前進しようと語りました。ここはマンダレーと違って、寒くて雨ばかりで大変でしたが、霊的に恵まれて、将来の可能性を見る旅行となりました。

26、教会開拓者セミナー

(1) 4つの畑トレーニング

2013年10月24日、25日に、マンダレーで「教会開拓者セミナー」が開かれました。これは、エルベテル教会のタウンオル先生が以前学んだ **East West Ministry** というアメリカの宣教団体が主催するものです。超教派で呼びかけて、マンダレー市内の青年牧師など22人が参加して、そのうちの9人はエルベテル教会のメンバーでした。講師は、テリー先生というアメリカの宣教師です。以前インドで教会開拓運動を導いていて、今は世界中を回って教会開拓者を訓練しているそうです。セミナーの内容は「4つの畑トレーニング」というもので、絵や体全体の動作を使って講義のポイントを覚えさせて、すぐにみんなの前でやらせてみるのが特徴的でした。なので、大変わかりやすく実践的で、忘れずに頭に残って、すぐに教会で使えるものばかりでした。インドでは、字が読めない人も多いので、こうするそうです。まさに、パレイや未伝道部族でぴったりの方法でした。私も今、さっそく行く先々で使っています。これを通して、教会開拓者が次々と生み出されていくように、お祈り下さい。

このセミナーの中で私は「クリスチャンであれば、全員が祭司であって、信徒でも教会開拓できる」という点が強く印象に残りました。それで、セミナー後にタウンオル先生にこう提案しました。「今私たちの教会で取り組んでいる開拓に、信徒リーダーをもっと動員したらどうでしょうか？」それで、ミッター村での開拓にコーチャーチョーウ夫妻が週1回行くようにして、パレイにはドーメッソー姉を月1回ほど説教者として派遣していくことになりました。彼らがミニストリーを通して大きく用いられ、さらに成長していくように、お祈り下さい。

(2) 信徒リーダーによる家の教会開拓

コーチャーチャーウさんは、マンダレーのエルベテル教会のメンバーです。ビルマ族の仏教徒でしたが、5年前に、奥さんのマ・エーエーウェンさんと共にバプテスマを受けて、クリスチャンになりました。以前の生活は、酒飲みと家庭内暴力、貧困という、悲惨な状況だったそうです。しかし、親戚の一人に誘われて教会に行ったとき、その壁に掲げられていた聖書のことばを読みました。「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた」(Iテモテ 1:15) そのとき、「ああ、これは私のことを言っているのだ!」とわかって、その救い主キリストを信じる決心をしました。その後、彼の人生は全く変わりました。夫婦が愛し合い、赦し合うようになりました。子どもたちも親の言うことを聞くようになり、勉強もできるようになってきました。お酒もきっぱりとやめることができました。セメント工の仕事も順調になり、収入が増して来ました。以前雨季にはいつも水がひざの高さぐらいまで入るような借家に住んでいたのが、そこを出て、2階建ての持ち家を所有するまでになりました。親せきや近所はみんな仏教徒で、色々な迫害もありました。しかし、一家の生活の変化を通した力強い証しを見て、だんだんと認めるようになりました。

私はこのコーチャーチャーウさんの家に、2012年8月から毎週火曜日の夜に行って家庭集会を導くようになりました。この集会を通して、近所の子どもたちや彼の仕事仲間など、多くの未信者たちに福音を伝えることができました。彼らはいつも伝道の情熱に燃えて、新しい人を誘い、自分がイエス様を信じてどんなに変わり、祝福を受けたかを、熱心に証しました。そのうちに私は、この集会での聖書研究会の司会を、彼に任せることにしました。彼は毎週ちゃんと準備して、学びを導き、自分で聖書を教えることができるようになっていきました。

ミッター村という所でウ・カンテンさんという人がイエス様を信じたとき、コーチャーチャーウ夫妻は、このウ・カンテンさん一家の信仰的フォローアップを、自らすすんで担当するようになりました。バイクで1時間かかるミッター村へ、ガソリン代も自費でもって、毎週行きました。いつも夫婦2人で行って、2人ともみことばからメッセージしました。彼らもウ・カンテン一家も、同じビルマ族の仏教徒出身なので、相手の状況をよく理解できて、愛と共感をもって熱心にケアしました。私は、このミッター村開拓伝道の、助言・相談役に回りました。毎週火曜日にコーチャーチャーウさんの家で、彼らの報告を聞き、問題をどう解決していくか一緒に考え、来週の計画を立て、共に祈りました。彼らの働きを通して、ウ・カンテンさんは信仰的に成長し、ウ・カンテンの奥さん、娘夫婦もバプテスマを受けました。また同時に、この働きを通して、コーチャーチャーウ夫妻の信仰も共に成長しました。主の働き人、信徒伝道者として、しだいに整えられていきました。

2014年1月からは、ミッター村の家庭集会は、毎週日曜日午後の礼拝となり、エルベテル教会の枝教会「ミッター・エルベテル教会」として正式にスタートして、コーチャーチャーウ夫妻がその信徒牧会者となりました。そして2014年1月21日の火曜日には、コーチャーチャーウ夫妻の「卒業式」と「任命式」をやりました。私がもうこれ以上、彼らをいちいち教えることはしません。彼らは主につながって、自立して、自分から動くリーダーです。彼らは、いつも喜びとやりがいを持って、夫婦仲良くバイクで出かけていきます。そんな彼らの姿を見ると、私の心の中にも、主にある深い喜び、充実感がわき上がってきます。弟子養育のサイクルが3

代、4代目まで行くのを見ると、孫を喜ぶ祖父のような感じがしてきました。もう私がいなくても大丈夫です。私は次の地へ行って、またこのサイクルを新しく始めるだけです。私はこの「信徒リーダーによる家の教会開拓」という戦略とビジョンに対して、改めて確信を強めました。そしてそれこそが、私の宣教師としての役割なんだ、という使命感を新たにしました。

（使徒 14：23）また、彼らのために教会ごとに長老たちを選び、断食をして祈った後、彼らをその信じていた主にゆだねた。

（Ⅱテモテ 2：2）多くの証人の前で私から聞いたことを、他の人にも教える力のある忠実な人たちにゆだねなさい。

27、未伝地へ引越し

（1）ニャウンシェ町へ

私たちファミリーは、2014年11月13日に、無事ミャンマーに戻ってきました。こちらはとても暑くて、ジャンパーから半袖に着替えて、服の調節が大変でした。18日にはマンダレー市に行きました。タンオル先生ご夫妻にも久しぶりに会って、色々と報告しました。23日の主日礼拝では、エルベテル教会で説教して、これからのビジョンについて分かち合いました。私たちは、今まで11年住んでいたマンダレー市を離れて、未接触・未伝道部族（教会・聖書翻訳・働き人が全くない部族）が集中しているシャン州に引越します。まず初めに、人口4万人の「タウンヨー族」に焦点を合わせて、新しいミニストリーを始めます。そのことで、教会の皆さんにとりなし祈りをお願いしました。

24日には、シャン州の州都タウンジー市の近くにあるニャウンシェ町に来ました。現地人協力者のダンゴン先生とも久しぶりに再会して、今後の働きのことなどを色々と話し合いました。そして、25日には、ちょうど良い家を見つけることができました。心配していた町役場の許可も、すぐに取れました。皆様のお祈りのおかげです。心から感謝します。29日に契約した後、家の修理や、マンダレーに置いてある家具や荷物の移動など、色々とやることがあって忙しくなります。子どもたちは、ずっと旅行続きで大変なこともあります。9か月ぶりのミャンマー生活を楽しんでいるようです。雄基（12歳）は最近、手品にはまっています。出会う人みんなに見せて回っています。後で村での伝道に用いられることでしょう。愛希（8歳）は、忘れかけていたミャンマー語を思い出して、よくしゃべっています。聖治（6歳）と光児（3歳）も元気に走り回っています。美香（6ヶ月）はよく笑うので、どこに行ってもみんなからとてもかわいがられています。健康と安全が守られて、家族が一つの宣教チームとなって前進していけるように、続けてお祈り下さい。

（２）チャートン村訪問伝道

2015年4月27日（月）に、チャートン村を訪問しました。朝6時に出発して、バイクで約1時間半かかりました。途中で、この村を案内してくれる、ウーストウンさんと合流しました。彼はパオ族で仏教徒でしたが、クリスチャンになって熱心に伝道しています。彼の息子の嫁がタウンヨー族で、この村の出身なので、その実家を訪問することにしたのです。村に入ると、まず市場でトラクト配布をしました。服がみんなパオ族の民族衣装なので、パオ族だと思ったのですが、後で聞いたらみんなタウンヨー族だとのこと。この村には500ぐらいの家があって、ほとんどがタウンヨー族だそうです。市場では、みんな良くトラクトを受け取ってくれました。その後家々を戸別訪問しました。私たちが、ある家に行ってトラクトを渡そうとすると、おばさんが「家に入ってお茶を飲んで行きなさい」と言われて、2人で家の中に入りました。中には3人のおばさんたちがいて、色々とおしゃべりしました。私が福音の紙芝居を見せて話すと、よく聞いてくれました。次の家は、お母さんと息子2人がいて、ここでも紙芝居で福音を語りました。ご主人は麻薬をしていていつも家にいないとのこと。ご主人が変えられるように、イエス様の御名によって祈ってあげました。ここの家も心が開かれていて「また来て下さいね」と言っていました。3番目には、ウーストウンさんの息子の嫁の実家に行きました。家には、嫁の両親と妹（名前はタンミエンエー、18歳）がいました。両親はだいぶ年取っていて、お父さんは目が見えません。話しをしていると、近所のおばさんと子どもたちが次々と集まって来て、全部で12人ぐらいになり、私たちチーム5人と合わせて17人で、家の中は一杯になりました。チームメンバーが自分の救いの証しを話して、私が福音の紙芝居を見せました。その後ウーストウンさんが、仏教とキリスト教を比較しながら大胆にメッセージしました。お父さんは以前仏教の教師でしたが、福音の話を良く聞いてくれました。最後に、お父さんの目のいやしと、みんなの救いのために、一人一人に手を置いて祈りました。ウーストウンさんの紹介ということで来たので、みんな親しくなって「次に来るときには夜泊まって行きなさい」と何度も言われました。村は関係社会なので、家族親戚関係を通して伝道するのが一番だと思いました。次にはこの家に泊まって、じっくり福音全体を解き明かすようにしようと思いました。ここが平安の子となって、家族全体が救われて、家の教会がスタートできるように、期待を持って祈っています。とにかく、このチャートン村は、今までの他のタウンヨー族の村よりも、霊的に開かれていると感じました。それに人口も多いし、道も良いので、雨季でも軽トラックでみんなで行けそうです。とにかく、今回の伝道は大きな手ごたえを感じました。今後この村をもっと集中して伝道して行こうと考えています。ここがタウンヨー族宣教の突破口となるように、ぜひ続けてお祈り下さい。

（３）収穫を待ちながら忍耐（ソジョン・記）

2015年5月8日（金）に、私たちのチームメンバーが、一緒にタウンヨー族の村であるチャートン村に行きました。今まで訪問した村の中では反応が良く、道も良くて車で行けるから、という理由で、この村をみんなで訪問することにしたのでした。子どもたちも全部含めて、15人が小型のトラックにギュウギュウに乗って行きました。最初は道が良かったのですが、だんだ

ん山の道に入って来たら、車のエンジンが何回も止まるほどの坂道で、片道2時間かかりました。それなりに大変だけど、車内でも賛美したりおしゃべりしたりして、楽しい旅でした。訪ねた家は、前回に行った、タウンヨー族の娘が嫁に行ってから信仰を持つようになった、その娘の実家でした。最初に私が、絵を見せながら福音をわかりやすく伝えました。ダンゴン先生の奥さんは、祈りが応えられた証しをしました。それぞれの賜物を生かしながらの伝道でした。おじいさんとおばあさん、長女とその子どもも参加して、良く聞いてくれました。また、家の周りに集まって来た近所の夫人たちとも交わりました。この村でもやはり、水不足が大きな問題でした。いくら井戸を掘っても水がでないということです。貧しくて、日々の必要のために、山の木を切って売ってしまうので、結局は水が出ない山になる、という悪循環です。なので、その村で水が出るように祈る必要があります。祈りが聞かれる体験を通して、彼らが生きておられる主を体験し、救いに導かれるようにお祈りください。

今回の訪問を通して私が考えたことは「収穫を待つ農夫」のことです。農夫は、まずは荒地を耕し、春に種を蒔き、1年間を労しながら、秋の収穫のために忍耐します。教会がない民族は、まさに荒地のようです。サタンの覆いが二千年以上覆われているところです。その地を耕し、福音の種を蒔き、それが芽生えるように祈り、また色々な妨害から守られ、良く育て成長するように見守るのです。そして、その収穫の季節が必ず来ることを強く信じて、信仰で宣言し、忍耐を持って働き続けます。私たちも、どんな状況の中でも喜びをもって忍耐して、宣教し続けたいと思いました。そしてこれは、後方で祈りと支援をもって共に参加して下さる多くの助け手がいるからこそ、できることであるといつも思われます。それを思うとき、心から深い感謝を申し上げます。大いなる収穫の時まで、あきらめずに、続けて共に祈っていきましょう！



(タウンヨー族の村)



(訪問伝道)

(4) 家族礼拝の変化 (ソジョン・記)

最近、我が家の家族礼拝のスタイルが変わりました。以前は、20分ほど賛美し、その後は決まった祈り課題を一つ一つ読んでみんなで一緒に祈る形式でした。でも、ある韓国人宣教師家庭の奥様のアドバイスで、マンネリ化するより、常に新しく創造的なことを沢山入れた方がいいと言われました。それで、箴言を毎日1章ずつ読むようにしました。みんなで1節ずつ回りながら読み、その中で心に残る1節を自分に適用して分かち合うのです。そして、今日一日の中で、感謝することを言って、祈ってほしいことを言うのです。今までは、一方的な形でしたが、

今回はみんなが参加する形です。そうしたら、以前と違って、子どもたちが積極的に参加するのです。特に聖治が、「前は、礼拝の時は終わるのを我慢して待つだけだったけど、今は楽しいんだ。」というのです。みことばの分かち合いも、それなりに真剣なものです。それから、光児も感謝なことを言うとき「今日、ハンバーガーを食べて良かった。愛希と人形の遊びができて良かった。聖治が良い友だちで良かった。」などと言い、祈ってほしいことは「後で、お父さんのように、結婚して、お父さんになるように。ひらがなが早く読めるように。」など言うのです。むしろ、親が今日の感謝することを探すのに、苦勞するほどです。すると、子どもたちが「お父さん、今日これがあるでしょう」と教えてくれます。さすが子どもは素直で、良く親を見ているのだとわかります。最近、私も毎晩の家族礼拝が楽しくなりました。何よりも「ついこの間まで、赤ちゃんのように思っていたのが、あっという間に成長していくのだな～」と思わされます。それで、子育ての大変さも忘れ、5人も宝を授けて下さった主に心から感謝する思いでした。そして、母としては、この曲がった最後の時代にあって、この子たちが、ダニエルのように世を治める者として成長するのを祈るばかりです。

(5) 雄基の誕生日パーティー

2015年8月29日(土)に、雄基の13歳の誕生日パーティーをしました。ミャンマー人の友達22人が集まって、そのほとんどが未信者でした。賛美を歌って、雄基が手品を見せた後、私(仁)が聖書の話(創造から再臨、天国まで)を紙芝居で見せながら、福音を伝えました。最後に「このイエス様を信じて天国に行きたい人は手を挙げて!」と言うと、ほとんどの子が手を挙げました。ケーキと食事を食べた後は、みんな外で元気よく遊んでいました。次の日の日曜日には、以前から来ていたプープーという女の子の友達2人が、教会学校に参加しました。雄基がリードする「イッピー」賛美チームに参加して、礼拝の中で一緒に歌いました。イッピー・チームも7人になりました。雄基もますますはりきっています。ミャンマーの未信者の子どもたちが、少しずつですが毎週教会に来るようになって、本当に感謝です。彼女たちがイエス様にしっかりつながって、バプテスマを受けることができるように、どうかお祈り下さい。

(6) インフルエンザ(ソジョン・記)

10月8日に、主人(仁)が遠くにバイクで伝道に出かけて、帰り道も雨にぬれて、大変疲れて帰ってきました。その夜から38度の熱が出て、インフルエンザにかかってしまい、看病する私も次の日に、同じようにかかってしまいました。今回のインフルエンザは、全身が痛くて、解熱・陣痛剤を続けて飲まないとなえられないほどの痛みでした。子どもたちにはうつらないように部屋を隔離して、食事の時には、雄基が部屋に持って来てくれました。最初はジュースぐらいしか飲めないほどでしたが、後では、チームの同労者たちが作って持って来てくれたおかゆなども食べられるようになりました。5人の子どもたちは同じ家でも親と接することなく、自分たちで自立して生活していました。雄基と愛希が食事の準備をする間、聖治や光児が美香の相手をして、騒ぎながらも雄基がリーダー役で何とか治めていました。美香も私をあまり探さず、たまに見るとお母さんの愛を確認するかののように、にこっと笑うのです。とにかく、

今回大変だったのですが、こんな親たちを子どもたちも良く支えてくれた 5 日間でした。今は、熱は下がりましたが、体調が早く正常に戻るように、お祈り下さい。

(7) バザ先生の家でクリスマス会 (ソジョン・記)

2015 年 12 月 5 日 (土) に、クリスマス会をしました。全部で 50 人ぐらい集まりました。場所はバザ牧師先生の家でやりました。バザ先生は自分の子ども 5 人と、伝道ターゲットにしている村の子どもたち 9 人を家に住まわせて寮の生活を通して弟子を育てています。2 か月前にはその中から 5 人も洗礼を受けました。子どもたちの中には、未信者の家から来て、信仰を持つようになり、洗礼まで受けて、今度は自分の家族を伝道するようになっている子もいます。伝道が難しいこの地域で、素晴らしい実を結んでいることを見て、主の御名を賛美します。最近、バザ先生と村と一緒に伝道に出かけたり、この寮の学生たちに聖書を教えたり、雄基も参加してイッピーの賛美やダンスも教えながら、お互いに良い交わりを持つようになっています。また、今回のクリスマス会には、雄基の未信者の友たちで 7 人を誘って、今まで何か月も練習してきた、人形生誕劇やイッピーの賛美とダンスも披露することができました。この未信者の友たちが救われるようにお祈りください。

28, WUPM (世界未伝道部族宣教会) との出会い

私と WUPM (World Unreached People Missions 世界未伝道部族宣教会) との最初の出会いは、確か 2008 年ごろだったような気がします。私たち一家が、ミャンマーのヤンゴン市にあるホテルで宿泊していた時のことでした。当時小学生だった長男の雄基が、お父さん (私) の書いた証しトラクトを、ホテルで出会った人たちに手渡していました。その中に韓国人の宿泊客がいたので、雄基は彼らにもトラクトを渡して、私に「お父さん、向こうに韓国人がいるよ」と言いました。私は後でそのうちの一人と会って、あいさつしました。彼が WUPM の事務局長ソ・スンモ牧師だったのです。そのときは少し立ち話をして、彼の名刺をもらっただけでした。その後私は、その名刺に書いてあった WUPM のメールアドレスに、自分のミャンマー宣教ニュースレター (韓国語版) を定期的に送るようにしました。

それから何年もたった 2016 年に、私は色々な事情で、今まで所属していた宣教団体を辞めることになりました。ミャンマー宣教は全てストップして、日本に帰り、何をしたらいいのか全くわからない状態でした。それでも「必ずまたミャンマーに戻るんだ」と信じて、祈っていました。ニュースレターにそのような事情を書いて、続けて送っていました。

そんなある日、一つのメールが私のところに来ました。それは WUPM のソ・スンモ牧師からのメールでした。その内容は、こうでした。「色々な深い事情で宣教活動を中断されておられるようですが、一度お会いして話しませんか。」私はもちろん OK の返事をしました。その後、2016 年 6 月 23 日に、WUPM 国際代表のチョー・ジャンヨン牧師とソ・スンモ牧師の 2 人が、私たちに会うために飛行機で日本に来てくださいました。岡山空港の食堂で、私とソジョン、そして WUPM の 2 人の、合計 4 人が、初めて顔を合わせて話し合いました。私たち夫婦は、

今まであったことを全部話しました。その後で、チョー先生はこう言いました。「事情はよく分かりました。私たちは先生のニュースレターを読んで、このまま宣教活動を閉じるのは余りにも惜しいと思いました。私たちは、一人の宣教師の存在がどんなに大切か理解しています。それで主に示されて、ここまで来たのです。どうか私たちの団体に入って、ミャンマー宣教を続けてくれないか？」私たちは驚きのあまり、言葉も出ません。私とソジョンは「これは主から出たものだ」と信じて、喜んで入会することにしました。理事会も書類審査も無し、面接してその場で即「決定」でした。本当にすごい奇跡的な主の導きでした！！

この一連の出来事を通して、私が主に示された聖書箇所は、黙示録 3 章 7 節から 13 節の、フィラデルフィヤ教会に対するみことばです。その中で、主は私たちに「見よ。わたしは、だれも閉じることのできない門を、あなたの前に開いておいた」と約束してくださいました。宣教の門を主が開いたのなら、もう誰も閉ざすことはできません。

・・・・主の真実さを覚えて、主に感謝と賛美をささげます。私たちは、主の約束のみことばを握って、これからも宣教を続けていきます。



(宣教師派遣状の授与)



(左がソ・スンモ先生、右がチョー・ジャンヨン先生)

29、ついにミャンマー宣教再開

(1) 短期宣教者たちと一緒に

2017 年 3 月、私たち一家 7 人は、約 1 年ぶりにミャンマーに戻りました。今回は、馬場俊輔さんという青年が、1 週間の間私たちと同行して、宣教体験をしました。彼は、2011 年 9 月の香川県青年宣教大会で私がメッセージして宣教のチャレンジをしたのを聞いて、宣教師になる決心をしました。そして今回、そのビジョン実現のために、具体的な一步を踏み出したのです。海外旅行は初めてとのことですが、よく適応していました。彼は私たち自身が旅行の移動で大変な中、色々と助けてくれて、本当に助かりました。ニャウンシェ町の近くのインレー湖にあるエンター族の村にも行って、証しすることもできました。彼は 3 月 30 日にはミャンマーを離れて、日本に戻りました。今後も、彼が世界宣教のビジョンを持って、将来を準備していただけるように、どうかお祈り下さい。それからもう一人、野田愛香さんという姉妹も、今回私たちと同行して、約 1 か月 ミャンマーに滞在しました。彼女もやはり、私たちの宣教の証しを聞いて

て、自分も宣教の働きのために役立ちたいと思って、一緒にミャンマーに行く決心をしたのです。彼女は、私たちが香川県高松市に1年間住んでいたときにも、すぐ隣の家に住んでいて、良い交わりを持っていました。今回も短期間の教育宣教師として、子どもたちの勉強をよく見てくれました。教会の色々な集会でも、しっかりと証していました。そして、4月20日には日本に戻りました。彼女の今後の歩みのためにも、続けてお祈り下さい。



(馬場俊輔さんとバザ先生ご夫妻)



(野田愛香さん、インレー湖で)

清野基先生チーム

2017年6月9日(金)から12日(月)まで、長野県の下諏訪キリスト教会の清野基(もと)先生と、その息子さんの譲(ゆずり)君(11歳)、そして教会員の小畑望(のぞむ)さん(18歳)の3人が、私たちの所まで訪問して下さいました。先生たちはホーム・スクールをしていて、私たちと共通の話題も多く、実り多い交わりとなりました。インレー湖上のエンター族の村を訪問したり、地域教会の集会に参加したりして、良い宣教体験をすることができました。今後も、日本のホーム・スクール出身の子どもや青年たちが、どんどん宣教へと出かけていくように、私たち一家がそのための橋渡し役ができるように、どうかお祈り下さい。



(清野基先生たちのチーム)



(森栄一郎さん、至恩君、良輝君、山田皓子さん)

森さんチームと山田皓子さん

2018年4月28日から5月2日まで、岡山県の森栄一郎さんと、その甥である至恩(しおん)君、良輝(よしき)君の3人がミャンマーに来ました。彼ら森ファミリーとその家の教会は、私たちが2016年四国の高松滞在中に出会って以来、ずっと私たちの宣教のために祈り支えて下さっている方々です。今回は短い滞在でしたが、私たちの宣教の現場を実際に見て祈って下さ

いました。また至恩君や良輝君（2人とも12歳）も、日本語教室やボート、プール、乗馬も体験できて、とても喜んでいました。それから、4月27日から5月22日までは山田皓子（こうこ）さんが来て、こちらに滞在しています。彼女は以前もミャンマーの私たちの所に4回来たことがあります、今回は大学教授を引退後、こちらに日本語教室ボランティアとして来て下さいました。滞在中に健康が守られ、主との深い出会いと交わりがありますように、どうかお祈り下さい。

家庭教師・沙紀さん

2018年9月1日から18日までの間、照屋沙紀（てるや・さき）さんが私たちの所に来て下さいました。以前私たちが、私たちの子どもたちのための家庭教師を募集するために、多くの方々にメールを送っていたのですが、ある先生がそのメールを見て、彼女に伝えて、彼女がそれに応答して下さいました。なので、沙紀さんとは以前一度も会ったことがありませんでした。彼女は沖縄の出身で、以前は教会付属の幼稚園で働いていましたが、今はゴスペルシンガーとして活躍しています。私たちは以前から家庭教師（教育宣教師）が来るようにと、ずっと祈っていたのですが、沙紀さんはまさにその祈りの答えでした。4人の子どもたち（愛希12歳、聖治9歳、光児7歳、美香4歳、長男の雄基はマンダレーの聖書学校在学中なので不在）は、沙紀さんが来てくれてもう大喜び！！勉強だけでなく、遊びや話しの相手になってくれるので、4人が奪い合うようにして沙紀さんとの交わりを楽しんでいました。私たちとしても、色々な面で親ができない部分をサポートして下さい、本当にありがたかったです。沙紀さんは先日、「Jesus Beat」というインターネットのテレビ番組に出演して、ミャンマーでの体験を、写真を見せながら語って下さいました。以下のYouTubeで見ることができるので、ぜひ一度見て下さい。

<https://youtu.be/DmkBPx0pNVU>



（沙紀さんと子どもたち）

（2）バス追突事故

2017年5月16日朝6時頃、私（仁）は一人で、バスに乗っていました。ヤンゴンでビザ国内延長のための書類を手渡し、その帰り道でした。前日夕方7時にヤンゴンを出発してから約11時間の夜行バスです。ヤンゴンでの仕事を早く終えて安心して、もう後30分ぐらいで私の住むニャウンシェ町に帰れる、そんなときでした。・・・・・・突然、「ドーン」という音と共

にバスが止まりました。前のバスが何かで急停車して、私たちのバスがそれに追突したのです。何事かと思っていたら、今度は後ろからバスが突っ込んできて、後ろが大破しました。それと同時にタイヤが外れて、バスはガタンと傾きました。バスの中は乗客が10人ぐらいで、一時騒然となりましたが、それでも結構みんな冷静でした。とにかくこのままでは危ないので、みんなすぐにバスを降りました。降りてからバスを見ると、この事故の大きさがわかりました。前のガラスは壊れて破片が四方に飛び散っていました。後ろから来たバスも前ガラスが全壊でした。3台玉突き事故でしたが、それでもケガ人が全くなかったのは、本当に感謝でした。また、ニャウンシェ町から近かったので、1時間後ぐらいですぐに代わりの車が来て、無事に帰れたのも感謝でした。これが途中の山道だったら、夜の野外で何時間も待つところでした。また、山道でひっくり返っていたら、死ぬところでした。本当に主に守られたと思います。事故があってバスを降りてからすぐにソジョンに携帯で電話しようとしたら、ちょうどソジョンからの着信が少し前に入っていました。何か変な予感がして心配になって、電話したのだそうです。ソジョンのとりなし祈りにも感謝します。とにかく、無事に家に帰れて何よりでした。そしてこの出来事を、子どもたちに話して写真を見せたら、もうみんな大興奮で、質問攻めされて大変でした。もちろん、こんな体験は初めてです。そして今こうして命があるのも、主の守りがあってこそで、命も主のものだと改めて感じました。全てを守られた主に感謝します。今後も色々な所に旅行することがあるのですが、こうした事故から守られるように、どうかお祈り下さい。

「あなたがたには、あすのことはわからないのです。あなたがたのいのちは、いったいどのようなものですか。あなたがたは、しばらくの間現れて、それから消えてしまう霧にすぎません。むしろ、あなたがたはこう言うべきです。『主のみこころなら、私たちは生きていて、このことを、または、あのことをしよう。』」

(ヤコブ4:14, 15)



(バス追突事故)

30、会堂と家の建築

2015年にヤンゴンにあるミャンマー韓国人教会で私がメッセージしたときに、カン・インソンさんという婦人は聞いて感動し、後で私にメールをくださいました。カンさんは、韓国ソウル市江南にある自分の所属する聖書研究会のメンバーに呼びかけて、ミャンマーで教会堂を建てるために募金をして下さったのです。私の宣教について聞いたメンバーの皆さんは「このよう

な価値のあることのためにささげることができてうれしい」と言って下さいました。募金の結果、約 400 万円が準備されました。カンさんは「伊藤先生の働きのために使って下さい」と言って下さったのですが、私は「今（当時 2016 年）、私たちは日本にいますので、私たちのためというよりも、協力している現地人牧師の教会開拓のために使いたい」と答えました。そこで、話し合いの結果、まずは現地人牧師の名義で土地を買い、その 3 分の 2 の敷地に会堂を兼ねた牧師館と寄宿舎を建て、残りの 3 分の 1 は、将来に伊藤ファミリーの住居を建てるために使う、ということになりました。主から出て来た想定外の大きなプレゼントに、ただただ驚き感謝するばかりでした。

その後私たちはニャウンシェ町に行って、一緒に協力して宣教しているバザ先生ご夫妻に、この土地と家の件を話しました。先生ご夫妻は、この町に来て 10 年間で 7 回も引越しをして、今も倉庫を改造した古い借家に住みながら、本当に苦勞をして来ました。そのような中でも、11 人もの村の子どもたちを家に住ませて自分の子のように養って、主の弟子として育てておられます。先生は最初、この話を信じられなくて、ポカンとしてしました。でも、話が具体的になるにつれて、だんだん理解できるようになり、奥様は泣いて喜びました。それで、先生はさっそく土地を探して見ましたが、町の中では値段が高くて買えません。しかし、少し郊外で、しかもそれほど遠くない所に、ふさわしい土地を見つけました。約 154 坪で、180 万円という値段です。すぐに持ち主と会って、仮契約をしました。その後、カンさん自身がニャウンシェ町まで飛んできて下さいました。バザ先生と出会い、その土地を直接見て、ここが主の導きであることを、私たちと一緒に確認しました。カンさんは、お金を現金で持って来て下さったので、それで全額を支払い、契約が完了して、その土地は完全にバザ先生の土地になりました。与えられた献金 400 万円のうち、180 万円は土地代として使ったので、残りの 220 万円のうち、まず 120 万円はバザ先生の家と寄宿舎と会堂の建築に、100 万円はあとで伊藤ファミリーの家のために使う、ということになりました。雨季が終わる 11 月頃には、さっそく会堂建築を始めるそうです。契約したら、バザ先生もやっと実感がわいてきたようで「これでもう引越しをしないで、腰を据えて宣教ができるぞ!」と大喜びでした。主のみわざに感謝します!



(バザ先生（右上）と、寮の子どもたち。右下がカン・インソンさん) (教会会堂建築)

2017 年 6 月 11 日（日）に、私たちが一緒に宣教協力しているバザ先生の教会の新会堂がほぼ完成して、献堂礼拝をささげました。昨年の 8 月に、韓国の教会の主婦であるカン・インソンさんたちの献金のおかげで土地を購入して、今年の 4 月から建築を初めていました。台所や電気工事など、未完成な部分もたくさんあるのですが、とりあえず礼拝できる空間はできたので、献堂礼拝をすることになったのです。当日は約 30 人が集まり、共に完成を喜び祝いました。清

野先生たちのチームが参加して、メッセージや証しをして下さいました。雄基と愛希たちも、ワーシップ・ダンスを披露することができました。今後この会堂で、子どもたちの寮ミニストリーを始め、聖書学校や色々なセミナー・訓練コースもする予定です。ここが未伝道部族宣教のセンターとなるように、どうかお祈り下さい。

2017年5月19日に、バザ先生の教会のすぐ近くの所に、私たちの住居用の土地を購入しました。以前は、教会の敷地内の3分の1を使う予定でしたが、色々と考え直して、別の所に土地を買おうと、バザ先生と相談していました。そうしたら、教会から歩いて1分もしない所に約70坪で約70万円の土地が出て来たので、すぐを買うことにしたのです。資金は、やはりカン・インソンさんたちの献金によって充てられました。今私たちが借りている家は、来年5月末には契約が切れるので、その前には家を建てられるように、雨期が終わる10月ごろには建築を始められるようにと考えています。もし借家にずっと住んで家賃を払い続けるならば、家賃が毎年どんどん上がって、他の家を探さなければならず、そのたびに引っ越しとなって、とても大変です。とにかく、家族7人が安心して住める家が、順調に建てられるように、必要が満たされるように、どうかお祈り下さい。

2018年3月1日に、引っ越しをしました。昨年の11月から家の建築をしていたのですが、2月末にはほぼ完成したので、今まで借りていた家を出て、新居に移ったのです。建築は、ソジョンが設計して、バザ先生の奥様の弟が監督者となってやったので、思ったより順調に進みました。もちろん、色々大変なことが何回もありましたが、祈りによって守られました。場所はガユナー教会のすぐ近くで、とても便利になりました。周りは野原で何もなくて、とても静かです。子どもたちも新しい家が与えられて大喜びで、教会にいるミャンマーの青年たちと毎日遊んでいます。私たちも、以前の「毎年契約更新のたびに大家さんが家賃を値上げするか、また他の借家を探して引っ越ししなければならないか」というような心配からやっと解放されて、本当に感謝でした。新居だと言っても、電気や水道管を修理する所がたくさんあって、まだまだ落ち着きませんが、それでも良い家が与えられて、主に感謝しています。

31、「蒔いた種は無駄にならない」チャートン村の話

2015年から、私たちはタウンヨー族への宣教を始めました。タウンヨー族の色々な村を訪問する中で、チャートン村という村に特に何回も伝道しに行くようになりました。私たちの住んでいるニャウンシェ町からバイクで片道2時間もかかります。もちろん教会もなく、クリスチャンも全くいない村です。知り合いの家を何軒か回って、泊まったりもしました。何回も福音を伝え、救いの証しをしました。多くの人々と人間関係を築き、親しくなることはできました。しかし、キリストを受け入れる人は中々起こされませんでした。それでも、訪問した家の人々の名前をメモ帳に書いて、その救いのために祈っていました。そうしているうちに、2016年1月に私たち一家は急に日本に帰らなければならなくなり、宣教は中断されてしまいました。それから色々なことがあって、私たちがやっとミャンマーに戻ったのは、2017年3月末でした。

私たちは、タウンヨー族宣教を再開しましたが、もっと近くの村で伝道することになりました。それでチャートン村には、もう行かなくなってしまいました。

そんなとき、2017年7月に私がチャートン村の近くにある、別の村の教会に奉仕に行きました。そうしたらそこで、何と以前チャートン村で出会った人と再会したのです。マ・テンラという人で、私たちが彼女の家に泊まって夜に伝道集会をした家の人でした。最初見たときは、すぐにはわからなかったのですが、向こうから話しかけられて、やっと思い出すことができました。彼女は、色々な事情があってチャートン村から追い出されて、今はクリスチャンの知り合いの家に身を寄せていて、彼らと一緒にその教会に出席していたのです。彼女は、色々な苦しみの中で、イエス・キリストを信じて受け入れました。それから、私たちがチャートン村に行くたびに必ず立ち寄った家の末娘、ウーストゥンさんの息子の嫁の妹「タンミェンエー」も、その教会に来ていました。彼女は私たちがその家を訪問して何回も証しするのを聞いて、その頃から福音に関心を持つようになったそうです。今ではイエス様を信じて、彼女の姉（以前から信者）と一緒に毎週その教会に来ています。さらに、最近2週間ぐらい前から、カチン族でクリスチャンの主婦（夫はタウンヨー族）がチャートン村のタンミェンエーの家の近くに引っ越してきて、彼女と一緒にこの教会に来ているとのこと。……彼女たちに会って話を聞いて、私は本当に感激しました。2年前に私たちが伝道したときには、何の手応えも感じられなくて、がっかりして、あきらめていたのに、それが今こうして目の前で実を結んでいるのを見るなんて……。あのとき、私たちが蒔いた福音の種は、無駄ではなかったのです。主はちゃんと、私たちの祈りに応えていて、私の知らないうちに、チャートン村からイエス様を信じる人を起こして下さったのです。タウンヨー族の中から、確実にクリスチャンは起こされています。主は祈りを聞いて下さる！すばらしい主のみわざに感謝します。

「ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のみわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあってむだでないことを知っているのですから。」（I コリント 15:58）



（中央がタンミェンエー、右が彼女の姉）

32、青年セミナー

2017年9月27～29日には、ガユナー教会で、青年セミナーが行われました。近くの教会の青年や子どもたちも来て、約30人が参加しました。3クラスに分かれて、求道者クラスは私（仁）

が担当し、信仰生活クラスはソジョンとバザ先生が、子どもクラスはイエマッスェ先生（エンター族出身の女性献身者）と雄基が主に担当しました。雄基は子どもクラスで賛美やダンス、ゲーム、工作などを用いて、楽しく導いていました。また、このセミナーでも、聖書ストーリーのやり方がさっそく用いられました。そしてこのセミナーを通して、5 人の受洗者が与えられました。

- （１） スーモントェ：女 14 歳、パオ族、今年 6 月からガユナー教会の寮に住んでいる生徒。パオ族はこの近辺の未伝道部族。
- （２） テッアウン：男 15 歳、パオ族、スーモントゥェと同じ村出身。母親はタウンヨー族。
- （３） ロルサン：男 30 代、チン族、バザ先生の親戚。1 児の父。
- （４） 聖治：伊藤家の次男、8 歳。
- （５） 光児：伊藤家の三男、6 歳。

・・・スーモントェやテッアウンは、家族親戚がみんな未信者なので、最初は迷っていましたが、みことばを通して主に触れられて、決心に至りました。聖治は 1 か月ぐらい前から洗礼を受けたいと言って、祈って準備していました。光児も、ずっと以前から受けたいと言っていたのですが、私たちはまだ早いのでは、と思っていました。しかし聖治の洗礼式の当日になっても、光児がやはり洗礼を受けたいと親に言ってきたので、バザ先生に相談したら「幼くてもはっきり信じていれば大丈夫ですよ」と言われて、直前になって急きょ決定しました。とにかく、今回のセミナーで、今まで蒔いた種が実を結んで、本当にうれしかったです。

「涙とともに種を蒔く者は、喜び叫びながら刈り取ろう。」（詩 126：5）



（青年セミナー求道者クラス）



（信仰生活クラスで教えるソジョン）



（子どもクラスを導く雄基）



（受洗者 5 人！）



(聖治の受洗)



(光児の受洗)



(元気な子どもたち5人)

3 3, タウンヨー族カンドー村伝道

7月から、タウンヨー族の村であるカンドー村に伝道に行っています。私とソジョンの2人でバイクに乗って、15分ほどかかる所にあります。ソジョンが以前行って親しくなったマ・ナンティの家を、毎回訪問します。ルカ10章に書いてあるように、家から家へと渡り歩かず、「平安の子」の家に集中して、関係と交わりを深めるようにしています。彼女の家に行くと、いつも歓迎されて、家の中に入り、お茶を飲みながら、ソジョンが福音の話をして、家族のために手を置いて祈ってあげます。回を重ねるごとに親しくなるので、話もよく聞いて受け入れます。特にマ・ナンティの娘のマ・グェチェはとても心を開いています。前回、色々な薬を持って行ってプレゼントしたら、大変喜ばれました。このようにして、1つの所に続けて訪問しながら関係を深めていくと、その家の人たちがその村の中で、私たちの「身元保証人」となってくれます。クリスマスのときには、彼女たちを教会に誘う予定です。この家族を通して、その村に宣教の門が開かれ、タウンヨー族全体が救われていきますように、ぜひお祈り下さい。



(右から2人目がマ・グェチェ)



(バイクに乗って村伝道)



(カンドー村で家庭集会)

2017年12月16日（土）に、ガユナー教会で第1回目のクリスマス伝道集会を行いました。タウンヨー族のカンドー村から60人、そして公立学校の友達20人ぐらい、合計80人以上の未信者たちが来てくれました。クリスマス賛美を歌い、雄基たち青年チームがダンスや聖誕劇を披露しました。その後私が福音のメッセージを語りました。みんな大変良く聞いてくれました。その後プレゼント抽選会もやって、みんな喜んでいました。予想よりたくさんの人が来て、食事が足りなくなるか心配しましたが、ちょうどぴったり、ギリギリで大丈夫でした。今まで祈りつつ毎週種を蒔いてきたタウンヨー族の人たちが、こんなにもたくさん来て福音を聞くことができ、本当に感謝でした。今後も続けてフォローアップしていく中で、彼らがイエス様をはっきり信じて、教会につながるように、どうかお祈り下さい。

12月19日から26日まで、マンダレー近くにある「グレース神学校」の学生たち22人が、伝道旅行にやって来ました。彼らと一緒に4日間、パオ族の村、インレー湖上のエンター族の村、タウンヨー族の村、そしてニャウンシェ町の近所の家々を1軒ずつ戸別訪問して、福音を語り、ガユナー教会に誘いました。それで25日のクリスマス集会には、合計180人以上の人が集まりました。教会近所の区役所の長たちも参席しました。前日に協力して作った臨時野外舞台の上で、学生たちが歌や踊りや劇などを見せて、福音を語りました。みんな関心を持って良く聞いてくれました。今回の一連の伝道期間を通して、合計48人が「イエス様を信じて受け入れます」という祈りをしました。タウンヨー族のド・ニューという主婦は、伝道に来た学生たちにこう話しました。「以前腰とひざが痛くて2週間ぐらい歩けなかったとき、韓国の先生（ソジョンのこと）たちが毎週来てイエスの御名で祈ってくれた。その後ある日夢の中で、白い服を着た人が現れて、私に話しかけてくれた。目が覚めたら、痛みがなくなって、歩けるようになった。イエス様のおかげだ。」私はこの証しを、後でその学生から聞いて知りました。とにかく今回のクリスマスは、今まで伝道したたましいの刈り取りの時となりました。学生たちはみなまだ若くて体力的、精神的にも大変でしたが、限界にぶつかっても祈りによって主の奇跡的な助けを体験し、それぞれ霊的に成長するときとなりました。主に感謝し、栄光をささげます。ハレルヤ！

34, ガユナー教会の成長

(1) 第2回青年セミナー

2018年3月19日から4月1日まで約2週間、ガユナー教会で青年セミナーが行われて、男16人、女11人合計27人の青年たちが教会に泊まり込みで参加しました。当初は教会内に住んでいる若者たち向けの弟子訓練コースの予定でしたが、インレー湖上のエンター族ゲラ村から未信者の青年たちがたくさん来たので、彼らに合わせて、わかりやすく聖書を教えました。講義はバザ先生と私(仁)、ソジョン、イエマッスエ先生(エンター族出身の教会献身者)の4人が交代して担当しました。午前中は聖書を教えて、午後は韓国語やギター、ダンスの教室も設けました。夕拝では、青年たちに賛美リードや説教を担当させました。また何人かの青年を近くのタウンヨー族の村に伝道に連れて行って、学んだことを実践するようにしました。このセミナーに参加した青年の中から、7人もの受洗者が起こされました。また既存の青年たちも、信仰が大きく成長しました。当初は2週間もできるかと色々と心配したのですが、無事に守られ、このような実を結ぶことができ、主に感謝しました。この青年たちが主にあって成長して、主の弟子、働き人として整えられていくように、どうかお祈り下さい。



(受洗した7人)

(2) テッアウンのお母さんの夢

6月14日から、毎週木曜日に、ニャウンシェ町から車で20分ぐらいかかる「イエードウエンジー村」に行き伝道するようになりました。この村は主にパオ族の村で、教会の青年チョーカインの故郷です。この村から現在、3人の青年(チョーカイン、その妹スーモントエ、そのいとこテッアウン)がガユナー教会の寮に来て、住んでいます。その青年の親たちはみんな未信者なので、私たち夫婦が毎週会いに行き、みことばを伝えているのです。子どもたちが寮でお世話になっているし、彼らが自分の親に良い証しをしているので、親たちはみな私たちをよく歓迎してくれます。その中の一人、テッアウンのお母さんが、先日こんな夢を見たと話してくれました。「私があるとき道で倒れていたけど、誰も助けてくれなかった。でもそこで、白い服を着て髪が肩ぐらいまである一人の方が来て、私の手をつかんで、引き起こしてくれた。」そう話した後、彼女は「それがイエス様なんですね。私はイエス様を信じます」と言うのです!! 私たちはとても驚き、また感激して喜んで「そうですよ。その方こそがイエス様です。イエス様があなたを救って下さるのですよ」と話しました。テッアウンのお母さんは、タウンヨー族

です！イエス様は、私たちの祈りに応えて、夢にまで現れて救おうとなさっているのです。すばらしい主のみわざを賛美します。これからも彼女たちがイエス様を信じて、村の家族親戚みんなが救われていくように、続けてお祈り下さい。



テァウンのお母さん（真ん中）



（イエードエンジー村の家庭集会）

（3）多くの受洗者

2018 年は、今までで一番多くの受洗者が与えられた 1 年でした。受洗者は合計 22 人、その内の 16 人はエンター族ゲラ村（インレー湖上の村）の出身で、その内 11 人が青年、5 人が主婦です。本当に感謝なことです。ガユナー教会のバザ先生が 10 年前からこのゲラ村への宣教をしている中で「ウー・トゥンイェン」という村の長老が信じてからは、その家族親戚が次々と信じるようになって、家の教会となっています。ウー・トゥンイェンの娘「イエマッスエ」は、神学校を卒業し、ガユナー教会の伝道師として奉仕しています。毎週日曜日には、20 人ほどがボートに乗って約 1 時間かけてニャウンシェ町に来て、ガユナー教会の主日礼拝に参加しています。ボートを毎回借りると料金が高いため、教会専用のボートが与えられるように、以前からずっと祈っていました。そうしたら、2019 年 1 月に私たちの所属する宣教団体 WUPM の紹介で、韓国のジンオク聖潔教会チームが来て、ボートのために約 30 万円を献金して下さい、新しいボートを買うことができました！全ての必要を満たして下さいる主を賛美します。このエンター族の家の教会が成長していくように、続けてお祈り下さい。



（洗礼式）



（与えられたボート。左がウー・トゥンイェン）

35、雄基が聖書学校へ

2018年6月7日から約8か月間、長男の雄基（15歳）はマンダレーにある「ハッピーファミリー聖書学校」で学ぶことになりました。雄基は以前から、自分の賜物である賛美やダンスを通して宣教したいというビジョンを持っていたので、それに合う道を探していました。この学校は、聖書や弟子訓練だけでなく、音楽や賛美リード、楽器演奏なども学べるので、雄基も行きたいと希望しました。それにこの学校は、私たちが15年前に最初にマンダレーに来たときからの長い付き合いで、スタッフの先生たちも雄基が0歳の頃からよく知っています。授業やレポートはミャンマー語で行うので、雄基がよくついていけるように、雄基がこの学校でよく学び、主の弟子、宣教者として訓練されるように、どうかお祈り下さい。

2019年2月8日に長男の雄基（ゆうき、16歳）が、マンダレーのハッピーファミリー聖書学校を卒業しました。昨年の6月に入学して、8か月で無事修了しました。成績は、学生34人中何と5位でした！ミャンマー語で学ぶので授業について行くのが大変だったと思いますが、よくがんばりました。聖書や弟子訓練だけでなく、音楽理論や賛美リード、キーボードやドラムなども習い、良い友達も与えられて、学校生活を楽しんでいました。雄基は「この学校を通して、主の臨在を体験し、主への初めの愛を回復できた」と証ししていました。家に帰ってからも、家族関係において成熟したことが感じられました。本当に感謝です。今は当分の間ガユナー教会で奉仕して、祈りながらこれからの進路を考えていきたいと思っています。雄基の今後の導きのために、ぜひお祈り下さい。



（雄基の卒業式）

36、祈りの家（ソジョン・記）

2016年に1年間日本に滞在していた時、近くのある教会が24時間祈りの家をしていました。私は時々その祈り室に通いながら、主との初めの愛を回復する体験をしました。また今の時期が、主の再臨が近づいている時であることに気がつきました。それで「ミャンマーに戻ったら祈りの家をやろう」と決心しました。今の新しい家を設計する時も、1階に集会ができる祈り室を設けました。幸い、周りは空き地で家がまだないので、いくら叫んで祈っても賛美を大きな音量で聞いても、苦情を言う人がいないのが感謝です。それで、朝の早天祈祷会は私と主人で始めて、昼は子どもたちも30分～1時間ほど、ホーム・スクールの1科目として祈らせてい

ます。もちろん私も祈りながら日々の再充電をしています。夜には家族祈祷会をやっています。その中で、長女の愛希が祈りに火がついて、祈ることが楽しくなったそうです。1 時間ほど祈る中で、神様から他の人のためにもとりなし祈るように示されるそうです。それである時「一人で祈るのはもったいない、共にこの喜びを分かち合いたい」と思って、教会の親友であるスーモントウェ（チョーカインの妹、15 歳、受洗後 1 年）を誘って一緒に祈ったりしています。それから、毎月最初の月曜日は、ガユナー教会のリーダーたちの断食祈祷会を、8 月から始めました。みんな涙を流しながら祈ったり証したりして、大変盛り上がり励まされました。この祈りの家がますます祝福されるようにお祈り下さい。私自身祈りの家を始めてから、主との交わりの喜びが回復しています。これがあるからこそ、主の働きができると実感しています。最近思いがけない方法で、このミャンマーでの未伝道部族宣教も徐々に門が開かれているのを感じます。主は素晴らしいです。今は主の再臨を待ち望み、備える季節であることを覚えて、大いなる収穫を期待します。

3 7、ガユナー聖書学校、1 か月間の熱い闘い

2019 年 4 月 1 日から 28 日までの 4 週間、私たちの教会で、青年たちを対象に「ガユナー聖書学校」が開かれました。全期間参加した学生は男が 5 人、女が 12 人の、合計 17 人でした。タウンジーの教会からも 3 人が参加しました。学生を 2 部に分けて、リーダークラス 9 人、基礎クラス 8 人としました。リーダークラスのうち 6 人は、受洗してまだ 1 年位でしたが、礼拝説教や小グループ聖書学びの司会などを初めて任されて、よく頑張っていました。基礎クラスも熱心に学び、この期間中に 2 人が受洗しました。毎週金曜日には 2 クラスとも村に伝道に出かけて家々を訪問し、救いの体験を証しました。毎晩の礼拝では、学生たちがみんな 1 人ずつ賛美リードを担当しました。講義は主任牧師のバザ先生が「福音と救い」、私（仁）は「弟子訓練と教会開拓」「聖書的世界観」、ソジョンは「聖霊と祈り」、イエマッスエ先生（エンター族の独身女性教職者）は「子ども教育」「奉仕者の生活」など、それぞれの賜物に合った科目を担当しました。2 月に聖書学校を卒業したばかりの息子雄基（16 歳）も、音楽理論、新曲練習、ワーシップ・ダンス、キーボード、賛美リードなどを教えました。雄基は学校の総務スタッフとして、朝の礼拝司会、暗唱聖句のチェック、奉仕グループの調整、賛美チームの訓練など、学校の事務全般を熱心によくやりました。夜の礼拝で雄基が祈りの導きを担当したとき、聖霊の臨在が流れて、1 時間以上もみんなが泣きながら互いに祈り合ったこともありました。授業の最後の日の夜には洗足式を行って、みんな聖霊にタッチされて泣いて祈り、主の弟子として献身するときとなりました。ミャンマーで一番暑いこの季節の中、4 週間ずっと教会に宿泊しながら、一日中びっしりの日程で、教える方も学生も大変でした。でも、この 1 か月間で、青年たちは大きく変えられて、霊的に成長しました。本当に、思った以上の収穫でした。この学校を導いて下さった主に感謝して、主に栄光をおささげします。



(仁のリーダークラス講義)



(ソジョンの祈り)



(ワーシップ・ダンス)



(洗礼式)



(洗足式)



(熱い祈り)



(卒業式)



(主日説教する仁)

「使徒の働き」セミナー

2019年10月3、4日（木、金）に、ガユナー教会で「使徒の働き」セミナーを開催しました。これを始めたきっかけは、このようでした。韓国のサミル教会のイ・ヨンヒ先生が毎年2回ミャンマーに来てセミナーをしていて、私はその通訳をしていたのですが、その先生が書いた本「使徒の働きの学び」のミャンマー語翻訳版がとても良くできていたので、それを私がガユナー教会のバザ先生に差し上げました。そうしたら、その本を見たバザ先生はすぐに、「この本を使って学び会をやりましょう」と言ったのです。それで急に、本をもっと注文して、私が講師となって、ニャウンシェ町近郊の牧師や神学生を対象にセミナーをやることになりました。ところが、その後が大変でした。まずは急にソジョンが乳がんの手術と治療のために韓国に行かなければならないので、ミャンマーの家で私と子どもたち5人が家事全般をやることになったこと。そしてそんなときに限って、私がインフルエンザにかかり、熱を出して4日間、そのセミナー直前まで寝込んでいたことです。こんな状況でできるのだろうか、中止しようか、何度も考え、バザ先生とも相談しました。でも、最後まであきらめないで、直前まで様子を見て決めよう、ということになりました。セミナー当日、まだ熱が少しあったのですが、体力が大分回復していたので、必ず治るという信仰によって家を出発しました。教会に着いてセミナーを始めたら、予想よりも多く18人もの方が来ました。2日目には、その他に12人も神学生たちが加わりました。2日間合計30人も参加者が与えられました。セミナーの内容は、本と一緒に読んで私が説明した後、参加者が2人ずつ組になって、本の内容に関する質問に答えて、一緒に話し合う、というスタイルで進行了。私一人が講義するのではなくて、全員参加型で学ぶので、みんなが関心を持って、とても積極的に話し合いに参加しました。普段はあまり人前で話さないような人も、だんだん発表できるようになりました。2日間で「使徒の働き」の本1冊を全部学び終えることができました。参加者たちも、「使徒の働きの中の出来事が、今日の自分の宣教活動に対する励ましとチャレンジになった」と言っていました。そして私の体調も、セミナー後にはすっかり治っていました！本当に感謝です。今後も、このようなセミナーを続けて開催できたらと考えています。全てを守り、導いて下さった主に、栄光をお返しいたします。



（「使徒の働き」セミナー）



（ソジョンがミャンマーの人々にいやしの祈りをする）

38, ソジョンの手術とその後

2019年8月に、ソジョンの左の胸の奥に痛みがあって、しこりがあったので、近くの病院で超音波検査をしましたが、はっきりしたことは分かりませんでした。それで、9月2日に急きょソジョン一人で韓国のプサンに帰り、検査することにしました。そうしたら、乳がんの第3期であり、脇まで転移していることが分かりました。それで9月16日に手術を受け、左側全摘出となりました。3週間ほど入院し、退院した後も、ソジョンの両親の家に住みながら、3週間に1回ずつ、その病院で抗がん剤治療を受けることになりました。その病院はクリスチャンの病院で、宣教師は全て無料で治療を受けられるのには驚きました！場所も実家から歩いて15分。まさに主の備えでした。ソジョンの両親も、娘のために全面的に世話して下さいました。ソジョンは自分がガンだと知ったとき、精神的にショックで一週間ほどはよく眠れなかったとのこと。しかし、病院の中にある礼拝堂で祈ったり、多くの方々が祈って慰めて下さったりしたおかげで、少しずつ心の平安を回復していきました。

ところで、ソジョンはミャンマーにすぐに戻れると思っていたのが、思いのほか韓国滞在が長くなることがわかりました。ミャンマーで私（仁）と子どもたち5人は、母親がいなくて大丈夫だろうか、と思いました。特に末っ子の美香はまだ5歳で、さびしがるのではないかと心配しました。しかし、子どもたちは、こんなときこそと思って、危機感を持って頑張りました。私が思ったよりもずっとしっかりしていて、食事作りや買い物、皿洗い、掃除、洗濯まで、家事を5人で分担協力して、よくやってくれました。この期間を通して、子どもたちが大きく成長したようです。私も夫と父親として試練のときでしたが、毎日ソジョンと電話で話して励まされながら、何とか乗り切ることができました。本当に、主と家族に感謝します。10月7日から23日には、私と子どもたちは韓国に行って、家族の再会と交わりを喜び合いました。ソジョンは韓国で抗がん剤治療を受けた後、2020年1月22日に無事にミャンマーの家に戻って来ました。ソジョンが家を離れてから約4か月半後、やっと家族7人そろって過ごすことができ、ほっとしました。子どもたちも大喜びです。ソジョンはその後食事療法などで治療を続けており、今は体調も良く元気です。ソジョンの健康回復のため、どうか続けてお祈り下さい。

39, 雄基の神学校入学と、日本への一時帰国

雄基（ゆうき）は2019年2月に、ミャンマーのマンダレー市でハッピーファミリー聖書学校（8か月コース）を卒業した後、ニャウンシェ町の家に戻って、ガユナー教会の青年会リーダーや賛美、ダンスなどで奉仕しながら、将来の導きを求めて祈っていました。そんなとき、2019年7月に北海道石狩市にあるCFNJ（Christ For the Nations Japan）聖書学院の短期宣教チームがミャンマーに来て、雄基は彼らの通訳として奉仕しました。CFNJは、実は10年前の2009年にも一度、ミャンマーの私たちの所に短期宣教に来たことがあります。その時、雄基は7歳でしたが、そのときから彼は「将来CFNJに入って学びたい」と思っていました。10年後、ミャンマーで再会したとき、雄基は鍛冶川校長先生ご夫妻と相談して、CFNJに入学したいと言うと、先生は快く許可して下さいました。それで、2020年4月に入学しました。期間は2年

間ですが、上級コースを希望する人はもう 1 年学ぶことができます。新入生は雄基を含めて 9 人で、全体学生数は 21 人です。その学校は、賛美礼拝が活発で、ダンスや演劇の学びもあり、雄基にはぴったりです。雄基は仲間たちと学校生活を大いにエンジョイしています！雄基の学びと成長のために、ぜひ続けてお祈り下さい。



CFNJ 聖書学院の入学式（雄基は後列左端）

2020 年 3 月 17 日から、私（仁）は雄基と 2 人で、日本に一時帰国しました。そして雄基を北海道の CFNJ 聖書学院に無事に預けた後、私は 4 月 2 日にはミャンマーに戻る「はず」でした。ところが、新型コロナ・ウイルスの影響で、飛行機がミャンマーに飛ばなくなってしまったのです！それで私はとりあえず、茨城県の両親の家に滞在することになりました。そこでコロナが収まるのを待っていたのですが、2 か月半たってもミャンマー政府が外国人の入国許可を出しません。ソジョンは子どもたち 4 人とミャンマーで生活しながら、コロナの影響もあり、宣教活動に色々と限界がありました。そのような中で私たちは考えた結果、ソジョンと子どもたちは全員一旦日本に帰ることにしました。ヤンゴンからソウル経由の大韓航空で、6 月 23 日に成田空港に到着しました。子どもたちは日本国籍なので帰国できるし、ソジョンも永住権ビザを持っているので、問題なく日本に入国できました。それでも飛行機が着陸後、出て来るまでに 3 時間以上もかかって大変でした。私もやっと、約 3 か月ぶりに家族に会えて安心しました。茨城県の実家で 2 週間滞在した後、四国香川県さぬき市の津田に移動しました。ここは以前 2016 年に一年間、私たち一家が津田キリスト教会に通い、子どもたちもその教会内のチャーチ・スクール「クリエイト」でお世話になった所です。今回も子どもたち 4 人、愛希（あき中 2）、聖治（せいじ小 6）、光児（こうじ小 3）、美香（みか小 1）は、クリエイトに入って楽しく学んでいます。私たち夫婦も、この教会で学んだり奉仕したりしながら、ミャンマーに戻るのを待ちたいと思います。この日本滞在が祝福され、霊的にも充電して、主が門を開くそのときに、再びミャンマーに戻る事ができるように、どうかお祈り下さい。

コロナとクーデター・・・ミャンマーの現状

2020 年 4 月から、ミャンマーでもコロナの影響で、外国人の入国が制限されるようになりました。国内の感染者も増え続けています。それに加えて、2021 年 2 月には軍部によるクーデターが発生しました。連日のデモに対する弾圧によって多くの死者が出て、今ミャンマーの治安は極端に悪くなっています。私たちが協力しているバザ牧師先生に、私も時々連絡しています。先生によると「ニャウンシェ町にも軍隊が来ていて、銀行やインターネットは制限されており、夜間の外出を避けている。ガユナー教会は今のところ大丈夫だが、公立学校は閉鎖しているので、学生寮の子どもたちはみな実家に帰して、集会も控えている」とのことです。このような

ミャンマーの厳しい現状を考えると、当分の間私たちがミャンマーに戻るのには難しく、しばらく長期間日本に滞在しなければならない状態です。最初はコロナで戻れなくなったのですが、今はむしろ、主がこの時期には日本で宣教するように私たちを導いておられる、と感じています。今は日本で主に仕えることを御心として喜んで受けとめつつ、いつかミャンマーに戻る「主の時」を待っています。これからミャンマーがどうなっていくのか全くわかりませんが、私たちとしては祈りながら、主の御手にゆだねるだけです。ミャンマーの自由と平和が回復し、本当の民主化がなされ、ミャンマー宣教を再開できるように、どうか一緒にお祈り下さい。

40、WUPM Japan は、こうして始まった。

私（仁）は、2023年2月1日から15日まで韓国に行って来ました。そして、私とソジョンの所属している宣教団体 WUPM（世界未伝道部族宣教会）の宣教センターを訪問しました。久しぶりに WUPM 国際代表であるチョー・ジャンヨン先生や事務局長のソ・スンモ先生とお会いして、最近の報告や、色々な相談、今後のことなどを話しました。その日の夕食の後で、チョー先生は私に「後で少しお話がありますので、私の事務室に来てください」と言いました。私は「一体何の話だろうか」と思って、内心ビクビクしながら、事務室へ行きました。すると、チョー先生はこう言いました。「昼に伊藤先生と色々話した後、祈っているうちに、伊藤先生が日本で WUPM 日本支部を立ち上げたらどうか、と示されました。伊藤先生は、日本に滞在している間、各地の地域教会を巡回して宣教者を募り、日本の教会が世界宣教に出て行くように動員する人、モビライザー（Mobilizer）となってください。私はここで、伊藤先生を WUPM Japan の代表に任命します。いいですか？」・・・私はもう、びっくり仰天！！あまりに突然なことで、何と答えたらいいのかわからないうちに「ええ・・・その・・・はい、分かりました！」と言って、その場ですぐさま「任命」されてしまいました。私は最初はとても驚きましたが、だんだん感謝、感激、喜び、希望、平安がわき上がって来ました。そして、心の中で、こう主に告白しました。「主よ、こんな私が、いいのでしょうか？でも、これが主から出たことなら、喜んで導きに従います。」そのとき私は思い出しました。「そういえば、私はずっと前から、そのビジョンを持っていたっけなあ・・・。」そうです。私は日本の教会、クリスチャンが世界宣教に出て行くことを以前からずっと訴えて来ていました。それによって、今まで多くの方々がミャンマーに短期宣教に来てくださり、その中から長期宣教師も起こされました。しかし、色々なことがあって、私はそのビジョンを見失い、忘れかけていたのです。そんな私に、主はもう一度ビジョンを示してくださり、背中を押してくださいました。今回のことを通して、主は私に「もう一度立ち上がりなさい。あなたは本来そういう人なんだよ。」と語ってくださったのです。主の私に対するビジョン、召命、ご計画は、変わることがありません。（ローマ 11:29）その主のビジョンを、私が信仰をもって見続けるときに、それは私の人生の上に必ず実現すると確信し、今ここに宣言します。どうか主よ。あなたのビジョンが私の上に、そして日本と世界の上に成就しますように。そして主のくださったその使命に、私が最後まで忠実に歩み続けることができますように。

開け！ミャンマー

この度、私は WUPM Japan を立ち上げましたが、それでミャンマーに行かなくなったのではありません。再びミャンマーに住んで宣教活動できるように、今も祈り続け、機会を見計らっています。ただ、北海道への引越しや、妻ソジョンの健康、子どもたちの教育など、様々な要因を考えた上で、当分の間は日本をベースとして活動する、と決めたのです。もちろんこの期間中に、短期宣教旅行として、ミャンマーやタイ（ミャンマーとの国境沿いにいるミャンマー人避難民の所）などに行くことも計画しています。日本とミャンマーを行ったり来たりして、かけ橋のような働きをする予定です。ミャンマーは現在、治安が悪化し、長期ビザ取得も難しく、コロナによる入国制限もあります。このような状況が今後どのように変わっていくか、私にも全く分かりません。しかしミャンマー宣教は、決してあきらめません。今までとは違うやり方、様々な宣教スタイルを模索していきます。

今まで私たちが協力して来たミャンマー人牧師バザ先生とガユナー教会は、現地で困難な中でも続けて宣教しています。先日は、未伝道部族であるタウンヨー族出身の青年テッアウンが、8 か月コースの聖書学校を卒業しました。これからは、ガユナー教会で働き人、また故郷の村への宣教者として活躍するでしょう。また、ガユナー教会では定期的に伝道集会や聖書セミナーを行っていて、受洗者が起こされています。本当に感謝です。私たちはこれからも、バザ先生といつも連絡を取りながら、協力を続けていきます。WUPM 本部では、現地教会を通して、困難の中にあるミャンマーの人々に食糧米を支援する「愛のコメ贈呈運動」をしています。このような状況にあっても、ミャンマー宣教は前進しているのです！ミャンマーに関する世の中のニュースを見て、決して悲観的にならないでください。この世界を神様の視点で見てください。ミャンマーのために祈るときには「開け！ミャンマー」と命令して宣言してください。祈りは世界を変えます。神の御国は攻め取るものです。どうかこれから、ミャンマー宣教の大逆転と爆発的リバイバルのために、引き続きお祈りください。

おわりに

ここでは 2003 年から 2020 年までの、私たちのミャンマー宣教 17 年間と、その後 WUPM Japan を立ち上げるまでを 1 冊にまとめました。当時のニュースレターを編集したので、文章が過去形ではなく現在形で書かれている所もありますが、ご理解ください。何とも中途半端な感じで物語が中断していますが、この後も主は私たち家族を真実に導いてくださっています。私たちの宣教物語は、今でも現在進行形です！その後どうなったのかは、続編に詳しく書きたいと思います。どうしても続きが早く読みたい、という方は、WUPM Japan ホームページのコラム欄をご覧ください。

(URL) <https://wupmjapan.kyokai.jp/category/column/page/4/>

「神よ。あなたは、私の若いころから、私を教えてくださいました。私は今もなお、あなたの奇しいわざを告げ知らせています。年老いて、しらがになっても、神よ、私を捨てないでください。私はなおも、あなたの力を次の世代に、あなたの大能のわざを、後に来るすべての者に告げ知らせます。」

(詩 71:17-18、新改訳第 3 版)

付録

- 1, 本当の友達
- 2, 宣教への導き
- 3, 降りていく愛
- 4, 救いの証し（ソジョン・記）
- 5, 宣教師への召命の証し（ソジョン・記）
- 6, 宣教は大変？
- 7, あなたは宣教者タイプ？！チェックテスト
- 8, 宣教のハードルを下げる
- 9, ミャンマー語、これだけ知っていれば大丈夫！
- 10, 伊藤仁 略歴
- 11, 伊藤ソジョン 略歴

本当の友達

私は以前から、色々な友達とつき合うのが大好きでした。建前だけでなく、本音で何でも語り合える友達関係を大切にしたい、といつも思っていました。人生で一番大切なのは、人間の変わらない愛だ、と信じていました。それで、大学に入ったとき、たくさんの友達を作りました。友情を深め合い、充実した日々でした。しかし、あるときちょっとしたことから、一人の親しい友人と仲たがいになり、互いに口もきかなくなってしまうしました。私はショックでした。

「人間の愛なんてこんなものか。結局信じられるのは自分だけだ」と思いました。しかし、その自分さえも、いつも移り変わりが激しくて、信じられなくなりました。恋人も作ろうとしたけど、うまくいきませんでした。そして家族の愛さえも、永遠ではなく、いつかは別かれてしまうときが来る、ということを知ったとき、私は人生に失望しました。私の心には、どうしようもないむなしさと、さびしさで一杯でした。自分の人生を変えようといくらがんばってみても、どうすることもできませんでした。

そんなとき、私の友人の一人が「教会に来てみないか」と誘いました。私は全くの無宗教だったので、最初はちょっととまどいました。でもその友人がとても良い人だったので「彼が言うのなら、一度見るだけ見てみよう」と思って、一緒について行きました。教会に着いたら、みんなが私を熱烈に歓迎してくれたので、びっくりしました。そしてみんなが私の名を知っていて、「あなたが伊藤さんですか。ずっとあなたのために祈ってましたよ」と言うので、もっとびっくりしました。「まだ顔も見たことのない人のために祈るなんて、この人たちは一体何者なんだろう」と思いました。そして、教会のみんなが、まるで家族みたいに一つになって互いに愛し合っているのを見て、「ここには何かがあるに違いない。私もそれが知りたい」と感じました。そのうち、ある一人が「一緒に聖書を学んでみませんか」と私に呼びかけました。「救い主イエス・キリストを信じて心に受け入れるとき、神様の愛を体験し、人生が変わる」とその人は教えてくれました。私は最初はよくわかりませんでした。でも、「何事もやってみないとわからない。やってみて良かったら、それでいいではないか」と思いました。それで彼と一緒に、その場で「イエス・キリストを信じて、私の心の中に受け入れます」と祈ったのです。1993年、大学3年生のときでした。

それから後、私の人生は180度変わりました。毎週教会に通い、一緒に賛美を歌い、聖書を学び、みんなと交わりを続けていくうちに、少しずつ、でも確実に、私の心は変わっていききました。今までのむなしさ、さびしさから解放されて、喜びと幸せで一杯になりました。生きているキリストの愛が肌で感じられました。心が平安で満たされました。人生に目的と生きがいを持ち、確信と希望を持つようになりました。キリストの決して変わらない愛で心満たされたので、他の人をも愛し受け入れることができるようになってきました。そして「この私を変えたキリストとの出会いを、私と同じように悩んでいる他の友人たちにも伝えたい」と願いました。高校時代からの親友に、このことを話しました。彼はとても驚き、最初は受け入れませんでした。しかし私は「私が体験したこの愛を、一緒に味わってほしいんだ」という私の気持ちを、くり返し説明しました。後になって、ついに彼もキリストを信じ受け入れました。私は「やっとわかったんだね」と言って、2人で涙を流して喜び合いました。彼も人生が変わりました。

以前はいつも悩んでばかりだったのが、人生の答えを見い出して、表情も明るくなってきました。私は驚きました。キリストの愛の力は、私だけではなく、他の人の人生をも変え、救うことができる、ということを見たからです。そして私は、このすばらしいイエス・キリストの永遠の愛を人々に伝えることを、私の人生の使命にしよう、と決心したのです。

あなたを創造した唯一の父なる神様は、あなたを心から愛し、あなたの人生の友になりたいと願っておられます。しかし私たちがこの神様の愛を拒み、離れるとき、神様の心は傷つき、悲しみます。そして私たちの人生もむなしく、さびしい、愛のない人生となってしまいます。自分の方法や良い行いでいくらがんばっても、全くうまくいきません。しかし、このような罪の状態から私たちを救うために、神の御子イエス・キリストがこの世に來られ、私たちの身代わりとなって、十字架について死んで下さいました。そして復活して、罪と死とサタンに勝利しました。このイエス・キリストは、やがて再び天から來られて、この世界を愛と正義をもって治められます。この救い主、王なるキリストを信頼して、人生の友として心に受け入れるとき、あなたの人生は変わります。罪の心がきよめられ、永遠のいのち、天国の希望が与えられます。キリストがあなたの心の友となり、いつも一緒にいて下さいます。決して離れず、決して見捨てません。だからもうさびしくありません。この親密な友情関係によって、心に安らぎが來ます。他の人との人間関係も、回復するようになってきます。そして、このキリストの永遠の愛の力によって、どんな困難や問題にも立ち向かい、勝利することができるのです。聖書にはこう書いてあります。

「人がその友（あなた）のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。（ヨハネ 15 : 13）

「しかし、私たちは、私たちを愛して下さい方（キリスト）によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。」（ローマ 8 : 37）

この「本当の友達」であるイエス・キリストを、私はあなたに紹介したいのです。なぜなら、あなたは私の愛する友だからです。友だからこそ、最も良いものを、あなたにもお分かちしたいのです。ぜひ、このイエス・キリストを信頼して、あなたの心の友として受け入れて下さい。そうすれば、キリストはあなたの人生に愛と勝利を与えて下さいます。

宣教への導き

1、人生の目標

私が大学生のとき、一番の悩みは何か、というと、「将来、どの道へ？」という問題でした。公務員試験、政治運動、留学、・・・色々な道にチャレンジしてみましたが、どれ1つうまくいきませんでした。自分の本当にやりたいことが何なのか、わかりませんでした。私は、「これだ！」といえるような、やりがいのある仕事がしたい、と思いました。「たった一回の人生、無駄にしたくない。命をかけても惜しくないような、情熱を燃やせる、価値のある目標、人生の

ビジョンがほしい」と心から願いました。しかし、どうやってもそれを見つけることができませんでした。そんなとき、大学のある友人に誘われて、教会に行きました。そこで、聖書の中の、イエス・キリストの福音について聞きました。私はその場で、キリストを自分の救い主として、信じて受け入れました。そのときから、私の人生は180度変えられました。キリストの愛を体験して、うれしくてうれしくてしかたがありませんでした。「私の人生は、神様が治め、導いて下さる。その最終目標は天国である。私は今、自分のためではなく、キリストのために生きるんだ」ということがわかったとき、心は平安と希望に満ちあふれました。そして、この人生を主イエス・キリストのためにささげます、と言って、献身を決心したのです。

2、召命のみことば

その後私は、その人生の目標に向けて、今何をすべきなのか、人生の具体的なビジョンを求めて、真剣に祈りました。そして、聖書を通読していたときに、イザヤ49:6のみことばが、心に響いてきました。「ただ、あなたがわたしのしもべとなって、ヤコブの諸部族を立たせ、イスラエルのとどめられている者たちを帰らせるだけではない。わたしはあなたを諸国の民の光とし、地の果てにまで、わたしの救いをもたらすものとする。」

このみことばを読んだとき、「あっ、これは主が今私に語りかけているんだ!」とわかりました。私はその場でひざまずきました。そして主にこう応えました。「主よ。こんな私を、日本だけではなく、世界へ、地の果てまでも遣わして下さい、というのですか。どうか御心のとおりに、私を用いて下さい。」そう言って、涙を流しながら主に告白したのでした。1994年8月12日のことでした。・・・それまでの私は、献身は決心していても、いわば志願兵で、自分の熱心だけでした。しかし、このみことばによって、主からの召しを確信するようになりました。このみことばは、その後ずっと私の人生の中で、困難にぶつかったり、挫折しそうになったりするたびに、私を支えて、再び立ち上がらせる決定的なみことば、忘れることのできない、主からの約束のみことばとなりました。

3、自分の賜物を知る

そのうちに、私はこの「宣教師」という仕事が、本当に主が私のために備えている仕事だ、とますます確信するようになりました。私は小学生のときから、世界地図を見るのが大好きで、高校生用の地図帳を買ってもらって、それを全部見ながら、世界中の国と都市の名前を覚えるのが趣味でした。大学に入ってから、国際交流のサークルに入り、アジアからの留学生と仲良くなりました。特に韓国に関心を持ち、韓国人の友達と会話しながら、独学で韓国語を熱心に習いました。また、以前は政治運動に関心を持っていて、駅前で、街頭宣伝車の上からマイクを握って演説したり、ビラを配ったり、大学で集会を開いたりした経験がありました。そして、色々な新しい人と知り合いになって、おしゃべりするのが大好きでした。そのような経験が、クリスチャンになってから、伝道するときに大いに生かされました。私は伝道しているときがとても楽しくて、喜びとやりがいを感じ、又自分がそれに向いていることを知りました。そして、主が私に与えて下さっているこの賜物を用いて、主に仕えていくときに、主が私を通

して実を結ばせて下さることを体験できました。

4、何でも体験する

しかし、自分の得意な分野だけをやるのではなく、苦手なことや、やったことのないことも、色々とやってみることが大切だ、ということも知るようになりました。神学校に入って、寮生活をしながら、自分と全くカラーの違う人たちと付き合うのに、とても苦労しました。奉仕教会では、日曜学校の子どもたちと体で遊び、または、お年寄りの方々の昔話をずーっと聞きました。それは私にとって本当に「異文化理解」の訓練でした。そうじ、皿洗い、車での送迎、引越しの手伝いなど、色々なことを体験しました。特に短期伝道旅行に行ったときは、チームのメンバーと一致して働き、新しい環境に適応しつつ、現地教会のニーズに応じていく、という、良い訓練のときとなりました。その中で、しもべとして仕える、ということの大切さを学ぶことができました。

5、御心を見分ける

神学校の卒業が近づくにつれて、卒業後、私はどの道に行くのが主の御心なのか、ということがわからなくて悩みました。何もしないでじっと待っているだけではわからない、と思って、色々な道を探ってみました。しかし、主の御心よりも、自分の思いばかりが先行していました。海外に行って訓練を受けようと思いましたが、道が開かれませんでした。それで、日本のどこかの教会で教職者になるように、紹介してもらおうとしましたが、うまくいきませんでした。次に、奉仕教会の先生に「ここで使って下さいませんか」とお願いしましたが、「あなたは世の中で働きながら訓練を受けたほうがいい」とアドバイスを受けました。最後に私は、自分の母教会に帰って、先生に「どうかここに置いて下さい」と頼みました。先生は、快く受け入れて下さいました。そこで私は、朝6時から昼の3時までは食堂でアルバイトをして、夕方からは教会で夜遅くまで奉仕する、という生活となりました。経済的に大変で、肉体的にもとても疲れましたが、心には平安がありました。「ここは主が導いて下さった、御心の場所だ」という確信がありました。このような一連の体験の中で、御心が何か見分けるということ、自分の思いや固定観念を一旦棚に上げること、自分勝手な思い込みや判断をしないこと、導きがあるまで待つこと、そしてこれが御心だと確信したときには、たとえ大変な道でもそれに従うこと、などを学びました。

6、霊的指導者に相談する

御心を見分けるときに大きな助けとなったのは、自分の霊的指導者に相談する、ということでした。困ったとき、どうしたらいいのか判断がつかないときには、母教会の先生に相談して、アドバイスを求めました。先生はいつも、私のために祈ってくれて、全体的、長期的な目で見て助言し、励まして下さったので、本当に助けられました。そして、先生が同意し、すすめてくれるときは、主からのGOサインと見て、進みました。そうするとき、良い結果がありま

した。逆に、先生の同意がないときは、動かずにいました。それで、色々な危険や失敗から守られました。この母教会での奉仕のときは、霊的指導者の指示に従順する、ということの訓練でした。そうするなかで、ビジョンというものは、自分個人のものではなく、共同体全体のビジョンの中の一部であること、その全体のビジョンに従うときに、自分だけでなく、共同体全体も祝福を受けることを学びました。

7、出会いを求める

私は以前から、結婚について祈り求めています。しかし、自分の考えで勝手に行動するときに、うまくいかず、ひどい挫折を味わいました。その痛みの中で、「主よ、もう御心なしには何もしません。結婚も主にささげます。どうぞ御心のとおりにして下さい。」と祈りました。その約半年後、私は母教会の先生に、あるレストランに急に呼び出されました。そこで待っていると、先生と、同じ教会のソジョン姉がやって来ました。そして先生は、「2人、よく似合うから、付き合ってみるよう。」と言って、私たち2人を置いて、その店を出て行ってしまいました。彼女は、韓国から留学に来て、日本でイエス様に会い、就職して、教会ではスタッフとして奉仕していました。私は、彼女のことを以前から知っていましたが、結婚相手としては、正直言って一度も考えたことがありませんでした。しかし、その日彼女と2人で個人的に話し合ってみると、とても不思議な安らぎを感じました。2人は話が盛り上がり、小さい頃の話から将来のビジョンまで、夢中になって話し、2〜3時間があっという間に過ぎてしまいました。その店を2人で出るときには、「この人こそ御心の人だ！」という確信がありました。6ヶ月の交際の後、私たちは、教会のみんなの祝福の中で、結婚式を挙げました。本当に、主への感謝と喜びで一杯でした。彼女もやはり、以前から世界宣教のビジョンを持っていたので、私たちは、2人で宣教師となって出て行く日を夢見ながら、毎晩手を取り合って、「主よ。私たちを遣わして下さい」と祈りました。同じビジョンを持って共に歩み、心から愛し合える人生のパートナーに出会えたことは、この上もない幸せ、主からの最高のプレゼントでした。

8、荒野学校

しかし、その後すぐに道が開かれたわけではありませんでした。八方ふさがりで、先が全く見えなくて、何もない荒野でぐるぐる回っているように思える日々が続きました。牧会と教会奉仕の中で、自分の限界を感じ、壁にぶつかっていました。しかし、この「荒野学校」は、主からのテストを受けて、自分の中の高慢が砕かれ、謙遜にさせられる課程でした。この荒野の中で、人間的に頼るものが何もなく、主とのみことばだけに拠り頼むようにされました。この時期、私を支えたのは、やはり最初の召命のみことば、イザヤ 49:6 でした。ある夜、私は会堂に一人残って、主と格闘して祈りました。「主よ。あなたは、あの日あの時、このみことばを持って、私にはっきり約束して下さいではありませんか。あなたの約束のとおり、成就させて下さい。私はこの宣教のビジョンを、どうしてもあきらめることができません。他の道は、考えることができません。私の祈りに応えて下さい。あなたが応えて下さらない限り、私は今夜家に帰りません！」何時間も何時間も叫んで、床をたたいて、涙を流して祈り続けました。……

祈り疲れて、床に大の字になって寝ながら、一人でぼーっとしていたとき、急にこのみことばが示されました。「わたしを呼べ。そうすれば、わたしはあなたに答え、あなたの知らない、理解を超えた大いなる事をあなたに告げよう。」(エレミヤ 33:3) それは、主が私の心に「もうわかったよ」と静かに語って下さったかのようにでした。私は心に平安を取り戻し、喜びをもって家に帰りました。私は、「主の時」が来るまで、あきらめずに、忍耐と信仰をもって待ち続けることに決心しました。

9、「どこへでも行きます。何でもします。どうか使ってください。」

その頃私は、牧師をしてはいたものの、燃え尽きて、霊的ダウンの中にいました。私が導くときいつも問題が起こり、一生懸命やればやるほどうまくいきませんでした。そのような中で、教会側から「先生、どうか何もしないで、しばらく休んでいて下さい」と言われました。私は日曜日、教会に行っても、説教もせず、何もしないでただ座っているだけで、礼拝の最後になって、祝祷だけをするという、名前だけの牧師でした。とてもみじめな思いで、教会に行くのがつらくてたまりませんでした。……でも私は、「何かがしたい。どんな仕事でもいいから、何か役に立ちたい。」そう思って、会堂の玄関と、前の道のそうじを始めました。日曜日の朝早く、まだ誰も来ていないうちに会堂に着いて、一人で竹ぼうきを握って、心を込めて、こう祈りながらそうじしました。「主よ。私は何をやってもダメな牧師です。でも、こんなボロボロな私だけど、主を、ただあなたを愛しているので、あなたのからだである教会のために、何かお役に立ちたいのです。どこにでも行きます。何でもします。どうか、どうか使ってください！」……私はそのときの思いを、一生忘れることはないでしょう。そのようにして、涙を流して主に告白しながら、賛美しながら、毎週毎週そうじをしたのです……。

……そんなある日、教会にあるミャンマー人の牧師先生が訪れました。彼と二人でミャンマーの宣教事情などについて色々話しているうちに、私は彼にこう言いました。「実は私も、前から世界宣教のビジョンがあるんですよ。」すると、彼は言いました。「じゃあ、あなたがミャンマーに来ればいいですね。」私は、建前だけの、礼儀上の言葉で、「そうですね。行けたらいいですね。」と答えました。しかし、このことを知った教会側は「それはいい考えですね。どうぞどうぞ、すぐに行ってください。」と言いました。そして、その日のうちに「教会として先生をミャンマーに派遣します。」と「決定」してしまいました。そして、そのミャンマー人の先生の帰国日に合わせて、3週間後には、私は飛行機に乗って、彼と一緒にミャンマーへと飛び立って行ったのです。2002年12月2日のことでした。あまりに急なことで、私は飛行機の中で「これは夢ではないか」と思ったほどでした。しかし、そのとき私は思い出したのです。「これは、8年前の約束を、主が今成就させて下さったんだ。主はあの約束のみことばを実現させて、この私を宣教師として下さったんだ。」夢にまで見た宣教師！ その夢がやっとかなった。しかも、こんな形で。こんなすごい導きで。主は何てすばらしいんだろう！主が一番良い時に、一番良い方法で、道を開いて下さったんだ。そう思って、私は主に賛美して、感謝の涙が止まりませんでした。

ミャンマーに来て、大変なことがたくさんありました。ミャンマー語は全然話せない。文化も何も知らない。一日中停電。40度を越す暑さ。蚊と病気。生後5ヶ月の息子の世話など、毎日生きるのが戦いでした。しかし、私の心には、主への感謝と「こんな私でさえ、主は用いて下さるんだ」という喜びであふれていました。このミャンマーで、私は霊的に回復され、いやされました。主への「初めの愛」を取り戻しました。何かあるたびに、私はいつも、あのときの心を思い出しました。「どこへでも行きます。何でもします。どうか使ってください。」……この、主を愛する心、主のためなら、何でも喜んでやります、という純粋な思い、その愛する主にお仕えしたいという情熱。これがあるとき、どんな困難や問題にぶつかっても、それを乗り越えていくことができました。この心があるなら、どの道に行っても大丈夫、行ったその所が祝福される、という平安と確信がありました。「どの道に行くか」が大切なのではなく、それよりも、もっと大切なこと、それが、この「主を愛する心」。この心こそが、今、主が私に求めておられることなんだ。そう示されたのです。

……私の人生を、今日に至るまで一步一步誠実に導き、あわれみによって支え続けて下さった主に、心から感謝と賛美をささげます。そしてその主が、今も、そしてこれからもずっと、御国に着くその日まで、私を導き、この宣教の道を歩ませて下さる、と確信し、主の前で告白します。

降りていく愛 (ネリサラン내리사랑)

韓国語のことわざに「ネリサラン내리사랑」という言葉があります。直訳すると「降りていく愛」となります。これは「親の愛は、その恩があまりにも大きくて、親に返し切ることができないので、その愛を子どもたちに流していく。愛は下の世代へと降りていくものだ」という意味です。この言葉は韓国語の中でも、私が特に心にしみる言葉です。なぜなら、私は韓国人宣教師からその愛を受けた者だからです……。

私を教会に初めて導いてくれたのは、同じ大学の同級生で韓国人のチョン・トゥルヨンさんでした。(彼は今、東京の八王子で牧師をしています。) 私が韓国語を学びたいと言うので、彼が私を、韓国人留学生が集まっている東京の教会に誘ったのです。チョンさんは、私を誘う6か月も前から、私の救いのために祈るように教会のメンバーたちに頼んでいたのです、みんなはずっと祈って待ちました。私が初めてその教会に行ったとき、みんながどんなに喜んで私を熱烈歓迎したか、そして私がどんなに愛されたか、想像できるでしょうか？ 私はそのとき、神様について何もわからなかったけど、彼らのただ中にある主の愛を肌で感じて、そのままイエスを信じるようになりました。そのとき体験したイエス様の愛は、言葉で言い表すことができません。思い出すと、今でも涙が出そうになります。間もなくして、私は聖書のみことばを通してキリストによる救いの価値をさらに確信して、すぐ献身したいと思いました。その後、私を霊的に育ててくださったのは、その教会を導いておられた金玉姫(キム・オッキ)宣教

師先生でした。金玉姫先生は母親のように、私のことを霊的息子と思って、心から愛してくださいました。ときには厳しく、そして強く訓練されました。今の私があるのは、先生の犠牲的な愛のおかげです。……ずっと後になって金玉姫先生は、脳ガンで天に召されたという知らせを聞きました。宣教が困難な中で、日本のたましいの救いのために仕え、命をささげて、一粒の麦となられたのです。先生は命をかけて弟子を育てた、真の宣教師でした……。

私はミャンマー宣教師となったとき、金玉姫先生のことをたびたび思い出しました。先生が受けた困難に比べたら、私の苦しみは何でもありません。自分が宣教師になって初めて、先生の気持ちが分かりました。先生は私のような反抗児を、よくもまあ忍耐して育ててくださったなあと思います。先生に恩返ししようとしても、先生はもう天国におられるので、できません。だから、私はその無条件に受けた主の愛を、今度は宣教地にいるたましいたちに流していく、ただそれだけです。キリストは私のために、いのちを捨てて愛しました。だから、私も宣教地の兄弟たちのためにいのちをささげるのは、当然のことなのです。それこそが宣教だと信じます。

(第1ヨハネ 3:16) キリストは私たちのために、ご自分のいのちを捨ててくださいました。それによって私たちに愛が分かったのです。ですから、私たちも兄弟のために、いのちを捨てるべきです。

(マタイ 10:8) あなたがたはただで受けたのですから、ただで与えなさい。

私は宣教の途中で、あきらめたくなることが何度もありました。その度に、天国で金玉姫先生が、いつものあの声で「伊藤、しっかりしなさい！」と叱るのが、心に聞こえてくるような気がするのです。ここで私が宣教を辞めたら、天国で先生はどんなに悲しむか。天国で多くの証人たちが、雲のように取り巻いて私を応援しているのだから、ここであきらめてはいけない。最後まで忍耐をもって走り続けよう。そう思って、再び立ち上がるのです。

……宣教は「降りていく愛」です。主よ。どうか私が、無条件で受けたこの主の愛を、宣教地にいる次世代へとバトンタッチしていくことができますように。そして天国に凱旋するその日まで、最後まで走り抜く者としてください。



写真左：大学3年生の私と、私を教会に誘ってくれたチョン・トゥルヨンさん



写真右：私を育ててくださった金玉姫（キム・オッキ）先生。私の大学卒業式に。

救いの証し（ソジョン・記）

私の家族・親戚は皆未信者でしたが、ただひとり、叔母（母の妹）だけがクリスチャンでした。その叔母が、親戚一人一人の救いのために、ずっと祈り続けてくれていました。私は小学生のとき、教会学校に通っていて、神様について良いイメージを持っていました。大学ではカトリックに行っていました。しかし、大学卒業後、日本に留学してからは、神様から離れて、勉強やバイト、そして遊びに追われる生活となりました。その中で、どうしてもないむなしさと孤独、そして将来への不安によって、自分自身が壊れていくのを感じました。それで、昔信じていた神様の存在を思い出し、求めるようになったのです。そんなとき、学校の友人に、東京にある教会に来るように誘われました。私は最初、「こんな私が受け入れてもらえるだろうか」という不安があって、行くべきかどうか、心の中で激しい葛藤がありました。しかし3か月後に、やっと決心して、その教会へ自分から足を運びました。友人や教会の人たちは、喜んで私を受け入れてくれました。そして、みんなで賛美を歌っている中で、聖霊による喜びが、心の底からわき上がって来ました。自分でもどうしてもわからず、その感情をおさえることができませんでした。生きておられる主の臨在を体験し、「自分はキリストによって新しく生まれ変わったのだ」というのを感じました。そして、私が主に立ち返るのを、主は長い間待っていられたのだ、ということがわかりました。私はイエス・キリストを信じて、はっきりとクリスチャンになったのです。

その後、私の生活は全く変えられました。罪と暗やみの生活から解放されて、心に明るさが回復してきました。主がいつも共にいる、ということがわかって、うれしくてしかたがありませんでした。賛美を通して、心が満たされました。今までの人生の色々な疑問に対して、答えを見出しました。そして、さらに主を求めて飢え渴くようになりました。学校（服装デザインの専門学校）でも、先生や友人たちの評価を気にして恐れたりせずに、創造主の喜びによって自由に作品を作り、作品自体も、以前と違って、明るいイメージに変わってきました。・・・私の人生を、死から命へと移して下さった主に心から感謝をささげます。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたし（イエス・キリスト）のこことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。」（ヨハネ5：24）

宣教師への召命の証し（ソジョン・記）

クリスチャンになった私は、教会で弟子訓練を受けて、個人伝道や初信者養育の働きに参加しました。その中で、日本の失われた魂に対する救霊の思いが与えられました。また、祈禱会で世界の国々のためにとりなして祈るうちに、「自分もいつかは世界宣教のために働きたい」と願うようになりました。同じアパートに住んでいたマレーシアの友人や、バイト先で一緒に働

いていたミャンマーの人たちの救いのために祈り、その国々のために重荷をもってとりなして祈っていました。私が帰省のため韓国に一時帰国していたとき、プサンにある大きな教会の青年礼拝に参加しました。そのとき説教した先生は、宣教の証しを話してから、最後に「世界宣教のために人生をささげる人は立って下さい」と呼びかけました。私は、一瞬とまどいましたが、勇気を出して立ち上がりました。その時、私の人生を治め導いておられる主の力強い御手を感じて、目から涙があふれました。そして、もう一度はっきり、「この私の人生を、宣教の御用のために用いて下さい」という祈りをささげたのです。その後、ディボーションの中で、使徒 9:15 の「行きなさい。あの人是我の名を、異邦人、王たち、イスラエルの子孫の前に運ぶ、わがしの選びの器です。」のみことばが示されました。それによって、主が私を世界宣教に召して下さいているのだ、ということを確認できました。

しかし、その後は、様々な試練が続きました。経済的欠乏、就職難、職場で信仰を証しするときに受ける迫害、親の信仰への反対、教会での弟子養育の困難、失恋……。しかし、それらの試練の中で、自分の献身の動機が純粹にされ、信仰がテストされ、鍛えられていきました。周囲の状況は何もなくても、主の約束だけを握って、忍耐して、前進することを学びました。また、この時期に、セル伝道と聖書の学びの働きを通して、未信者たちが救われ、変えられていくのを見て、福音の力を体験しました。それから、マレーシアへの短期宣教旅行を通して、世界宣教のビジョンを再確認することができました。

そのようなとき、ある先生から、伊藤先生との交際を勧められました。伊藤先生は同じ教会でよく知っていたのですが、結婚の相手だとは思っていませんでした。しかし、2人で話してみると、意外と気が合って、心に平安を感じました。そして何よりも、世界宣教へのビジョンが共通していました。私は、これは主の導きであると確信しました。そして、交際を始めて1年もたたないうちに、結婚式に至りました。主のあわれみに感謝します。結婚後は、2人で毎晩手を取り合って「私達を世界へと遣わして下さい」と、切に祈り続けました。そして、その1年半後、その祈りに主は突然応えて下さり、ミャンマー宣教への道が開かれたのです。

ミャンマーでは、私の顔や肌の色がミャンマー人と似ているせいか、いつもミャンマー人と間違えられました。以前は劣等感を持っていた点が、宣教地では有利に用いられることを知り、私をこのように創造して下さいた主に感謝しました。日本で服装デザインをしていた経歴を生かして、「ファッションデザイナー」としてビジネスビザを取ることができました。また、現地教会でも、ワークショップ・ダンスの服作りに協力できました。ミャンマーに行く前、生後5か月の息子、雄基を連れて行って子育てすることが、宣教の支障になるのでは、と心配しました。しかし、雄基がいることで、むしろ近所の主婦や子どもたち、学生たちが心を開いてくれて、彼らと親しくなることができました。雄基はまさに、キリストの親善大使の役割を果たしてくれたのです。また、伝道し養育する学生も、多くは女子学生でした。女子寮の中に入って、霊的母親として慰めてあげたりして、夫にはできない私だけの役割があるのだ、ということがわかりました。

このように、宣教の現場での数々の出来事を通して、主の恵みを体験できたことを、主に感謝します。そして、私たちがこの恵みを日本の教会・クリスチャンたちにも証しして、祝福を分かち合うことによって、さらに多くの人々が世界宣教のために立ち上がり、用いられていくように、心から祈ります。

宣教は大変？

以前、ある日本の牧師先生と話をしていた時のことです。その先生は私に「宣教なんて大変だよ〜」と言いました。「飛行機で何時間もかかる、お金もかかる、外国での食事、衛生、暑さ、言葉の違い、治安の悪さ……全部大変だ。私にはとてもじゃないけど、できませんね〜」と言うのです。それで私が「そんなことないですよ。住めば都で、行けば主に守られて、祝福がありますよ」と、いくら説明しても、彼は「大変だ大変だ」をくり返すばかりでした。私は、がっかりしてしまいました。

後で一人になったとき、私はさっきの会話を思い出して、気づいたことが一つありました。それは「その先生には宣教のビジョンがないから、全てが大変に思えるのだ」ということです。もしビジョンがないのに、宣教地で苦勞ばかりしていたら、それは本当に大変でしょう。全部が犠牲、重荷、義務、イヤイヤ、しかたないけどやらなければならないもの、と感じるでしょう。そんなふうに考えていたら、当然宣教に行く気にはならないでしょう。

しかし、もし宣教がその人のビジョンだったら、どうでしょうか？ 宣教がビジョンだったら、どんな困難があっても、それはその人にとって、乗り越えるべき課題、克服すべきチャレンジとなります。もちろん大変かもしれませんが、それでイヤだからやめる、とはならないのです。現地に適応すること、新しい言語を習得すること、迫害の中で伝道することさえ、情熱となり、喜びとなります。なぜなら、そのときの困難だけを見るのではなく、その先にあるビジョン実現の希望を見続けているからです。これがビジョンのある人の強みであり、力なのです。

宣教に出るとき、もちろん大変なことはたくさんあります。現実の問題を直視して、考えることも必要です。しかし、宣教について話すときに、その大変さばかり言わないでください。その先にある希望、可能性、神の栄光のビジョンを語ってください。そのとき、宣教は喜びとなり、祝福となります。

私もミャンマーで、大変なことが「たくさん」ありました。ビザを取ること、子どもが5か月の赤ちゃんのときに一緒に連れて行ったこと、40度を超す暑さで寝られなかったこと、伝道しても中々救われる人が起こされなかったこと、お金がなくて帰国すべきか迷ったこと、教会から理解してもらえなくてつらかったこと、孤独、無力感、あせり、落胆、将来への不安……。やめようと思ったことが何度もありました。でも、大変なことがある度に、私は神の奇跡的な助けを何度も体験しました。大変さの中で、神様の愛と真実さを知りました。そして、神様はいつも御言葉をもってビジョンを回復させ、私に希望を与えてくださいました。だからこそ、あの困難の中でも途中であきらめないで、今まで続けて来ることができたのです。私が今、宣教しているのは、主のビジョンのおかげなのです。

あなたにとって「宣教」とは何ですか？ ただの大変な義務ですか？ それともビジョンですか？ ……ビジョンをもって宣教を見てください。どんな大変な中にあっても、信仰をもってビジョンを見続けて、それを宣言してください。そうすれば、神のビジョンがあなたの人生の上に実現します。

あなたは宣教者タイプ？！チェックテスト

以下の質問に、「はい」か「いいえ」で答えてください。

- 1, 海外旅行に行くのが好きだ。(はい／いいえ)
- 2, 外国人と話すのは楽しい。(はい／いいえ)
- 3, 世界地図をよく見る。(はい／いいえ)
- 4, 外国語を学ぶのが好きだ。(はい／いいえ)
- 5, 自分の賜物を海外で生かしたい。(はい／いいえ)

- 6, 国際協力のボランティア活動に関心がある。(はい／いいえ)
- 7, 初めての食べ物でもよく食べる。(はい／いいえ)
- 8, どこでも良く寝られる。(はい／いいえ)
- 9, 新しい環境に慣れるのが早い。(はい／いいえ)
- 10, よく引越しする。(はい／いいえ)

- 11, 教会に新しく来た人に自分から話しかける。(はい／いいえ)
- 12, 初めて会う人ともよく話せる。(はい／いいえ)
- 13, 人前で話すのは苦手ではない。(はい／いいえ)
- 14, 知り合いに伝道して、イエス様を信じるようになった人がいる。(はい／いいえ)
- 15, 良いものを見つけると、それを他の人によく勧める。(はい／いいえ)

- 16, 「あなたは変わっているね」とよく言われる。(はい／いいえ)
- 17, みんなと違ったことをするのが好きだ。(はい／いいえ)
- 18, 何か新しいことにチャレンジしたい。(はい／いいえ)
- 19, 考えるより、まず行動する。(はい／いいえ)
- 20, 性格は楽観的だ。(はい／いいえ)

(1) 「はい」が 15 個以上だった人

あなたは典型的な宣教者タイプです！「今すぐにでも短期宣教旅行に行きたい」と思っているかもしれませんね。でも、準備や下調べも大切。ぜひ WUPM Japan に問い合わせてみてください。あなたにぴったり合った、すてきなプランを一緒に考えましょう！

(2) 「はい」が 10 個以上 14 個以下だった人

あなたは、素晴らしい宣教者になる可能性があります。現代はフルタイム教職者の宣教師ばかりでなく、自分の職業を持ちながら、それを用いて宣教するテントメーカー宣教「者」の時代

です。まずは世界宣教について知ることから始めてみましょう。宣教に行った人の体験談を聞いたり、宣教について本やインターネットで調べたり……。わからないことや質問があったら、WUPM Japan がお手伝いします。ぜひ連絡してください。

(3) 「はい」が9個以下だった人

あなたは、もしかしたら「自分が宣教者になるなんて……」と思っているかもしれません。今まで歴史上の多くの宣教者たちも、最初はそうでした。しかし、どんなに困難があっても、他人から「あなたは向いていない」と言われても、あきらめずにチャレンジし続けて、すばらしい宣教者となったのです。どうか宣教について、まず祈ってみてください。そして、主の御声と導きに従ってください。宣教者を送り出して支える人となる可能性もあります。どんな形であっても、主はあなたを宣教に用いることができます。WUPM Japan は、そんなあなたを応援します。世界宣教のために、何か一緒に行動しましょう！

宣教のハードルを下げる

私が世界宣教の必要性について話すときに、いつも心がけているのは「宣教に行くことに対する心のハードルを下げる」ということです。なぜかと言うと、日本人クリスチャンには、世界宣教と聞くと「自分には難しくてハードルが高い」と思い込んでいる人が、非常に多いからです。例えば、こんな感じです。

「世界宣教は、霊的に成熟して献身したエリート、一部の特別な人だけがするものだから、自分とは関係がない。」

「自分はクリスチャンとしてまだまだ未熟だから、宣教に行くなんてとんでもない。」

「宣教に行くなら殉教の精神で、現地で万が一死ぬことがあっても構わないという覚悟を持って、遺書を書いてから行くべきだ。」

「自分は英語も苦手だし、もう年だし、気候や食べ物や生活環境が違うと大変だから、宣教なんて無理だ。」

「今自分がやることだけでも忙しくて、時間もお金もないのに、宣教に行く余裕なんてない。」

「自分なんて宣教地に行っても迷惑になるだけだ。」 などなど……。

そんなふうに考えていたら、ハードルが高すぎると感じられ、「恐れ」にしばられて、宣教に行こうとはしなくなるでしょう。

だからこそ私は、そのハードルを極力低くしようとして、こう言うのです。

「何か霊的にすぐれた、ハドソン・テラーのような人でなくても、今の時代は誰でも、普通

の人でも海外旅行に行けますよ。」

「昔みたいに船で何か月もかけて行って、ジャングルで生活して、そこで骨をうずめるわけはありません。」

「飛行機で行けて、1週間だけで、ホテルもトイレもきれいですよ。」

「食べ物や水も、私が安全な所だけを紹介するから大丈夫ですよ。」

「英語ができなくても、ちゃんと通訳者がいるし、グーグル翻訳もあるから何とかできますよ。」

「未信者でも、年配の人でも、ミャンマーの奥地に観光旅行に行っていますよ。」

「だから、悲壮な覚悟なんて持たないで、気楽にフラッと来てください！」

・・・実際、私がミャンマーにいた頃、実に色々な人が私の所まで来てくれました。中には霊的にまだまだと思えるような人や、未信者も何人もいました。でも、彼らは宣教地に来て、神様が生きて働かれるのをナマで見て体験し、グリーンと成長して帰っていきました。

・・・もしハードルが高すぎたら、誰も宣教に行こうとはしません。でも最初のハードルが低ければ、何とか一歩踏み出すことができます。それで一度でも宣教の味を体験したら、必ずまた行きたくなります。そして次にはもう少し高いハードルでもチャレンジしてみよう、という気になるのです。

私は一人でも多くの人に世界宣教を体験してほしいと切に願っています。だからこそ、今まで色々な人を現地で受け入れて来ました。そうすることで、私は日本のクリスチャンに仕えることができるからです。日本人を世界宣教に動員することによって、日本の教会に大きな祝福をもたらすことができると、私は信じているのです。

この記事を読んで「ならば一度宣教に行ってみようかな」と思った人がいますか？ぜひ **WUPM Japan** までお問い合わせください。あなたの宣教の道が開かれるように、心からお祈りします。

(短期宣教旅行を希望する方は、下記のリンクで募集要項をご覧ください。)

<https://wupmjapan.kyokai.jp/2023-1025-692/>

ミャンマー語、これだけ知っていれば大丈夫！

- (1) こんにちは。・・・ミンガラバー
- (2) ありがとうございます。・・・チェズ ティンバーデー
- (3) 私の名前は（ ）です。・・・チャノウ ナーメー（ ） ピPPERデー
→女性の場合は、チャノウではなくて、「チャマ」と言います。フルネームで言わないで、簡単に短くして下さい。
- (4) 名前は何ですか？・・・ナーメー ベーロー コーダレー？
- (5) お会いできてうれしいです。・・・ティヤダ ワンダーバーデー
- (6) 大丈夫です。・・・ヤーレー
- (7) 大丈夫ですか？・・・ヤーラー？
- (8) 良いです。・・・カウネー
- (9) 元気ですか？・・・ネーカウンラー？
- (10) おいしいです。・・・サーロー カウネー
- (11) またお会いしましょうね。・・・ピャン トウイメーノー
- (12) いくらですか？・・・ベラウレー？
- (13) はい。・・・ハウテー
- (14) いいえ。・・・マハウブー
- (15) ありますか？・・・シーラー？
- (16) あります。・・・シーデー
- (17) ありません。・・・マシーブー
- (18) トイレはどこですか？・・・エインダー ベマレー？
- (19) イエス様を信じて下さいね。・・・イエシュペヤー ヨンジーバーノー
- (20) 神様の祝福がありますように。・・・ペヤーシン カウンジー ペーバーセー
→教会であいさつするとき、よく使います。
- (21) 1, 2, 3 (写真を撮るときなど)・・・ティツ、ニツ、トン
- (22) ゆっくり・・・ピーピー
- (23) 先生・・・セヤ (女性のときは、セヤマ)
→名前の前につける。例えば、「セヤ・いとう」というように。

伊藤仁 略歴

- 1972 年 茨城県に生まれる。
- 1993 年 キリストを信じ受け入れる。
- 1994 年 韓国 YWAM (Youth With A Mission) の弟子訓練学校 (DTS) 卒業。
- 1996 年 専修大学法学部卒業。
- 1999 年 聖書宣教会・聖書神学舎卒業。
- 2001 年 本田弘慈師から牧師按手礼を受ける。
- 2003 年 妻のソジョン宣教師と共にミャンマーで宣教活動始める。
- 2016 年 世界未伝道部族宣教会 (WUPM, World Unreached People Missions) の派遣宣教師となる。
- 2020 年 日本に帰国。
- 2023 年 2 月 WUPM Japan (世界未伝道部族宣教会日本支部) を立ち上げる。
- 2023 年から北海道石狩市に住み、CFNJ 聖書学院で宣教学を教える。
- 家族: 妻ソジョン、子ども 7 人、雄基 (ゆうき)、愛希 (あき)、聖治 (せいじ)、光児 (こうじ)、美香 (みか)

伊藤ソジョン 略歴

- 1970 年 韓国全羅南道余水市に生まれる。
- 1993 年 プサンの東亜大学衣類学科を卒業後、日本へ留学する。
- 1995 年 友人に誘われて教会に行き、クリスチャンとなる。
- 1996 年 東京の文化服装学院を卒業。
- 1997 年 東京のファッション会社に就職。教会スタッフとして奉仕する。
- 2001 年 伊藤仁牧師と結婚。
- 2002 年 息子、雄基が誕生。
- 2003 年 家族 3 人でミャンマー宣教に行く。
- 2016 年 WUPM (世界未伝道部族宣教会) 派遣宣教師となる。
- 2024 年 CFNJ 聖書学院指導者養成コース (1 年間) を卒業、牧師按手を受ける。
北海道石狩市でキッズ・クラブ (子ども伝道ミニストリー) を始める。



伊藤 仁 (ひとし)・ソジョン

雄基 (ゆうき) 愛希 (あき) 聖治 (せいじ) 光児 (こうじ) 美香 (みか)

(活動内容) 私たちは 2003 年からミャンマー宣教を始めました。2015 年からは特に「未接触・未伝道部族」(教会、宣教者、聖書翻訳がない部族)に焦点を合わせて宣教するために、奥地のシャン州ニャウンシェ市に引っ越しました。そしてミャンマー人牧師であるバザ先生と協力して「ガユナー (あわれみ) 教会」を開拓しました。未伝道部族の子どもたちを寮に住ませながら弟子育成して、彼らの故郷の村に伝道しています。2020 年からはコロナの影響で日本に一時帰国して、その後 2021 年 2 月にミャンマーで軍事クーデターが発生したため、今はミャンマーに戻れない状態です。北海道に住みながら、日本の諸教会を訪問して奉仕しています。

(祈禱課題)

- 1, ミャンマーの自由と安全が回復し、本当の民主化がなされるように。
- 2, 主の導くふさわしい時と方法で、ミャンマー宣教を再開できるように。
- 3, 日本にいる間、日本の諸教会と共に協力して宣教の働きができるように。
- 4, 家族 7 人が健康で、喜んで主に仕え、子どもたちの信仰が成長するように。

WUPM Japan

(World Unreached People Missions Japan)

世界未伝道部族宣教会 日本支部



WUPM は、2008 年に韓国で設立された国際超教派宣教団体です。まだ福音を一度も聞かないまま残されている全世界の未接触・未伝道部族を最優先に福音化することが、私たちの目的です。2021 年には韓国忠清南道ダンジン市に WUPM 宣教センターを建設しました。日本支部は、ミャンマー宣教師の伊藤仁を代表として、2023 年から始まりました。

世界 17 か国に 39 名の宣教師を派遣しています。(2024 年現在)

(アジア) ミャンマー、カンボジア、スリランカ、インド、ラオス、バングラディシュ、インドネシア、パプアニューギニア、モンゴル、トルコ

(アフリカ) ケニア、ルワンダ、ウガンダ、チャド、カメルーン

(中南米) メキシコ、アルゼンチン





(WUPM の宣教師たち)

WUPM Japan では、以下のような活動を行っています。

- (1) 宣教師の発掘・訓練・派遣
- (2) 短期宣教の案内
- (3) 世界宣教セミナーの開催
- (4) 未伝道部族での教会開拓支援

WUPM Japan の活動は、皆様の献金によって支えられています。日本の教会とクリスチャンたちが世界宣教に出て行くために、祈りと献金によってご支援くださいますよう、どうぞよろしくお願いいたします。また、宣教師志願者、協力教会、ボランティア・スタッフを募集しています。短期宣教案内や宣教セミナー開催も受け付けています。問い合わせは下記の連絡先までご連絡ください。

(E メール) wupmjapan@gmail.com

(献金振込先) ゆうちょ銀行 記号 10520 番号 2015181 イトウ ヒトシ

(他金融機関から振り込むとき) ゆうちょ銀行(店名) 〇五八

(読み方) ゼロゴハチ (店番) 058 (普通預金) 0201518 イトウ ヒトシ

WUPM Japan ホームページ

<https://wupmjapan.kyokai.jp>



YouTube チャンネル「イトジン」(伊藤仁の説教 講義など)

<https://youtube.com/@mandalay629>

WUPM 国際本部ホームページ (韓国語) www.wupm.org